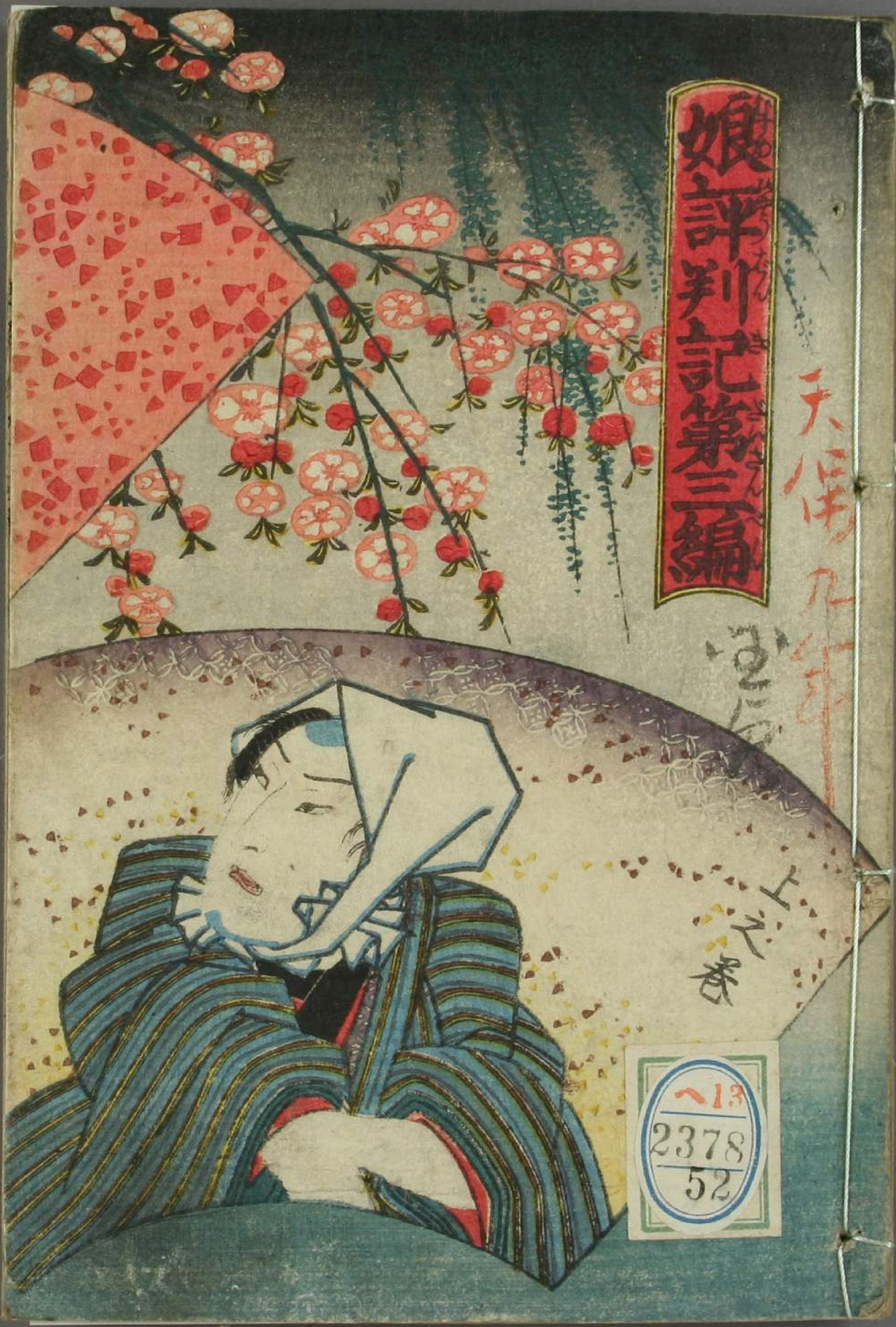


娘評判記第三編

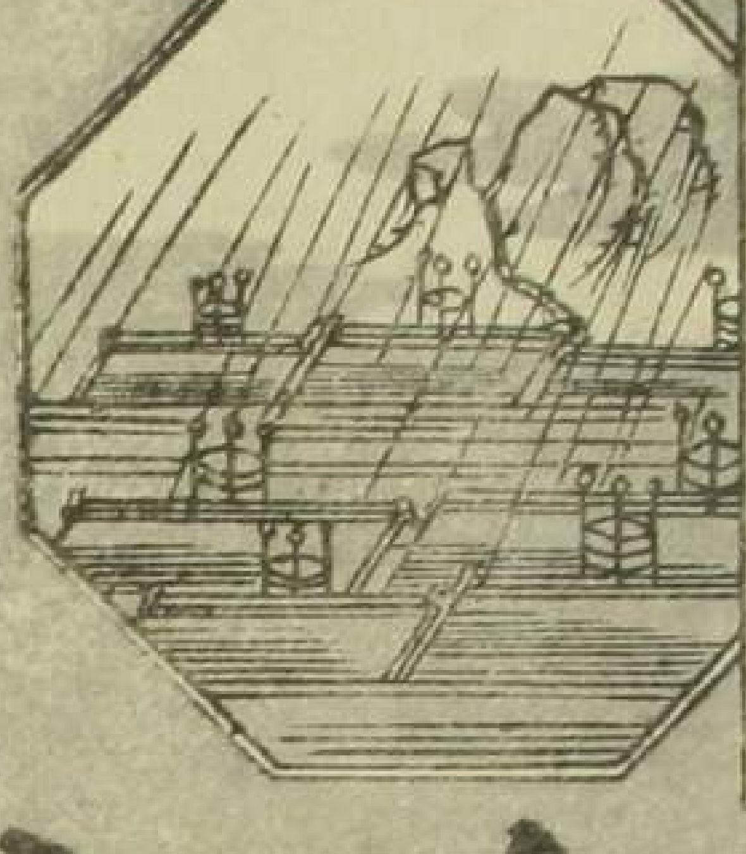
天保九年

[illegible]

上之巻

へ13
2378
52

へ 遠13
2378
52

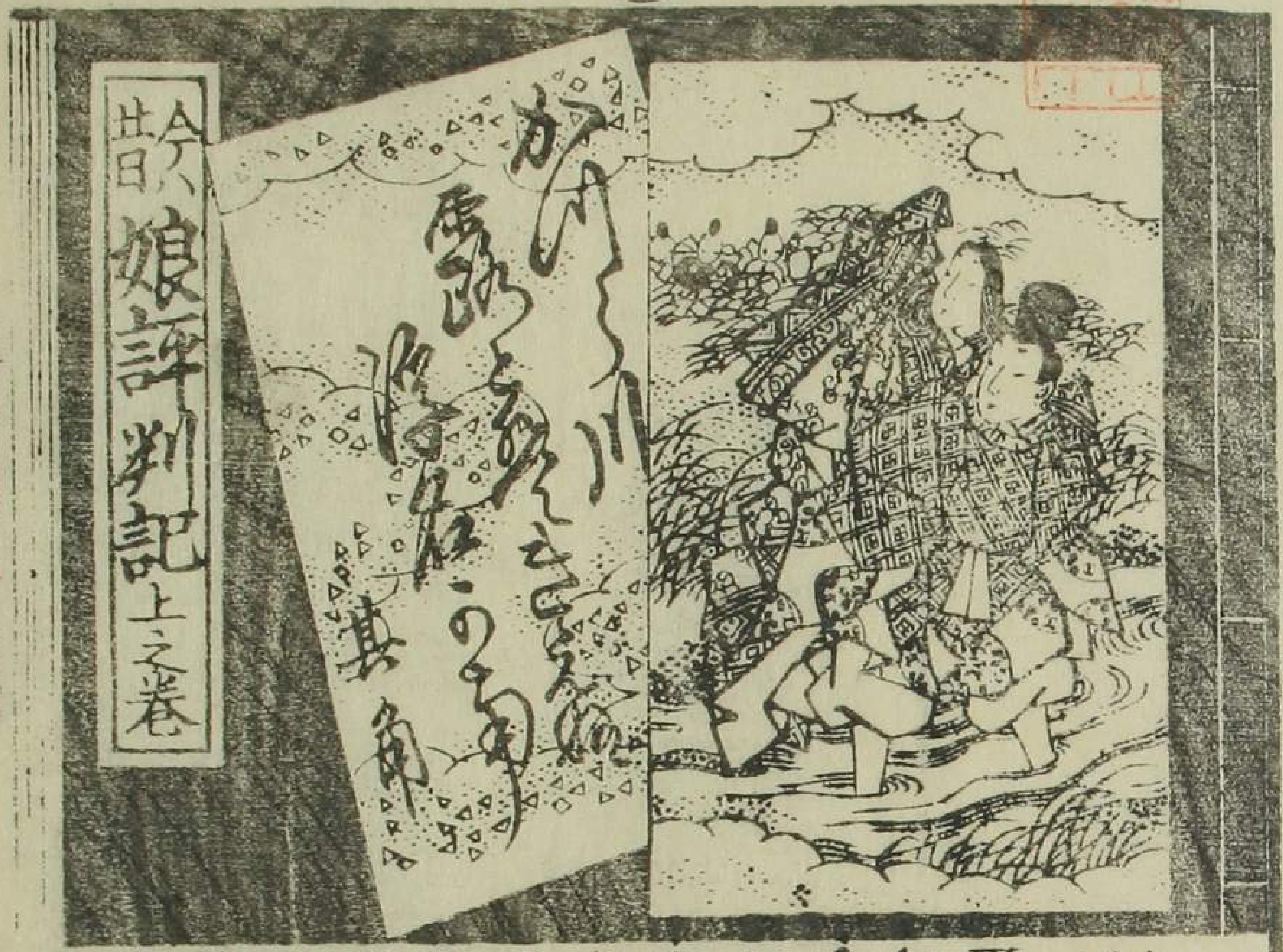


今ハ昔 娘評判記（むすめひやうばんきさんべん）三編

合巻 三冊
全本 六冊

山東庵京山作
香蝶樓國貞画

戊戌春新版 上冊
芝神明前三嶋町
和泉屋市兵衛梓

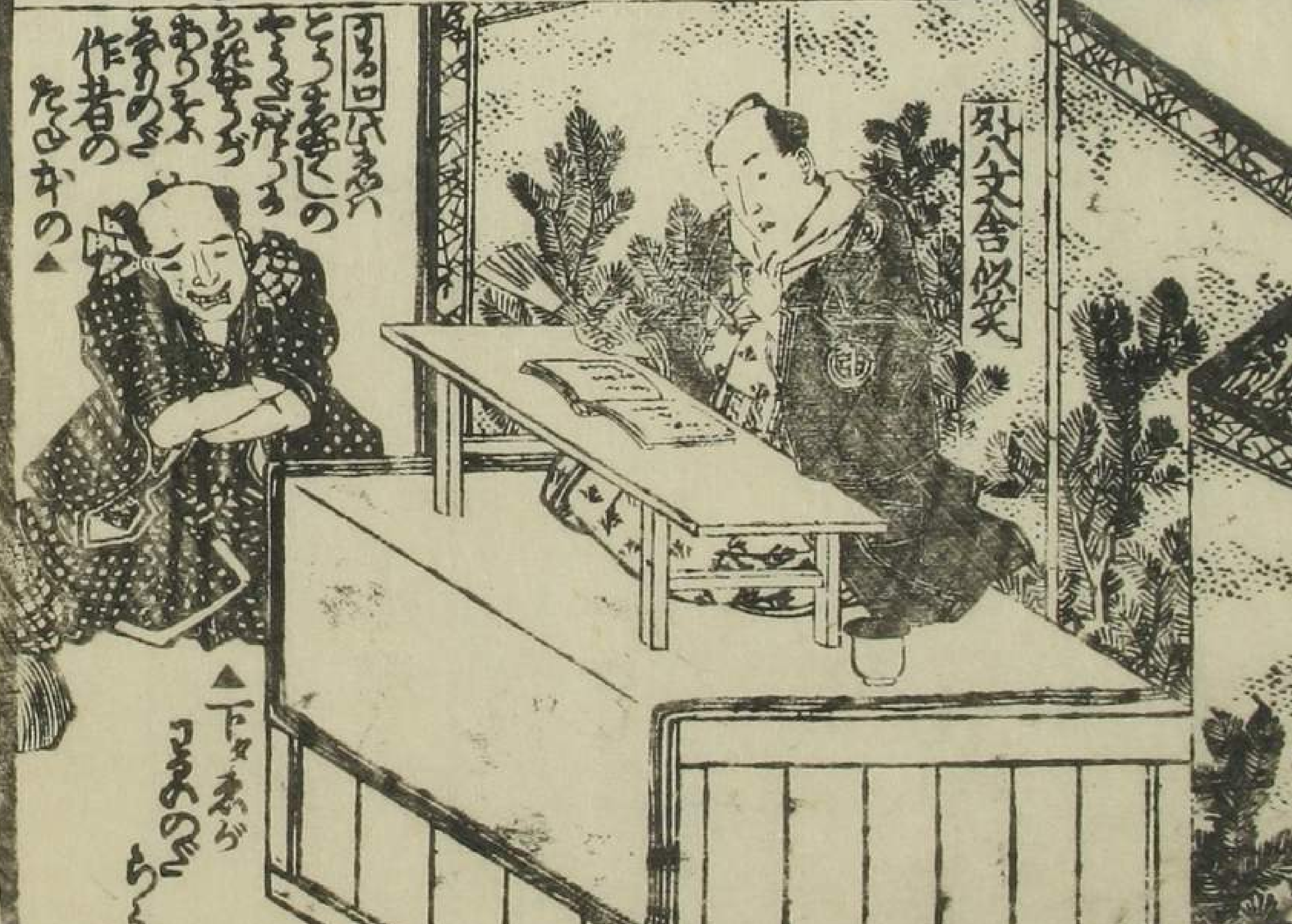

今ハ昔 娘評判記 上之巻
かわ川 [illegible]

今ハ昔 娘評判記第三編

極上中下（六冊合巻） 信濃屋八五郎

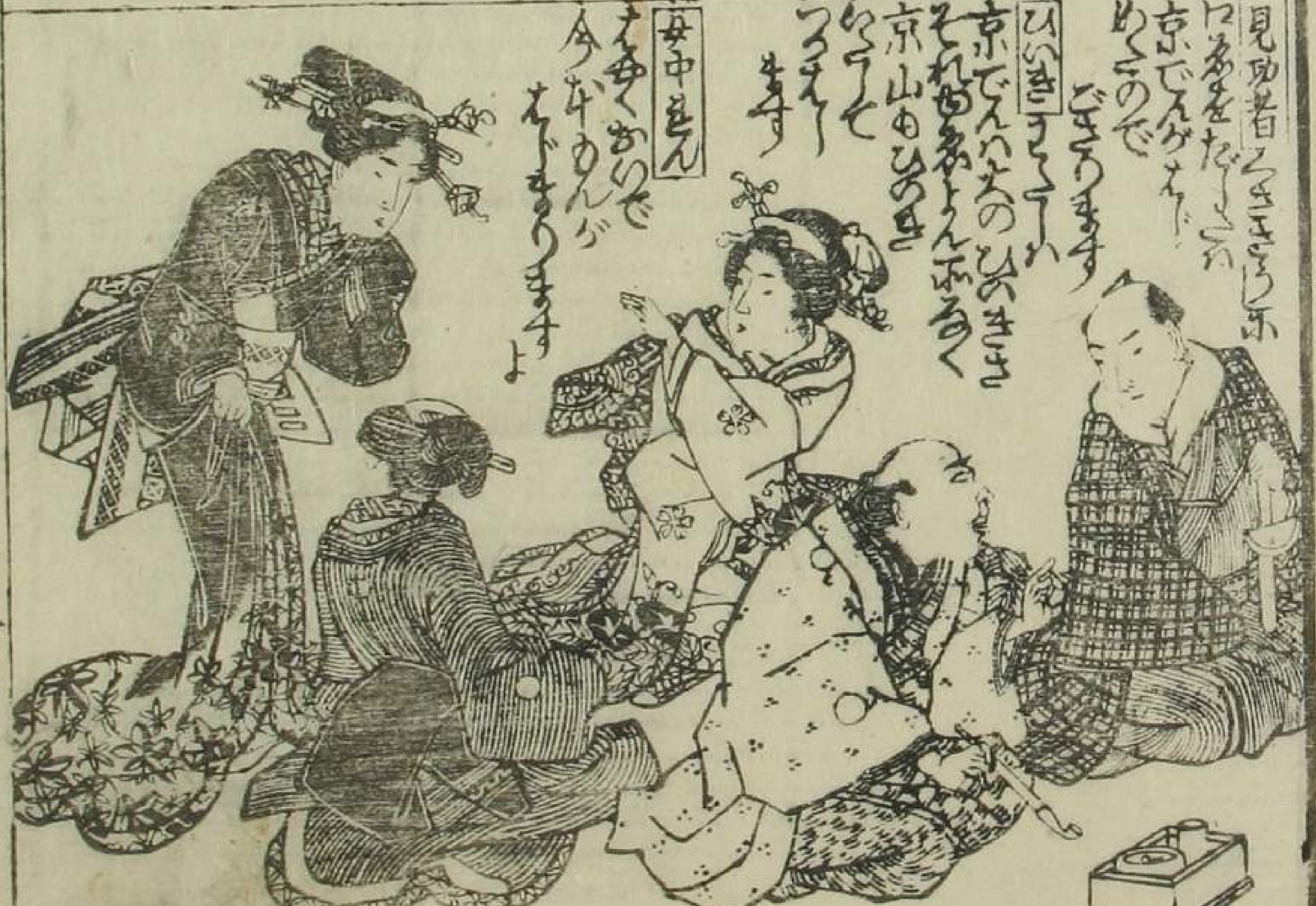
頭取 娘評判記は[illegible]
初へん二編まで[illegible]当年の三
へんは皆様の御ひいき[illegible]でござり
升 **ひいき** [illegible]
たのむ **わる口** [illegible]
[illegible]
の[illegible]
[illegible] **若い者** [illegible]の作
[illegible]
[illegible] **女中さん** [illegible]
の[illegible] **頭取** 今で川の[illegible]
京の五条坂[illegible]
の[illegible]

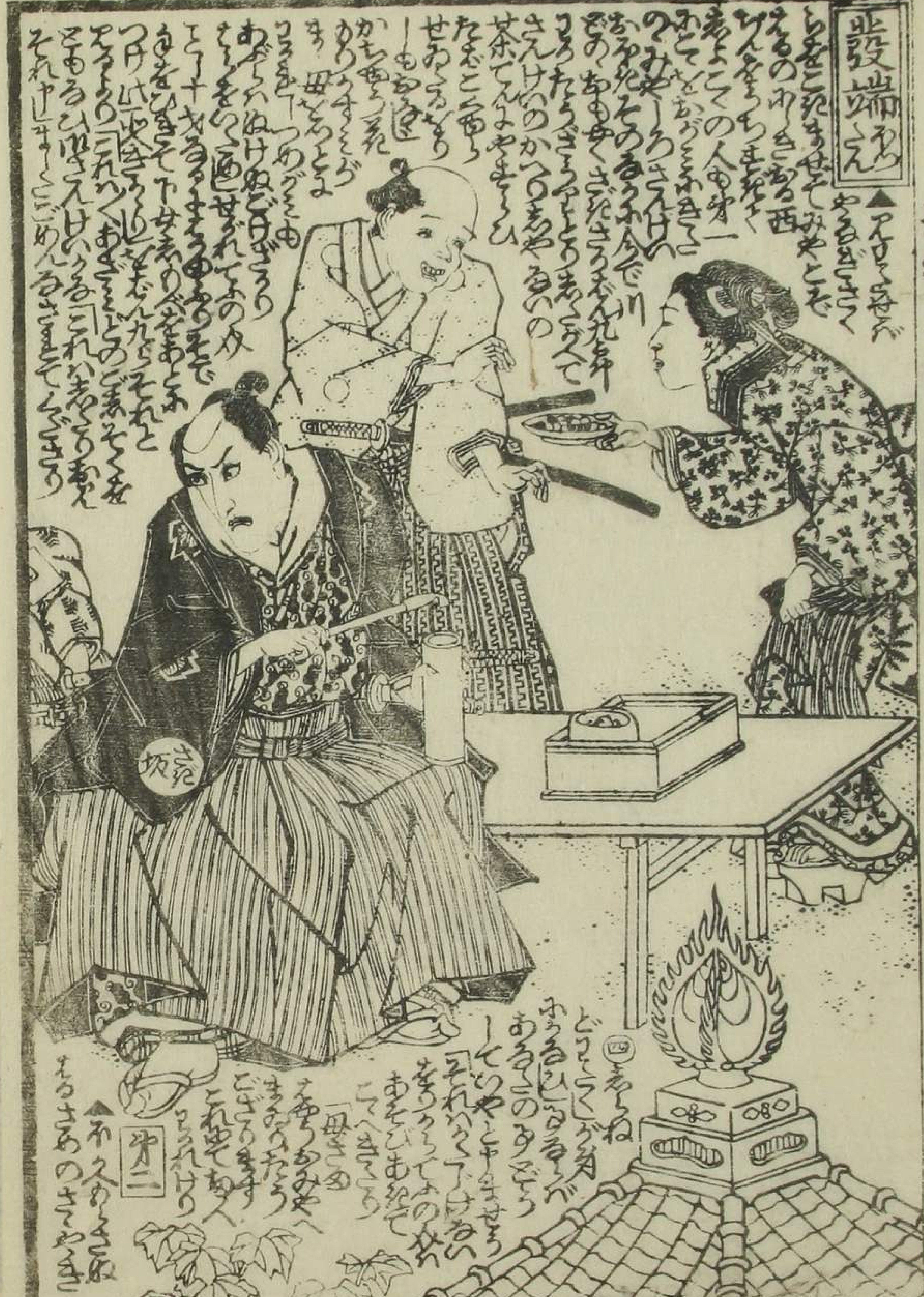
かくしよそながらひとまづひふきて匠にあまきち
ぞうひふきうちまちをかりがねやへでひりのふたりのあ
ながてそおそすまきへまちせうまなかでそま
きまへおかけでおるなへかすまきてらひらえ
まそとかくまちやうらむまちたち人情さも
あをしこそあ人くるをとかけおちしてかなま
まま月たるものをそうこおやそ子そのごふちて
むなりくるまちうつ【女中まん】ゐのそをまくぶろ
こぼれますよ【するロ】京山が作は馬琴や種
彦とちがつてかゝへまへまがごで殺るやうぐえの
ちうねんあつッかきづめりやまをうけくはせう
ござせ【評判】さぞおや子のきまぎぐらを地義
だろのだろりふたのまでそうてまでおもち
おひきくてひとつまをまぜふ弟どもこの人と
とうまよんべごろじのつゑをそうけるもの文地ざうう
だろのさてねんとうころまでそあきせんきせあよ


するロ とちあへそう言へもしの やまさ様つき おもしろき あまりのさ 作者の たいかの▲
外八文舎紋笑
▲下々ゑが このむもの くらう

ござりる【ゑどうしや】作者の京都とうきまはし
たぞ【評判】さぞかまま二代目京馬ととまり
やうすすまかのむすめ若や少ぎ方りの附
なく京うけんさせんとふおやのことまぜうを
お若のことをうけて理をたゞもの【ひいき】
めぐつてまむすめまへよいけんでござる【女中】
【まん】あまんが心中ふでる本へのそかあいきう
でござりますよ【ゑどうしや】心中かとあの人だ
まくぶかと行ちふまえめづらしいまへ
とうぐ【するロ】作者と名がつけばあてりま
大さいゝしてまやうびまでいまふあるまで【評判】
まそもこゝろたらぎる人まさうし作者なる
でござり作くら歯牙（ゲ）ゆへのまだそうぞ
おがめんのあいてまりく

外八文舎紋笑述（亀）


見功者 ここまでしぶにあがりましたに名をたいされ京でんがそれだめぐこので ござります
ひいき うそとしれ京でんのひゐきそれもおれがひゐきにやく京山もひゐき
女中 ひとりで つゝえ ます
女中まん まあよくおいで今なかめんが あたゞまりますよ



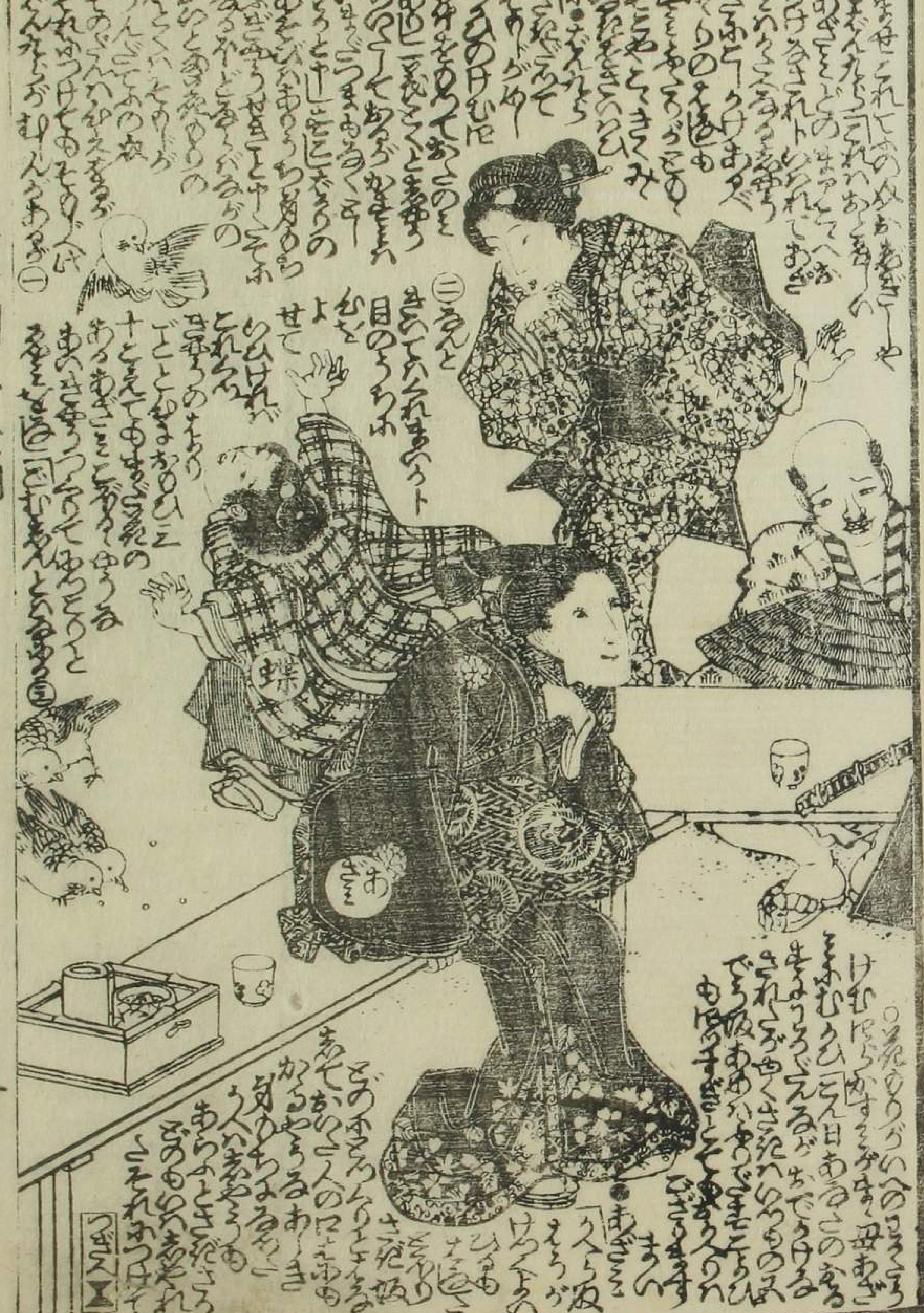
發端（ほつたん）

▲アレサ〳〵ねへさん やるまいぞこまつて

とうぜこゑ [illegible] まかせてみやうとぞ [illegible] 西 [illegible] 一 [illegible] のでみやしろさまけいは [illegible] 茶てんやまいて [illegible] たまご [illegible] 母 [illegible] 「これハ [illegible]

④ [illegible] 「これハ [illegible] 「母さん [illegible]

▲ [illegible]



[illegible] 「これハ [illegible] ①

② [illegible] 目のうちは [illegible] ③

○ [illegible] 「こん日 [illegible] ござります

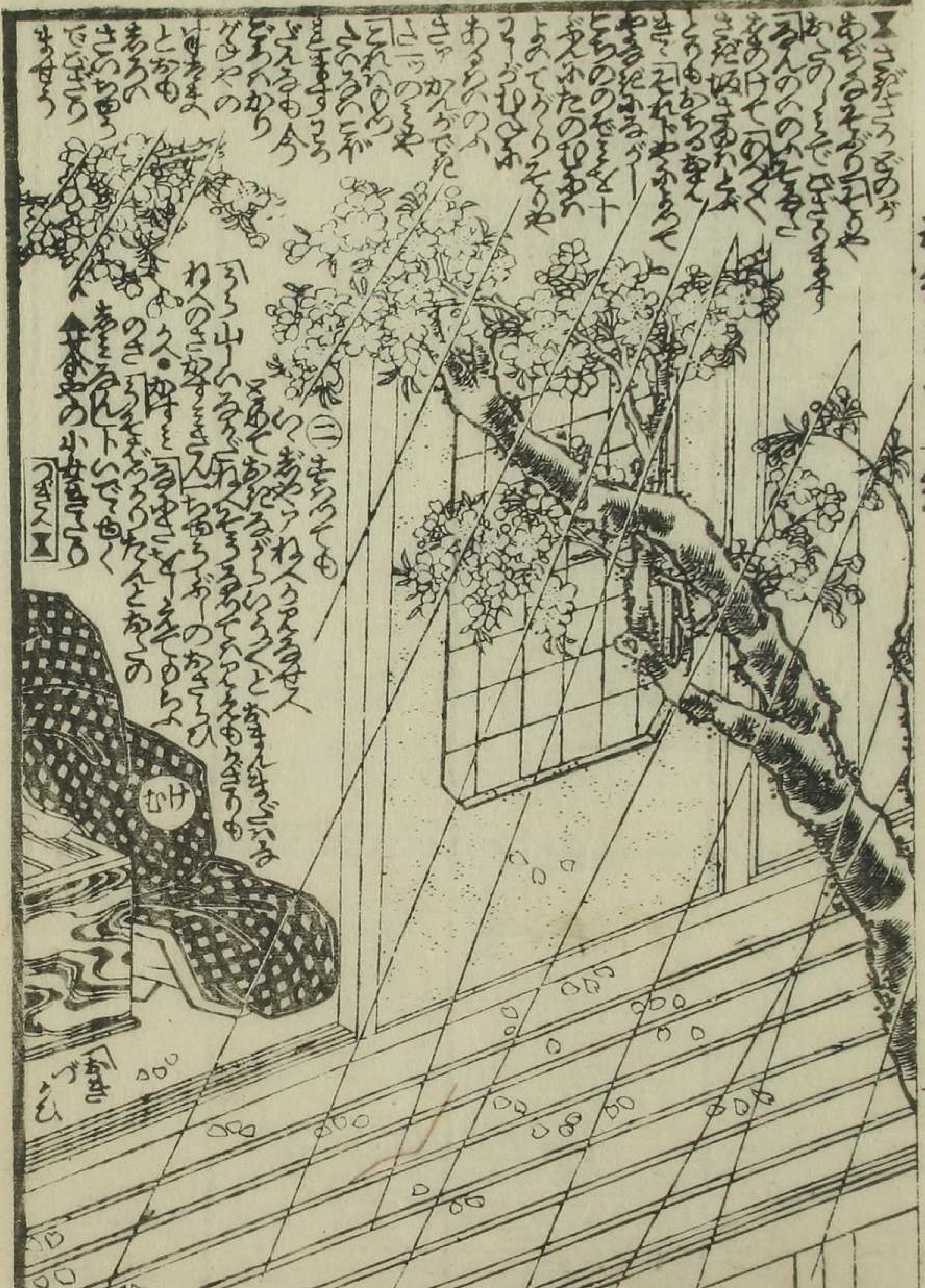
「 [illegible]

つぎへ

▼さぶらうどのが
あだなそぶりをするや
おかしいぞでござりますす
「ほんのへのかなおさ
をあけて「のぞく
さぶ妬ましければ
このもおちるあへ
きく「それどりやるで
やまぶれふるが
しちのゑまと十
ぶんぶたのむすめ
よつてがりやそれや
まづぶむなみ
あるかのゝふ
さァかんげでも
はニッのなか
「これへのおり
こなあのニ家が
とまずすなら
どんなにも今
どうれから
なみやの
はやまえ
とかも
まつの
さつのふ
ではよう
ますよう

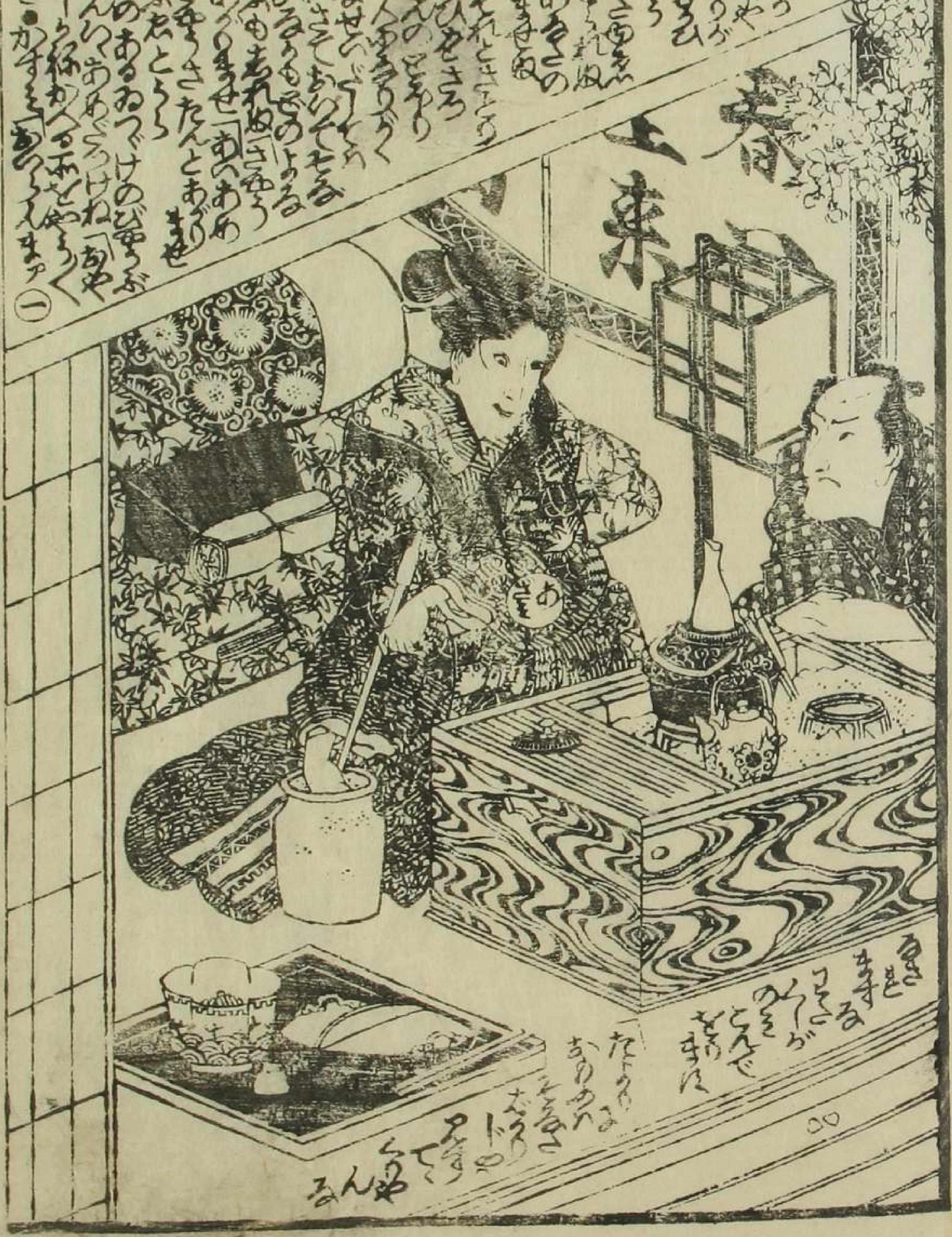
② まつりでも
くさあやねへうちへきをせつ
くあをそおだてるがいうらうとおまんがこぶさ
[illegible]
ろう山しのなぶ病
ねへのさかすきえ「ちあらゞあーのあ
久●肉すと「あきさをそ
のさ「ろそぶうりたんと
まきあんどいでもく
まつの小女郎をろう
◆つゞく▼

「おきづむ



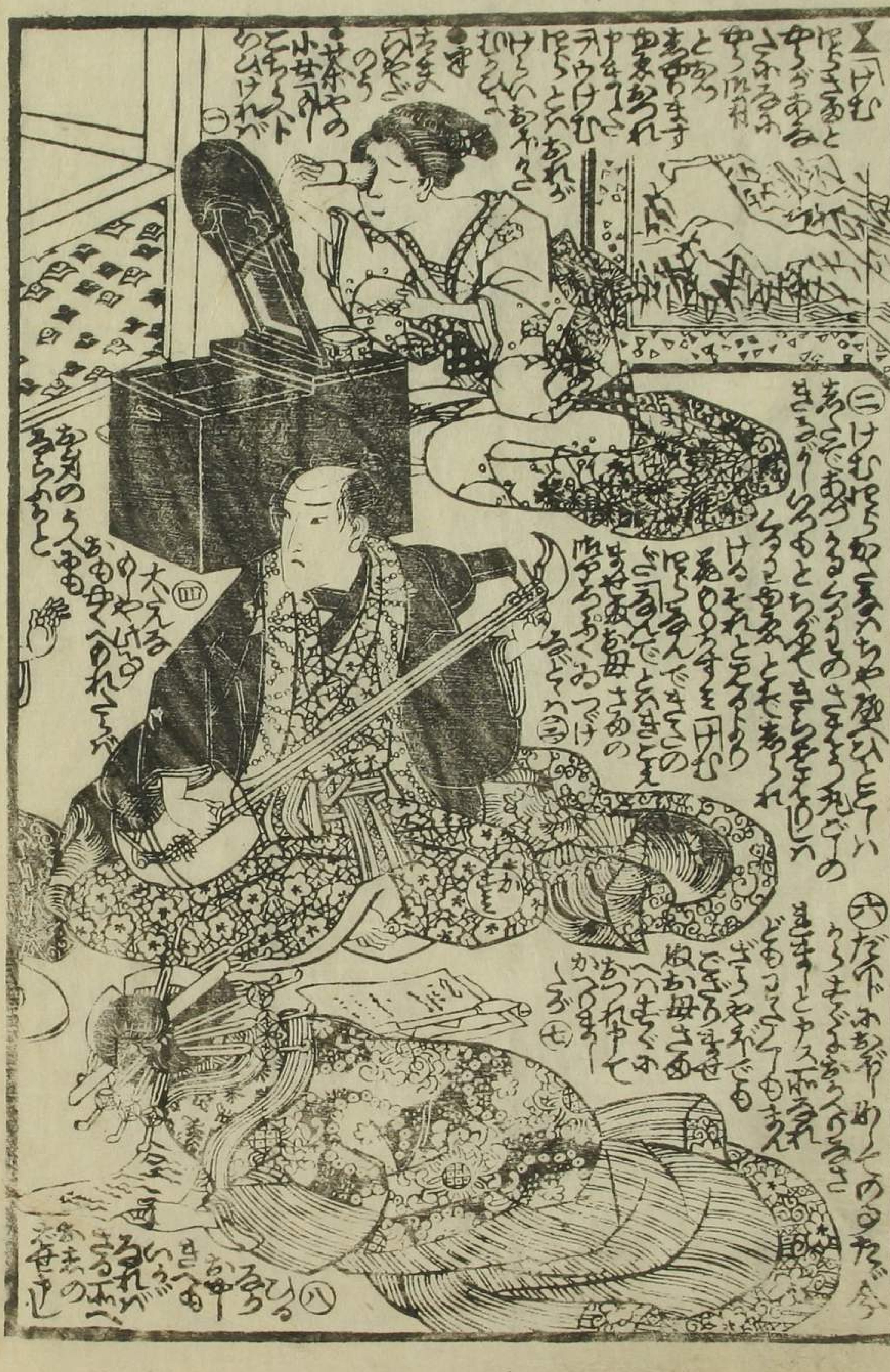
あなめがうち
ましもおし
これから久か
ありもうすの
「うそらぬでそうかが
しちの名をどや
「のべへのー おつのが
なんなりかおかしさ
おまあわりませんち
そとあらそかなにぶん
なんなもけれどもかぬ
やうかなで又ばあきこの
おとくなはまなのなさね
「のりきめめー それとまだ
さんもまきぎよかさきう
あれやまらずせんのとおり
四ぐ四めんなんぶりかく
りんぶ我けのあせへござかの
あいふすかならんおりそうせ
こときまーをひなもそのような
うれまのあかでも志れぬ「さあさう
さあろうさアあのますせ「あのあゆ
かあのすう「さあきさたんとあがりませ

第二 まぁとおまとうら
▲すちまさんのおめくつけね「あや
八九山さんようら絹かくるなんと安うく
そのあくくのさ●かず喜「あつらえまア ①



きさとますゐ
つくが
みさとんで
きまりませ
まりまん

「たよりは
おりあれ
これさあ
すこし
ドくの
みすく
てくる
んゑ



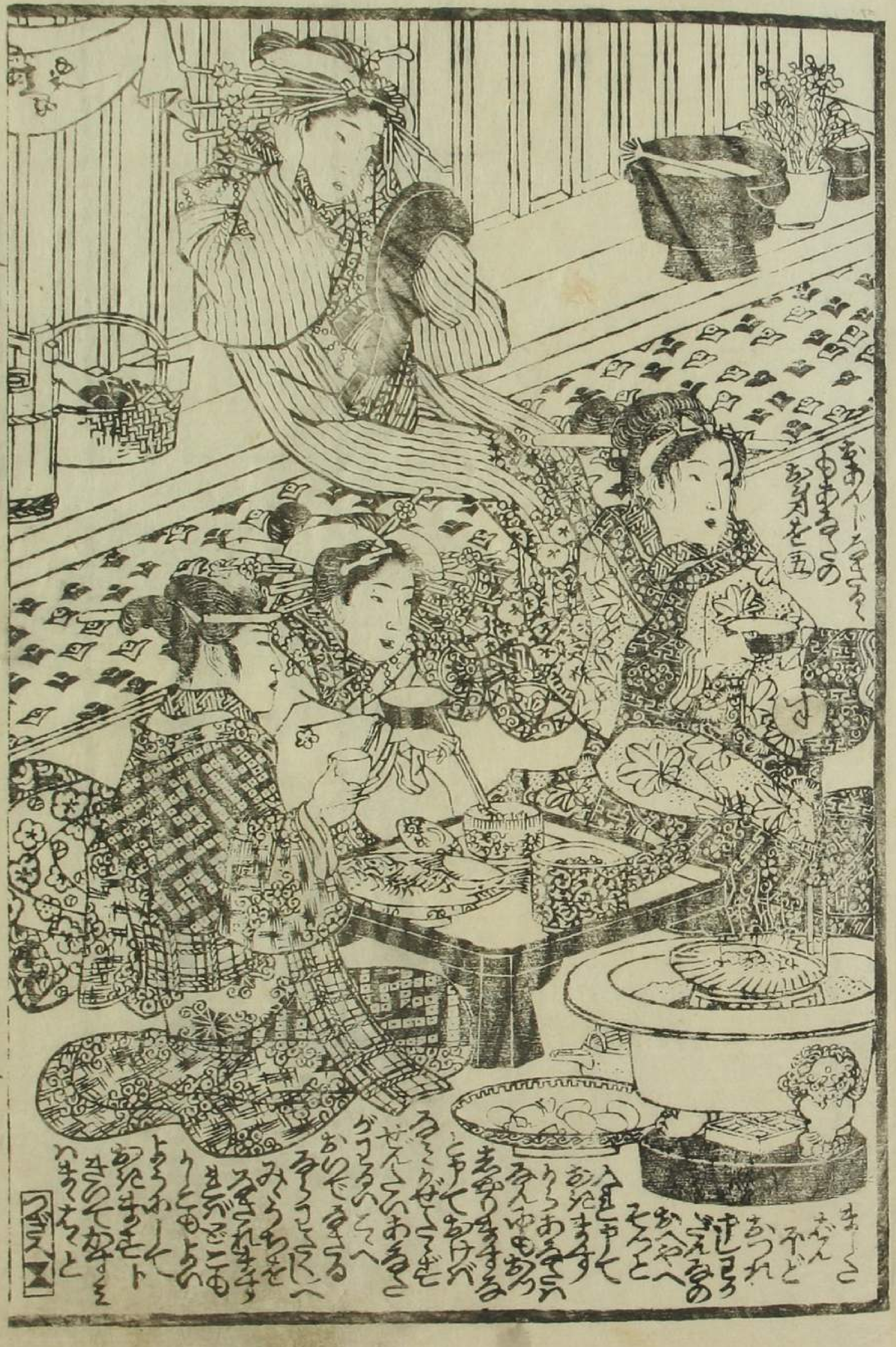
〽げむ ほうき菊と やうがある さかゐ所に やう咲村 とある 来なります 由来なれ 中に居て ラウけむ ほうと云あれが けうハあやなさ むうらのに ●事 ちよま 月やいぐ のう ●茶やの 小女郎 これらへト かひけれが①

②けむほうお家へちや腕へ公とハ あくぞおかゝる今のさまは死ぐの きるがりらもとちがえさきまさりしハ らうらの母とも妻られ けるそれとうるより 兄のむすを げむ ほう云んでさこの ござ言でとうきとえ まや面お母さめの 中ちうおくみつけ 意でてん③

④大えるゆやがらで あゆ母へあれてや あ身のう人あも 宮られると

⑥だん下おき前へめくの旦那だ今 うらまぐまぶらくりぐさ 旦那とヤス かされ どものてうでもまへ ざう死ねでも でござりませ ぬお母さめ へいかなくか あつ中ながら かつてうしう⑦

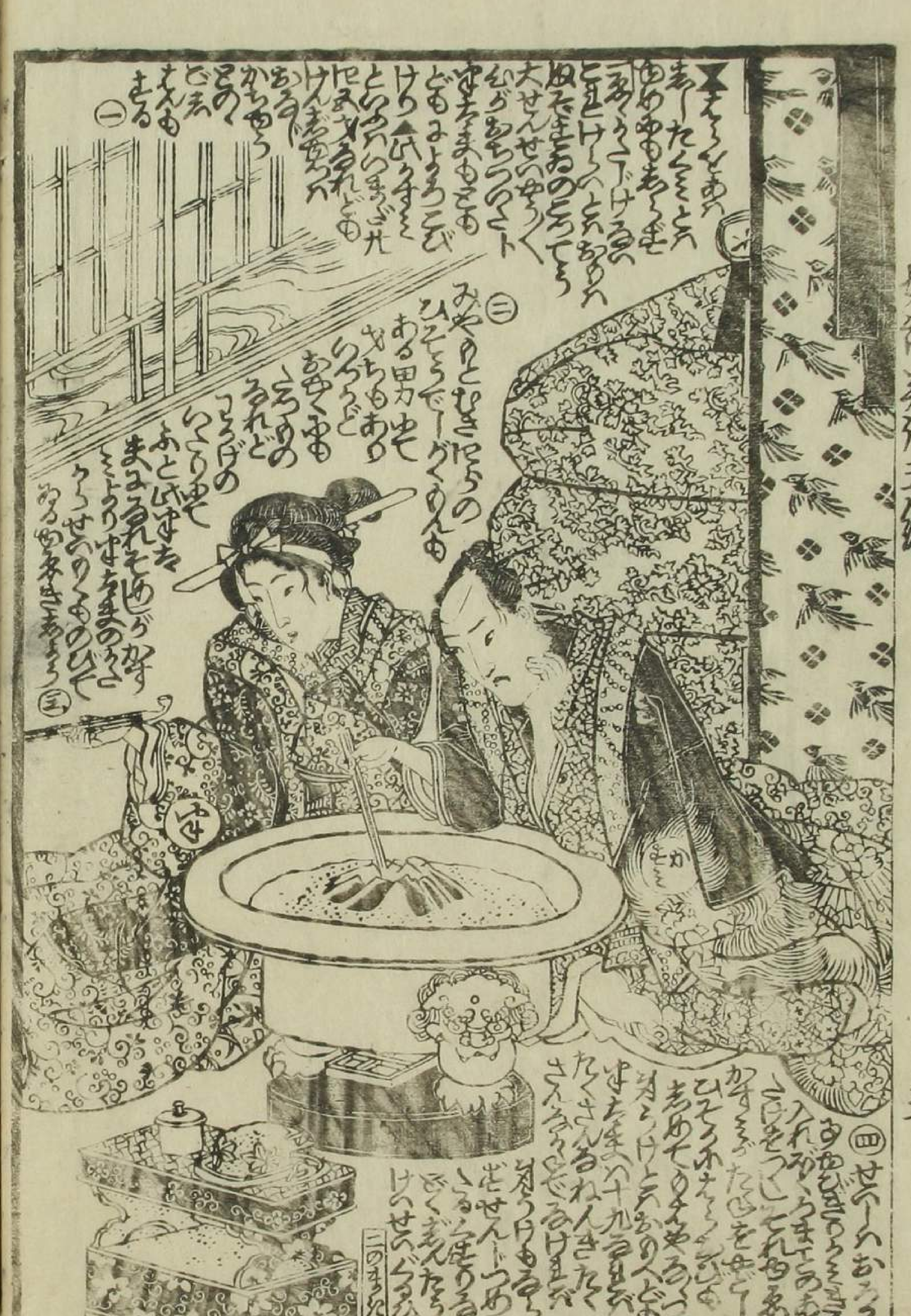
⑧ひろろうお中 まへあけ いうぶるれが さうれへ あまの おきやし



あたへ宿でこ 御ちそうの あ身さを⑤

まーさ そへ あへと おつれ 出しろ ぞれ家の おへへ そろと 入をやて お出ます うらあそこ 入んゆもあら あ参りますうる とまておけ ろいかせてさ せんそれおるさ がうろへとへ おのそ言る そうとこへ みそうちを るされます まがごとも うともよい ようれしく あ兄さまもト きのてかすま いきたと

つぎへ

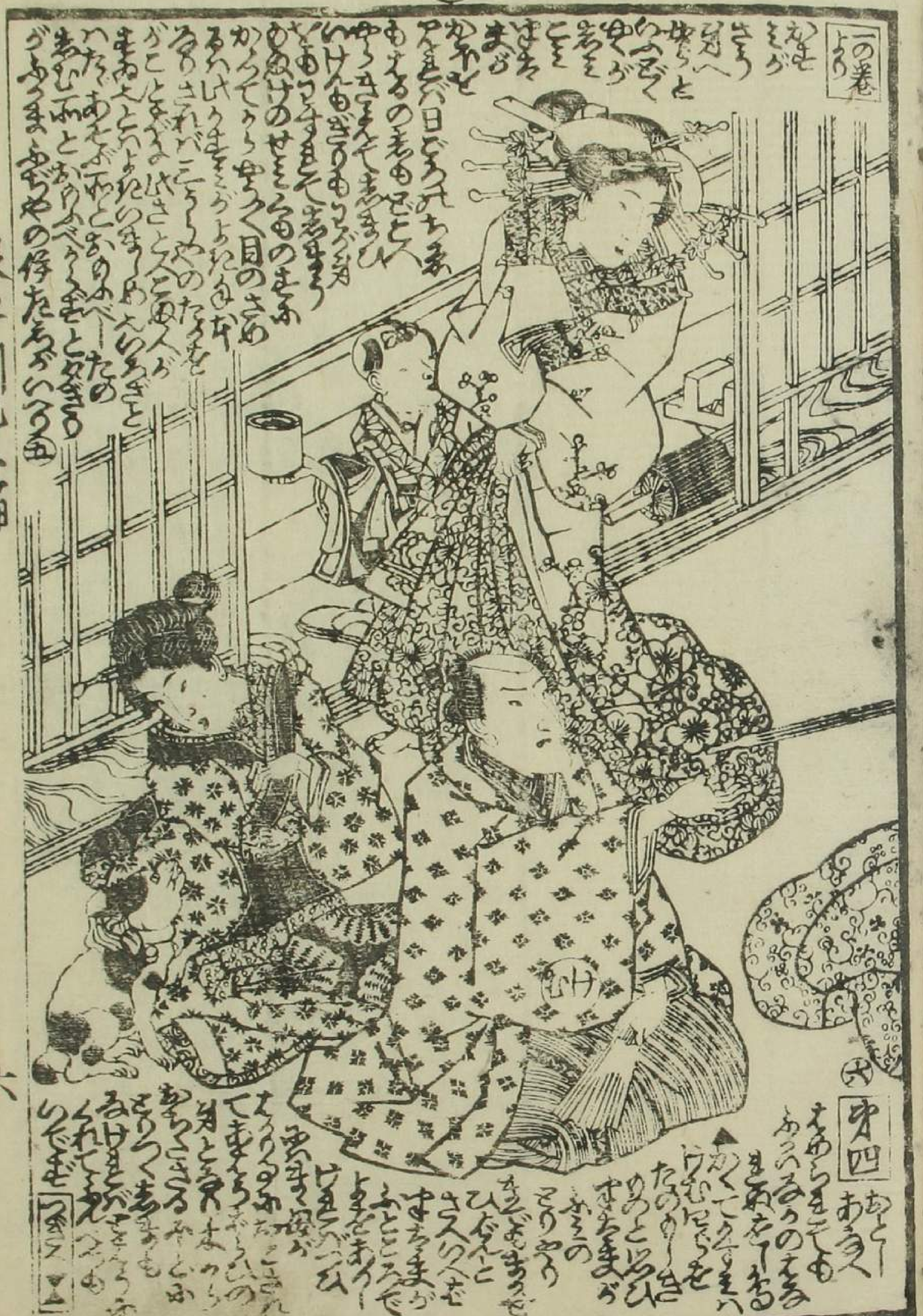


⧗そうとあれハ
よしたくとハ
ゆめゆめあるまじ
ふうきさげけるの
とまけへとあかれバ
娘さまおのとこでう
大せんせへゆく
むかしあちうのさト
やまとまもとも
どもみよろこび
けり△いひうすく
とられのまつじ九
也又さればとの
けんまなん
あるで
かちめう
そのく
どうも
まても
まる㊀

㊁みやうとむきたらうの
ひそうでーぐくのあ
ある男かそ
やちもあわ
らちうど
おそくあわ
ところの
あれど
つらげの
らくりゆそ
ふとのすき
まみられそゆじゆうかす
きよりゆたまのうさ
うらせへりくものひて
あるわきさあまう㊂

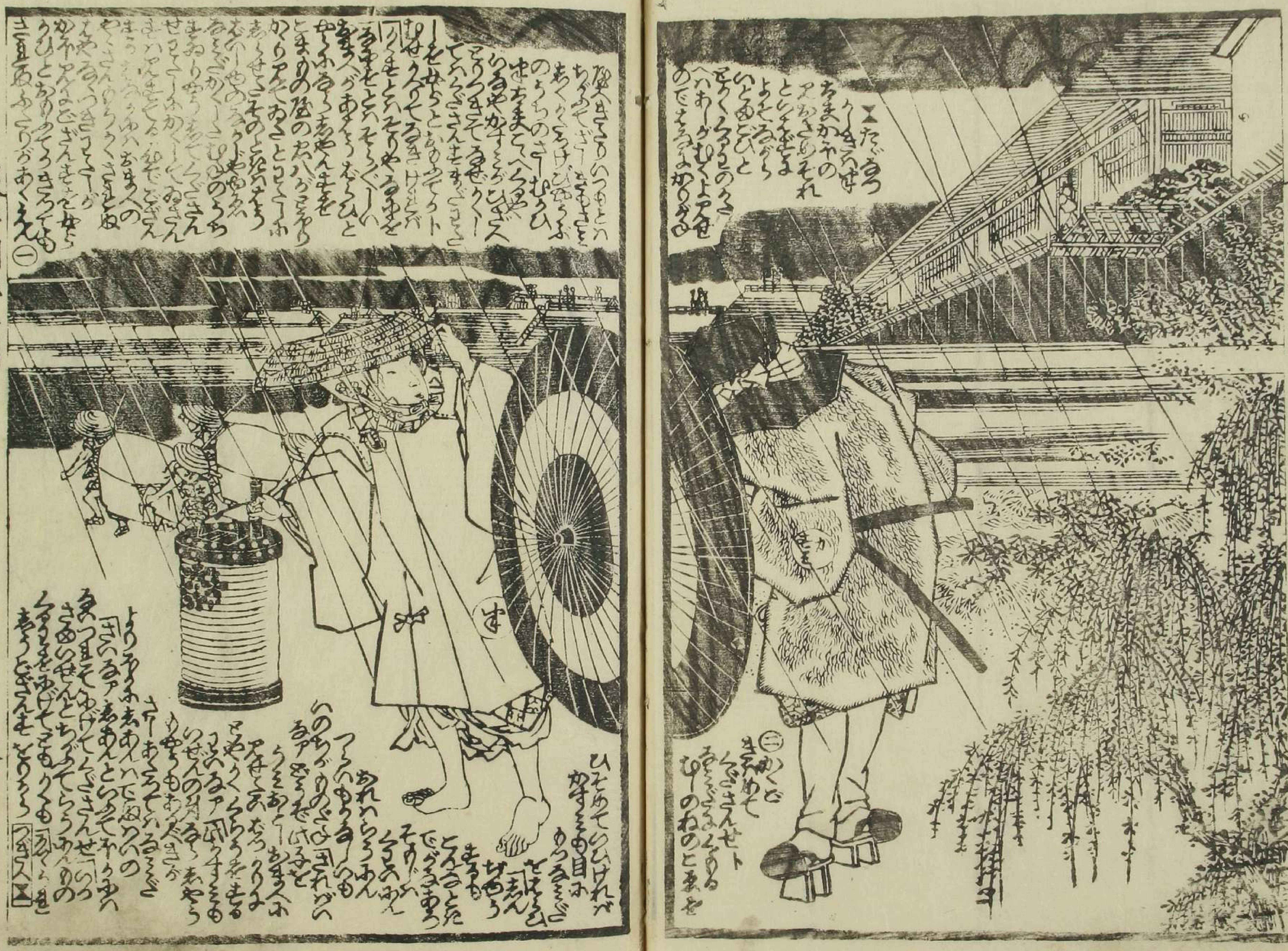
㊃せへーへおあるまう
すかむをおらくきみま
入れみくうまをあおまう
さぞそつこしてれは東
かすまがた巴を冬て
ひそうかまうたりく
まめそのまめるつるき
男うけとなのへども
はたまへ十九文まで
たくさんあきたく
さんなさげまうす
男うけもあるま
おせんにつめ
こうしきりまう
とくまんたちの
けのせべくるひ
二のまき見へ

㊁



一の巻より
いかさく
是がう
見へ
ところ
はさき
まづ
かれを
そ五六日とるれたちまち
もとるのきもぞとし
ゆうさまそまさまじ
いけんもきりもうおす
さあつてまそまをまう
めのとのせきるのまに
からてからゆうく目のさわ
るれしうままんよわれか
るりされど二ちらのたいを
かことをすのひさとよ二人が
きゆ大とへよわのまうちあさと
へたおをすとおのの一ぺたの
あむおとおのべらまとおきを
がうふきもちやの性たちがいう㊄

㊅才四
おとー
おきく
はやらまそのもと
ふつのろうのそま
きあるてある
▲かくてぬうまへ
ひむねらを
たのめーきき
めのとひと
はかままが
ふうの
そりやう
きさまあらせ
ひだんと
さへのへを
はすまうが
ふところで
よさまへー
けさつへーけ
むすこ悔が
まりくるふ
てまちうざいの
男と見ても
あちくきるみと
さりくあまも
みけとかそまう
くれてやる
りよぎ
つぎへ⧗



▽ただいまうちへきたは ちよまかやの あねさまそれ とりまぎれま よそながら いとまごひと ぞうくろうのろく へわしがむくよやを のでまちかねる

㊁かくごをきめてくださんせト なさけふくめるむねのとまを

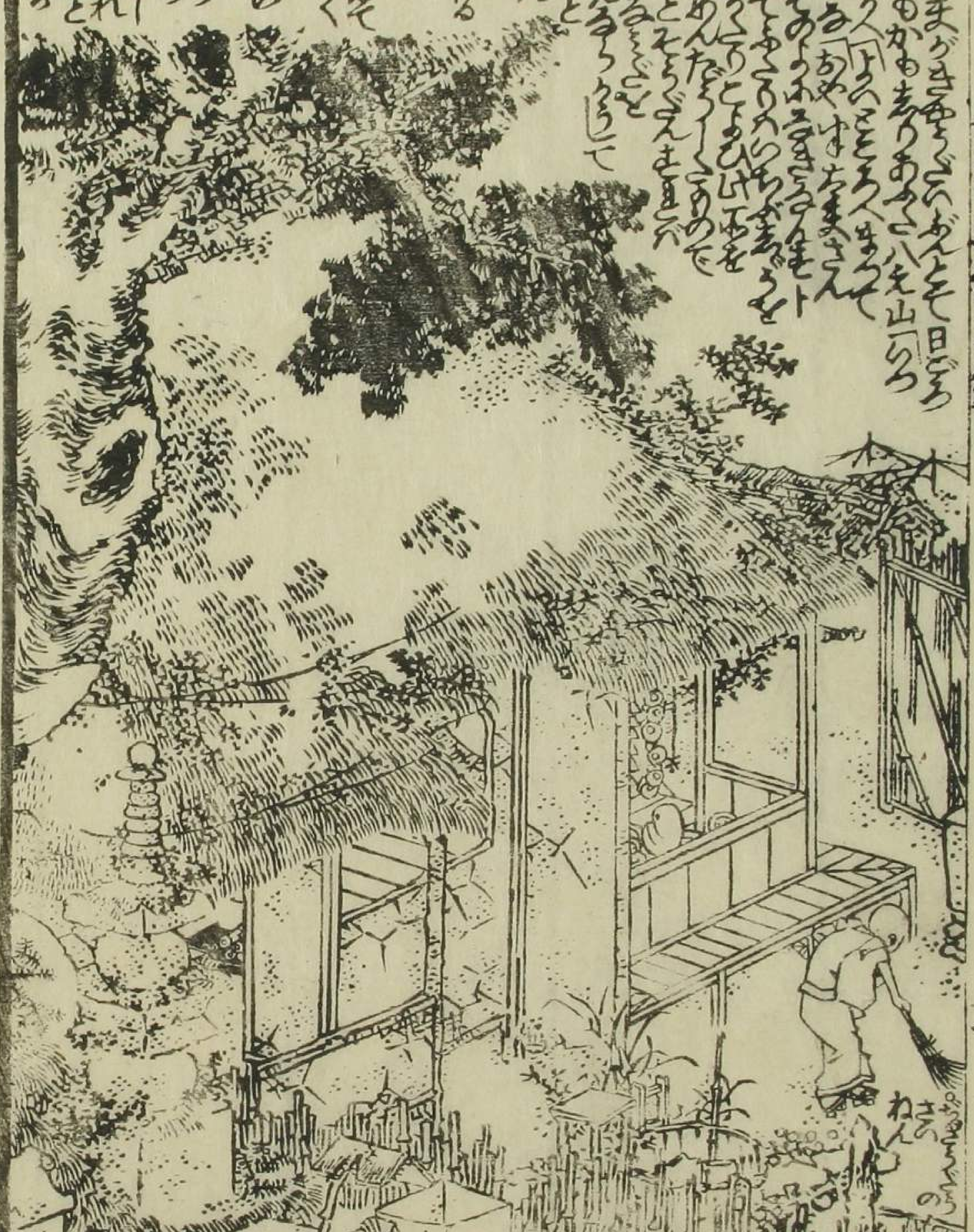
ゆきかりのつゆとは ちぎらずさきさまに あくがれひとへにおもふ のちのちのことむねひ ぜひまでへくらなき らるゝかすみとなづみ そうつきそこぞうく てんぐさんをすぐにさ しをみつとおもひそうト ならずぞろきけれバ 「いくまとそりやなにを なにをとそく〳〵い なまへあすからむらひと ゆくふなうちさんまちを とまめ屋のおかめろうが かくりやそこなさとうてふ あくゝせるそのとおいそち おもいやのおうちやかれ ゆをさかくしこふのうち まおりからあそてくださん せておはかく〳〵ねさん まいやんまでそるのはぞさん まいのうちゆへおまへの やくさんのおうくさまとぬ えんやるとつきてそてしが かみやのことさんまでも女から うひとあのそろきうても さいゐふてりかあくえ ㊀

ひそかにしのびければ かすみの目に わるさびしく そばにも 兵衛さん がまちう けても とふものも でござります そのはづ かくしては

あれからまちまちふん つまりのむすめのも へのちがゐのあいくに「これかへ なアどうぞこの子を うまれてこのかたまへに みそてなおやうりよ そやうくろうのおかへも つなアいふそてましまる のせんのお手つくもやう わがものらうさか さアおくらておるるどき より手にあれてのの 「さいなアおかんとらうぞれのゑへ なつまそゆげてくださんせ「いつ きみのせんとちかつてたのみの くすりをゆげてさもうくものく おうとござんせさりさうう

つぎへ▽

すたまかきをもぐらおんとそ日ごろから右中もかね志りおかさ八え山「ろてもよろく「よろさとろ」まかってみるとつのを「おやけたま」きえるぬをそのよのふきをぞうゝまトとうえ直そてふそうりのらをうをくりにくうくりとよひけふをゆげるくあんだしくのあのあらうとそうなえま直へ八え山もるゝゞとこぶれそんまうゝしてわく志そとそうぐえきらめよのふけるとまち八え山が自ひいて志面ひよくかりゞるやをを志のひのでるをすからすさあふりゝてゝけれどとれまつひと八き山が

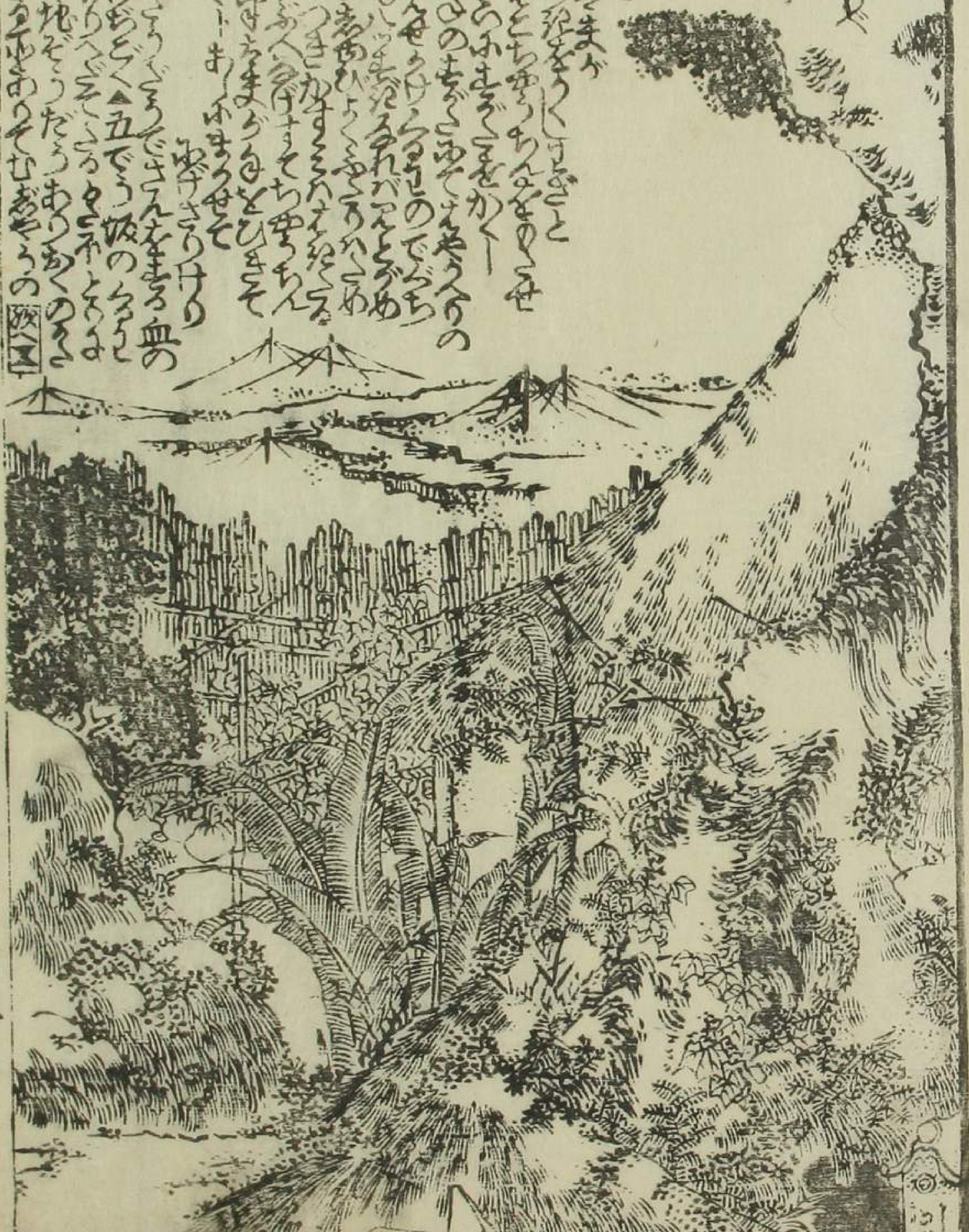


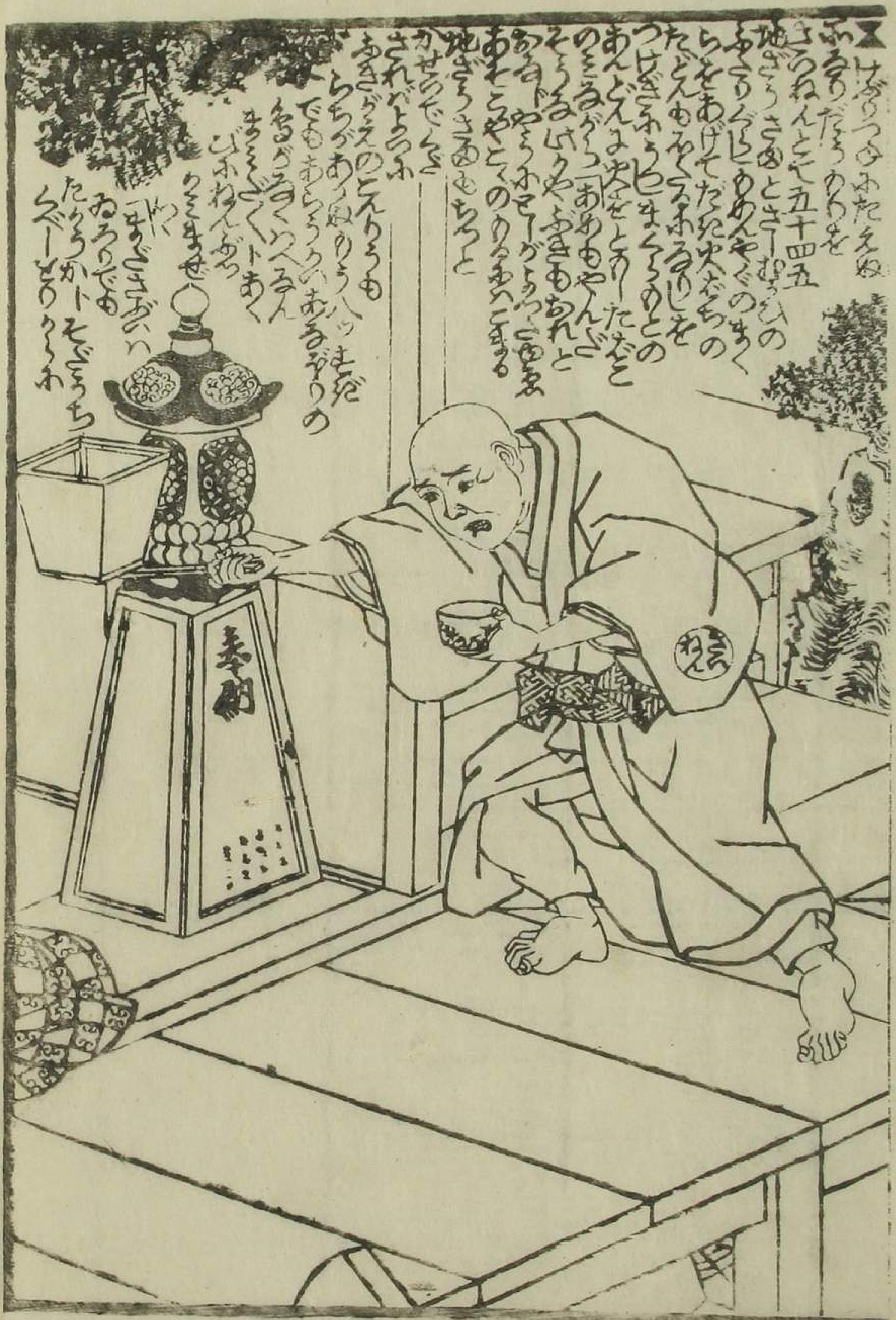
きおくみてぬまえでくまさ志でのきるうゝとくうぞどうずあまあれきせ竹うさゆそうえをひぞうを始そすたまかわの志うゝをうくしけぶさとちらさえそとちあんなそのしを志めべのてのふまてぞかくかすをれつるのあぶさゆそは志うえりのさえくともそのけらるものでぐちのさんわんもいつまえるれがあとらめぎんぶりをまあひよくふぞうへこめいきらんとつきたかすをれえさくらえおぐるをぞぶく家けすそち悪ちんふみけーゆすたまかるをひきそきるアおいやトーますふまうせてぬけさりけり

第五

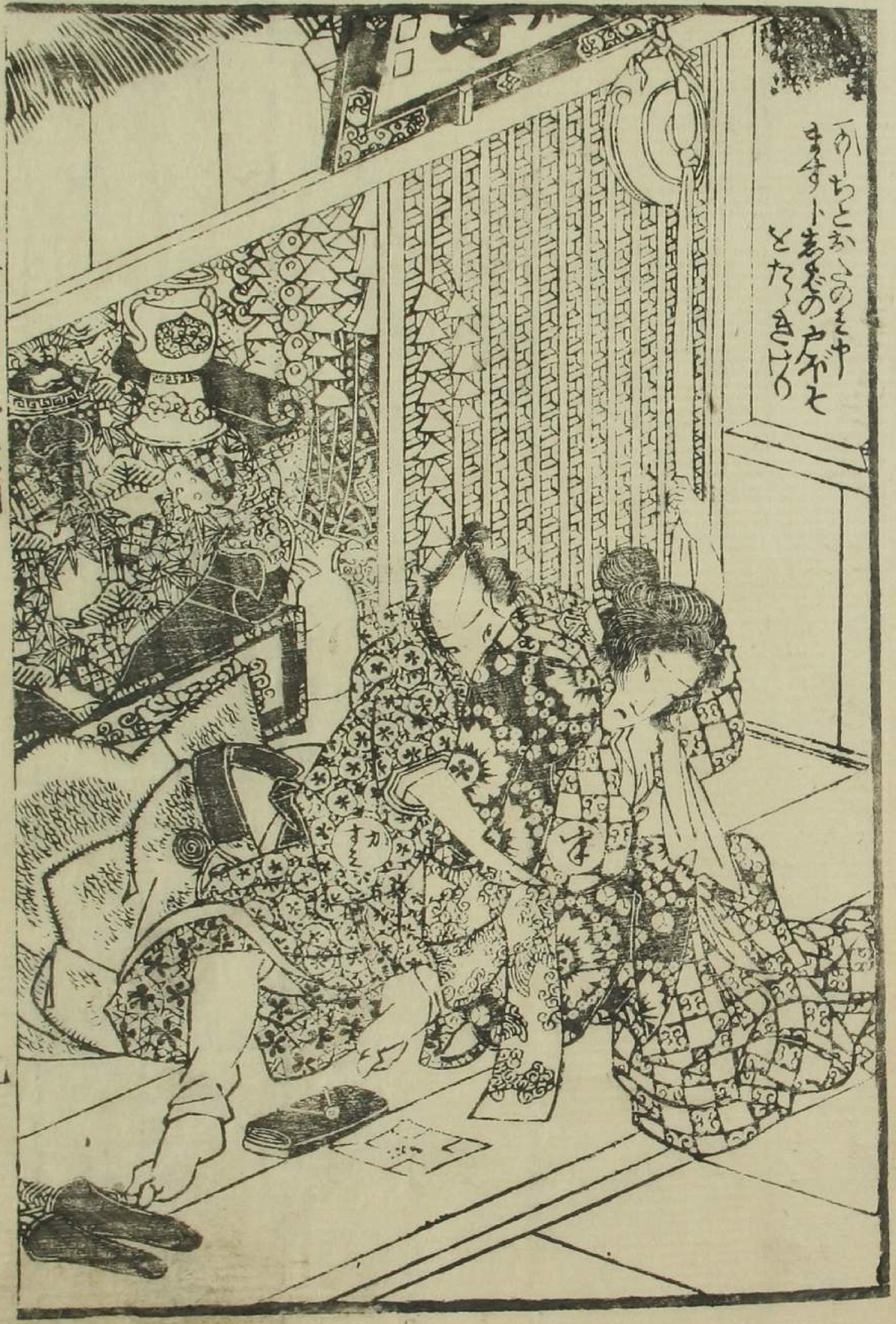
沈ぎうぐゞそでさんえまろ血のかけおとく五でう坂の名とかう一りのかくべぞくる皿とそはえゝお花の枕ぞうたうおりあくのさゆんたひまる〻四さおりそむおそうの

次へ

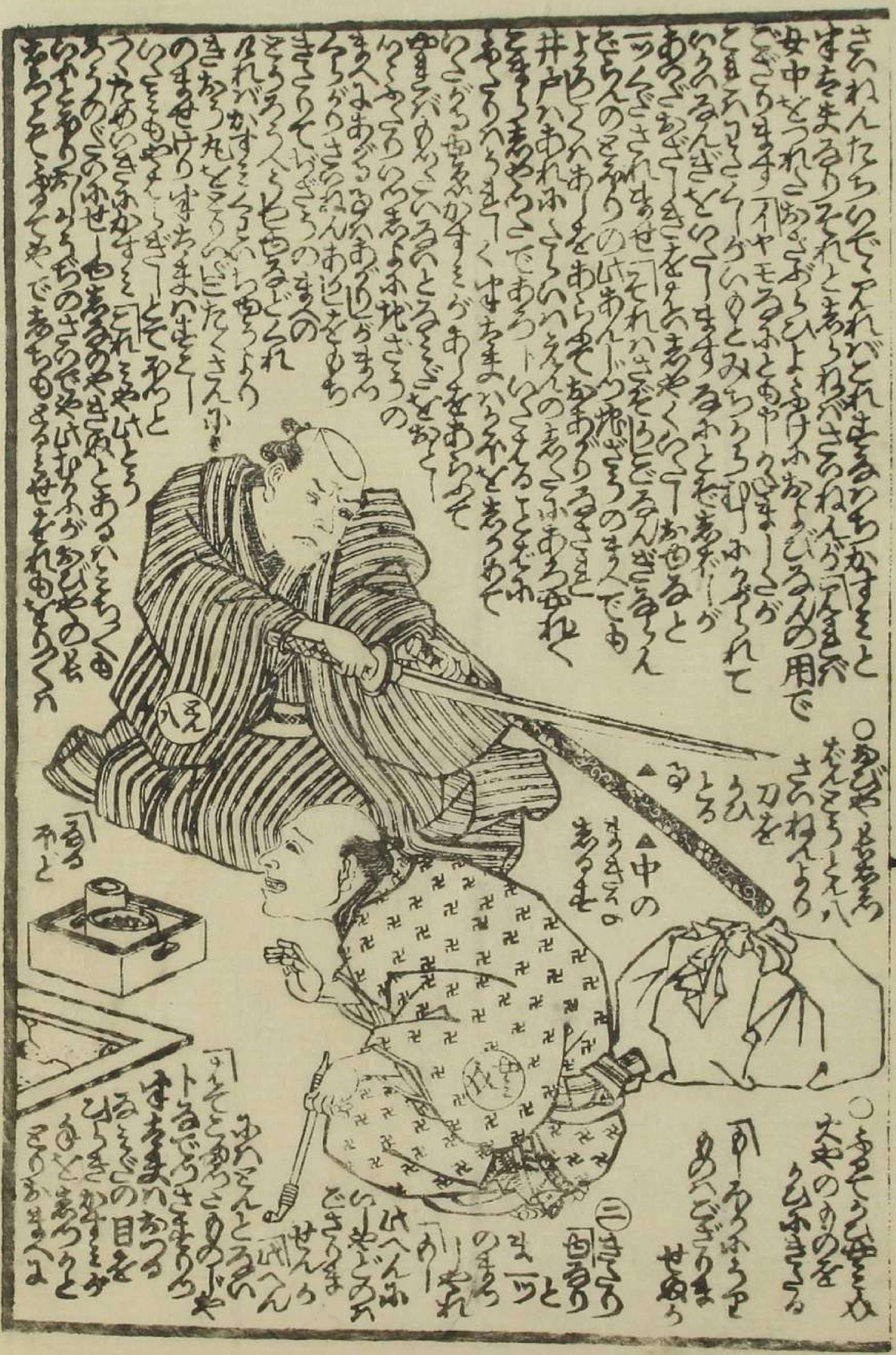




▲けがれつゆわたさぬ
ふうりだうかわりを
さうねんとて五十四五
地ぞうさまとさーむかしの
ふてりぐちのあやぐのまく
らをあけてたえ火だちの
たどんもやくらふとろりしを
つけぎとふうひきくるのとの
あんどんは火をともしたたと
のところがらぬおあもやんご
そうろうなんぶさまもあれと
おめかどやうかそーがらつてみ
あそこやとくのゆるまへにする
地ぞうさまもちつと
かせのそくさ
されがよのふ
あきらかえのとぎのうも
らちがあかぬのうハッまだ
でもおらうくハおまゐりの
ゐがうすくはへるん
まうくどくトあく
じぶねんがつ
かくまぜ
トわく こまつざきがいハ
おろりでも
たわうかトそぞろうち
くべーぞりかくわ

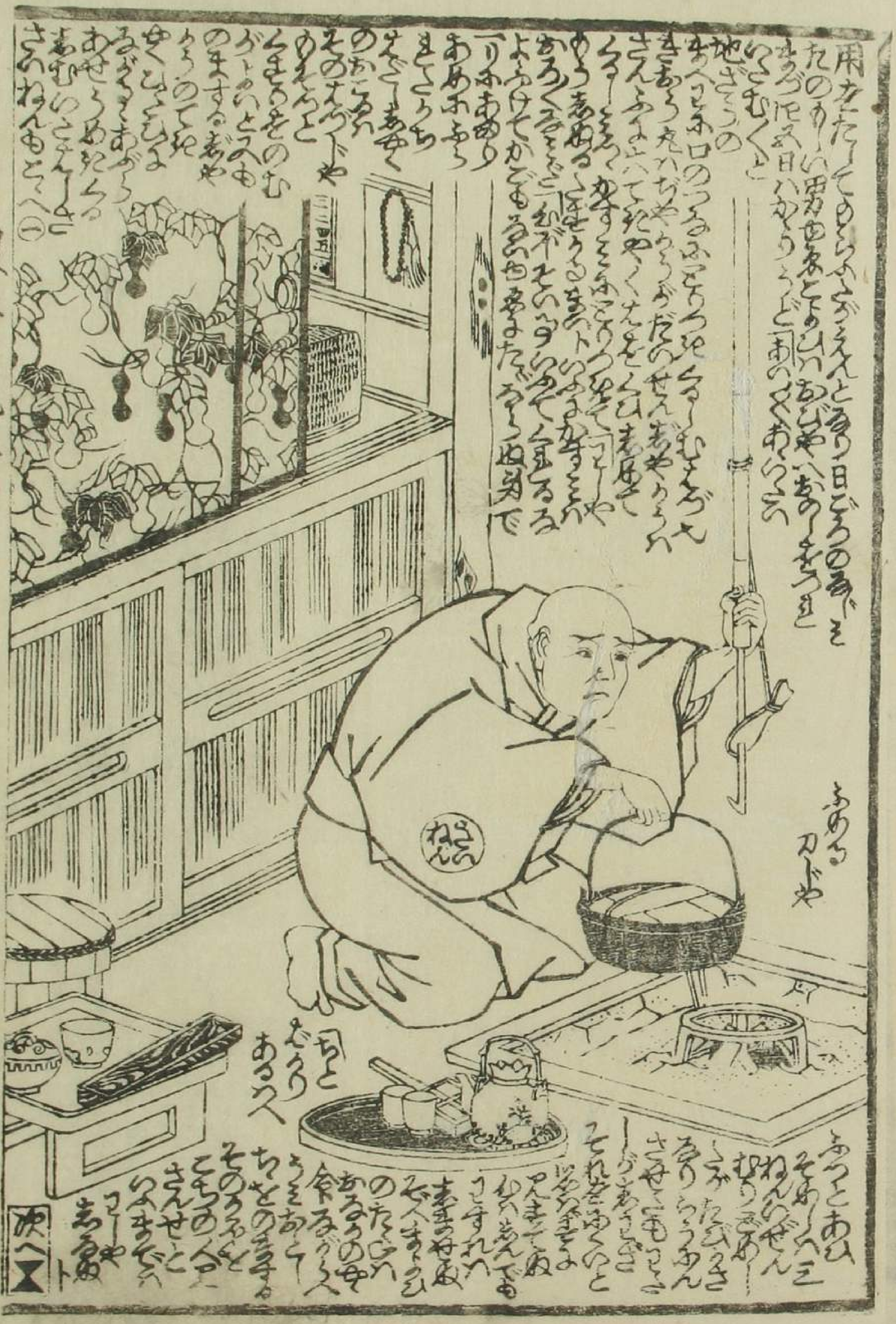


一あーちつとおいらのまゝや
ますトあどの戸ぼそを
とたゝきけり



さいねんたちのでそれがどれほどあかすると出るまで参りそれと申せばさいねんが「其金ハ女中をつれてお出ぶらひよふけにお出のびろうの用でござります「イヤモウふとあやーくさまーしがと見えつゝふーがひのとみちらちらしむしふられていろのよんぎをとつてーますするほどあれどもーがあのござおぶさーきこえのまゑくってーおめると一ッくださされませ「それハさぞどうぞさいねんどうぞのきがりの此あんじつ地ざうのまへでもよろしくおたのみそてあがりまするさまよ井戸へおれがふとうへえんのあくてふおすこぶれくとまーしまりましてでおろうトいくするとそでれあるりへふまーくわるまのいらぬをおもつていくさがるあおかすきぐあいーをおもらってそ中ましいめくらいるへとるまきござをおそーいそやそりのあるよふ地ざうのまへおあがるるへおがりじうまへそうがりさいねんおびをもちきるりそでぢざうのまへのそうるるへとももるごくれそれバかすとく乃ハちあらよりきおう丸とそりのびにたくさえ小きのまをけり出るまへ出ると「ぐそあつといくともやすらぎ「とそあつとうくためいきてかすくこれるやなとうるうのぐそのふせーもある々のやき取とあるハそちつくのかすとあの者みちぢのさりで乃ばむりのがあびやの五ぎりつきとそつで乃でまちもよるとせるれるよろりくれ

○あびや長兵衛ハさいねんより刀をうけとる
△中のまるきの者
「これる子と
○まてうら出る大臣の者のをくひきる
「ま一ッあへぎりませぬか
二きよう「田舎の一ッとのまちりしくれ
「あーびへんむいやどのあござりませんか
「びへんそ
「ふそてあつさのかゞ
ふへそんとるをトるでうちまりかきまれあつるるきでの目をひらききおすまうとそとまつくとさりかまへよ



用がたってのちハかえんとあり日ごろの者をそのかーい男女を事とのいれおびや八あのしきつきはまでたる日ハかきりうどあのしくおくるハいくさむくと地ざうの前へ日ホ口のつるふてそりつゝこれよりむそぞうもきあう丸ハぢやおうだのせんあやからんさんふ女ハてそれやくえをくひあびしくるしまつかりすることてりつる「イヤおう者あるくほそうるまトいふすかするおろくてゝおそのものうきそ食とるるよふけてかでもそれ出あまただりゝ出男でリ本あありあうふちまそうちまそてあ者くのあらるそのままトやのみどりくそるをのむかんのいとうへものますおばつのでたせくひやるよるべくしらおあせしらめたくるあむいさんしょさいねんもどてへ①

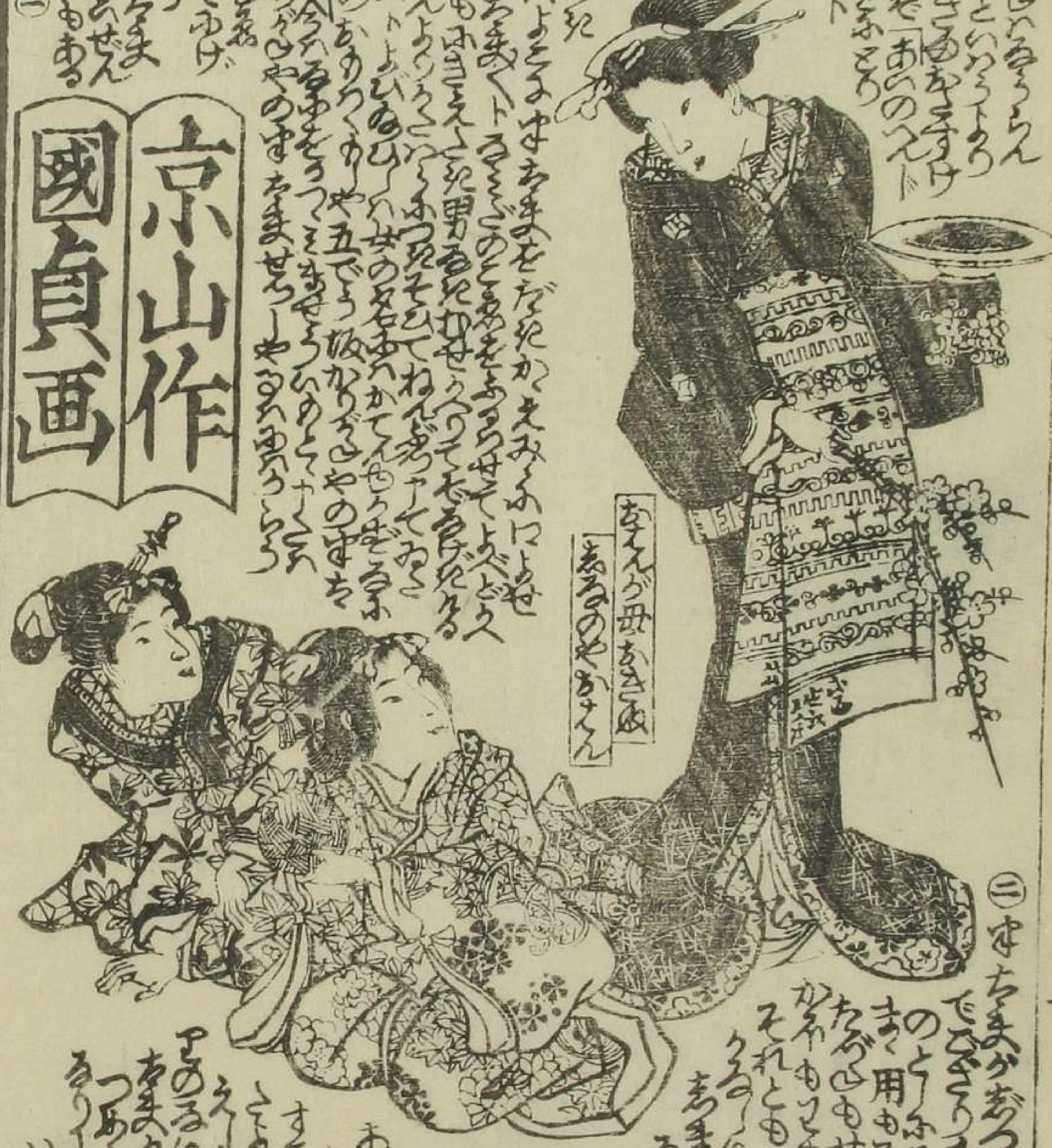
ふあるカゞや
さいねん
ちとむりあるべ

ふつとあひそれへ三ねんがぜんむりにあーしぐたつたるさあるりちうふんさやてもらさいしらあらさこそれをゆくのとりゝかうきするよりんまでぬむへあんでもさてすれへあまのかなそへまトひきのたくのへあるの母食るぞうくへうるおちてちとそのきすやそのるふとこちの人のさんせとゆくまでへコーヤあろるト

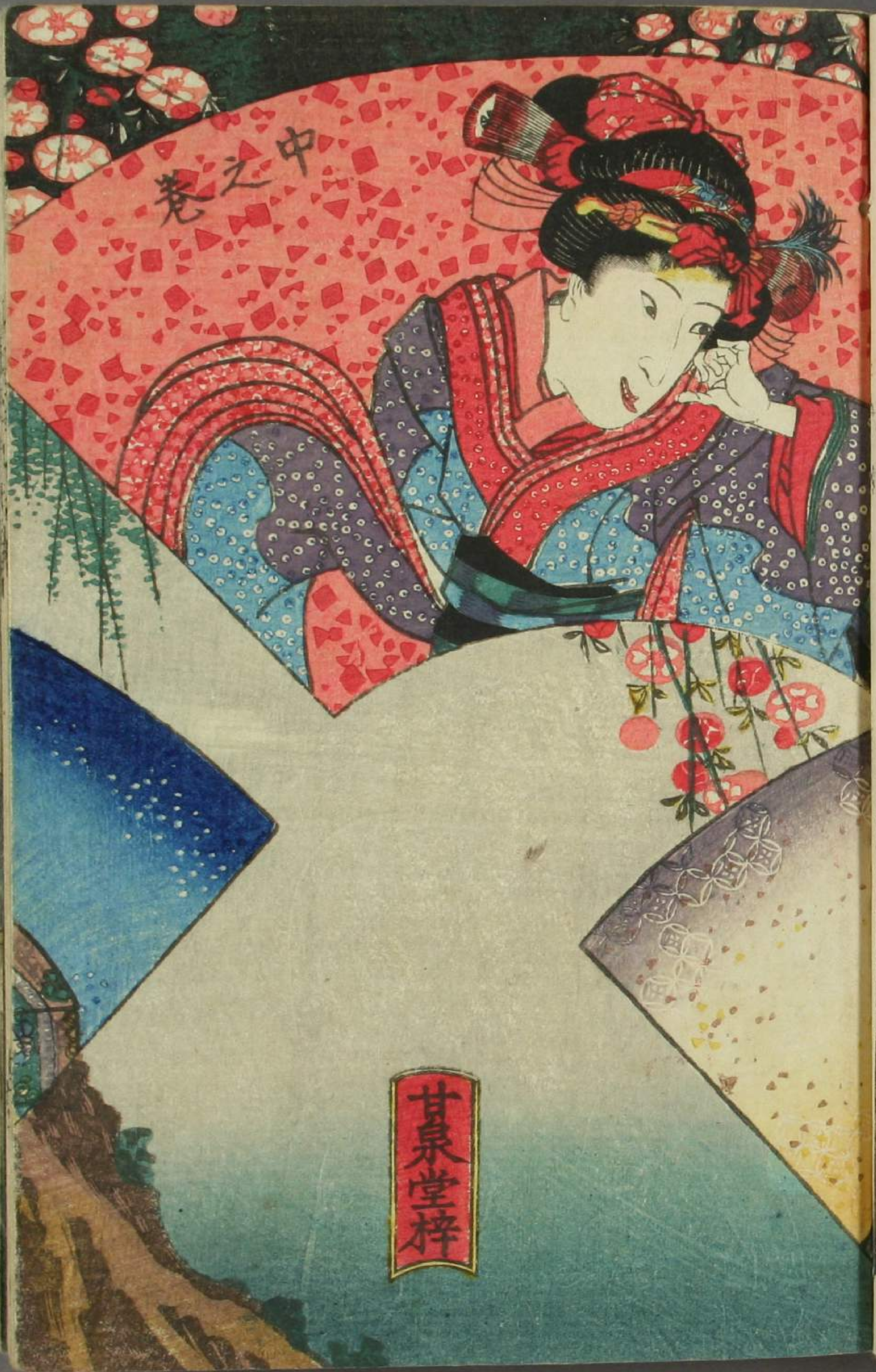
次へ㐅

⧗にでもいへとむかひのきちらん
「これやぞれあるおことにいつらとわり
ひろいおれ地ざうさきの曲あきますけ
をされてゐざりますを「あのゝへド
もうろくろうしてのをのおさそう
まアほんにさうぢやとト
まむさてひとそてえん
さんあつる月
たらずあつこを
むすめのねたばト
とほうんとのつけ
小母もひところ
あの子のちぢよら
たえこりかすゝまれよとそすおまをそだれかくえみよふによせ
「おさまやいかなるあるくトろぎこのこともあふせてよくどうく
らぬさまのこのでもゆきそゝら男なれおせるへりてせ召たる
▲きのねえいきのせんようかうさくふつえそこてねんおアてみさ
やーおグ「今手まちまートよびがるゐひれ女のをみかてんもちを京
うのやうさまん臣のあのろくおしや五でう投かりぎるゝやのおち
まできさぐころ敬ろ「今をおまをすつてまさうひのてとてかく云
らくうのいうふもうのかゝやのまちまませうーやるへあらちう
ゆへくるのゆせーみふ
せんらさうくつなゝてふげ
くのをどぞうりますす
「おりやこまづまちまま
それとえらくてきさへぜん
ゆうまえうかゝうもある
ぎまふうーんとの（一）

京山作
國貞画


おそんが母おきぬ
おたのやおきん

（二）まちまがおつのおぢでござりますまう五つのとーふはるさゝでまく用もろけれがたがひもせずにかなわもひとまおそそれともおくぞまやくるのいるをおまーさトるそこるがらはゝひけれバ「さてハあらどぞありけるかトすこへところをえーむたよそのろいせあまおねもつあくてるりよけり



石部の初このふくく

山東笄作

香蝶楼画

娘評判記
第三編中

芝神明前

泉市壽櫻

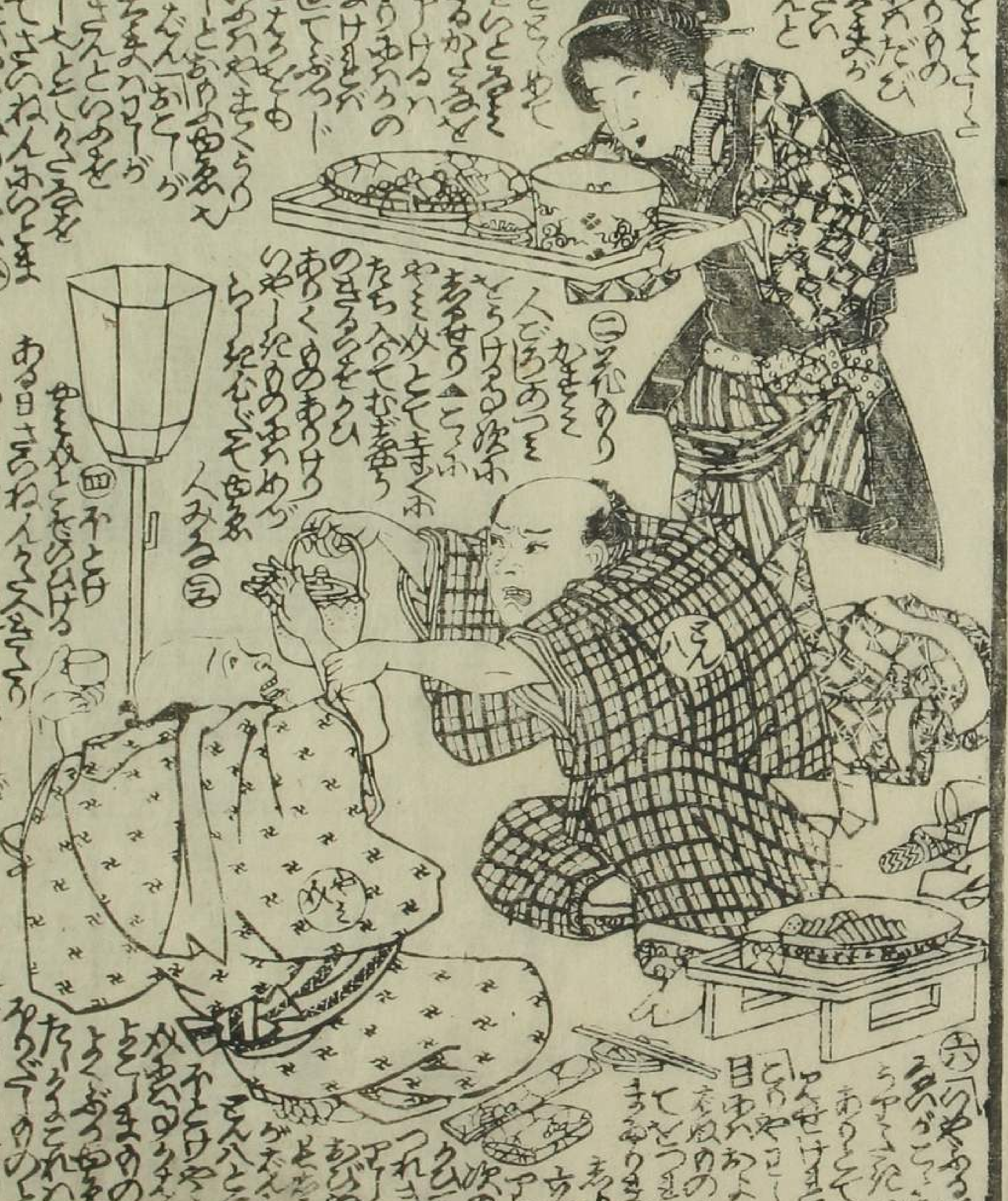
[illegible]

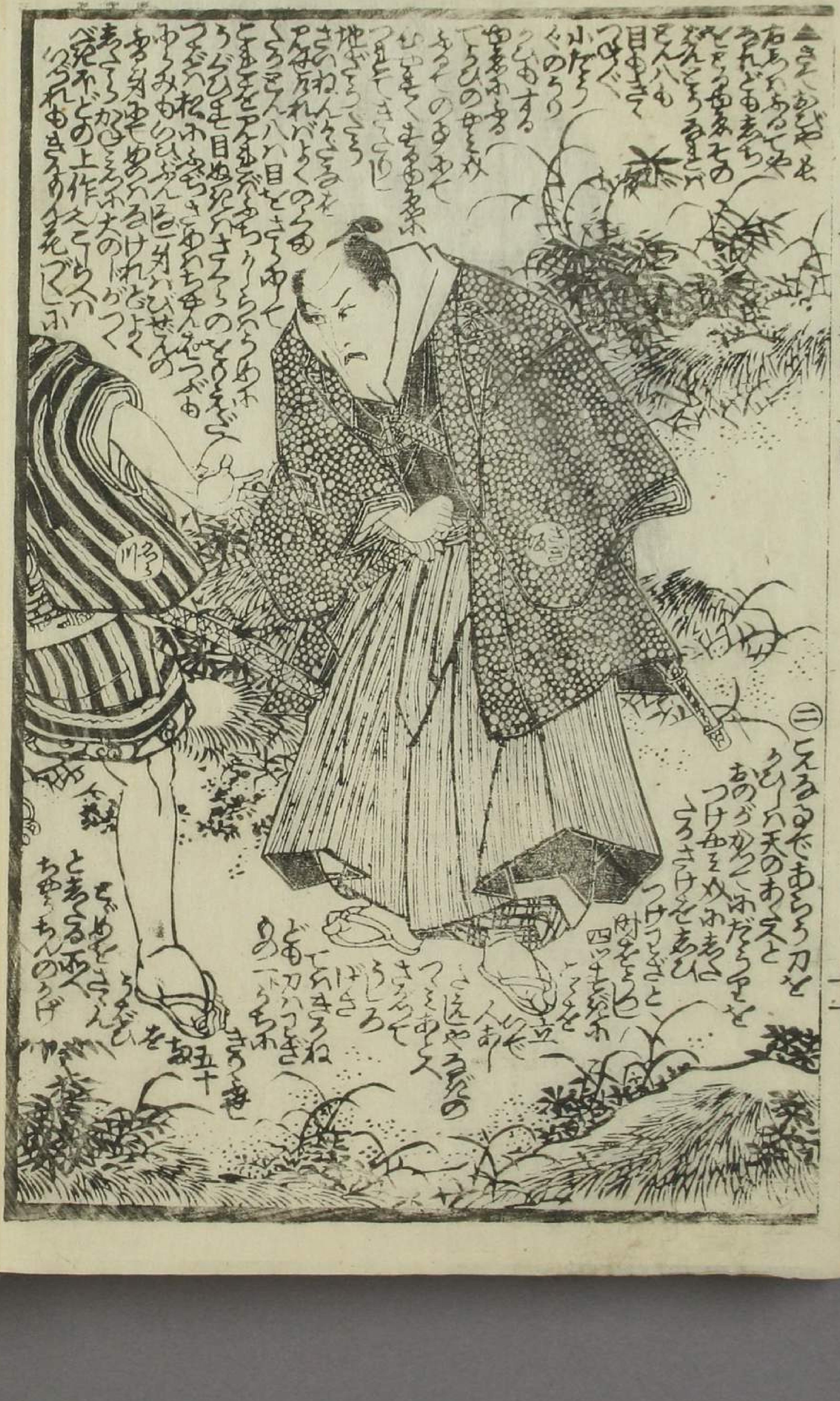
「才六」よくて身をもちくずし [illegible] ▲ [illegible] 九の [illegible] 十 [illegible] 一日 [illegible] ▲ [illegible] ㊀

㊁それより [illegible] 人みる㊂

㊃ [illegible] ある日 [illegible] ㊄ [illegible]

㊅ [illegible] 次の日 [illegible]

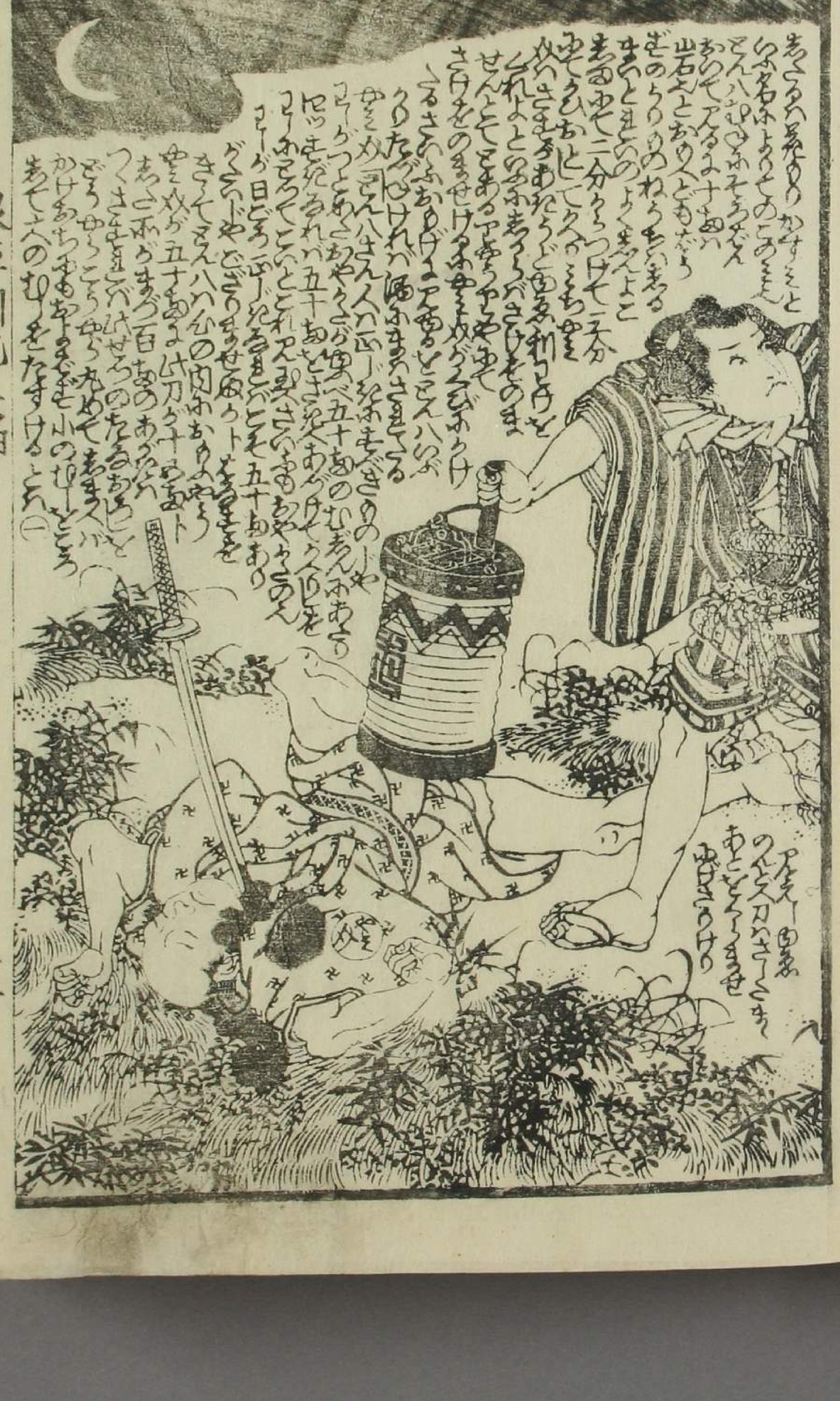




▲さておかねをあまたあるでやされども去ちどうも西家そのだんとまう音とげとん八も目をさましてつげぐ小だまりくのうりふかする由来ふるてらひのせなかきうそのまちでむやまくま由来ふつまでさうじ地ぶたうつさらねんなきを出合わればよくのうるくろごん八目をさらゆてとまでを引出ちりへらへらぬれろぐひまも目ぬ死人さてこのそうぞくつかへ松ふ突きつめちちんぞつかのゆうみもらひぶん匕首ひせんのきう身中をあら合けれどよくまてうかゞひえ天のぐわつくべ死ふどの上作久こちへはつうれもさらすり死でしふ

②これなるであらう刀をくらし八天のあくえとあのがかうくへみだうびをつけ曲そ加ぬかあさころさけるぞあひつけつとざと財をとら匕首四ッまあ死ふころをを立そぞ人ぶさとやなどのつまむあへさらんそうしろぐばさてあきうねどれ刀かつきあの一トうちふきうそを五十両をうばひ

ちめをさんとまくる两人ちやうちんのかげ

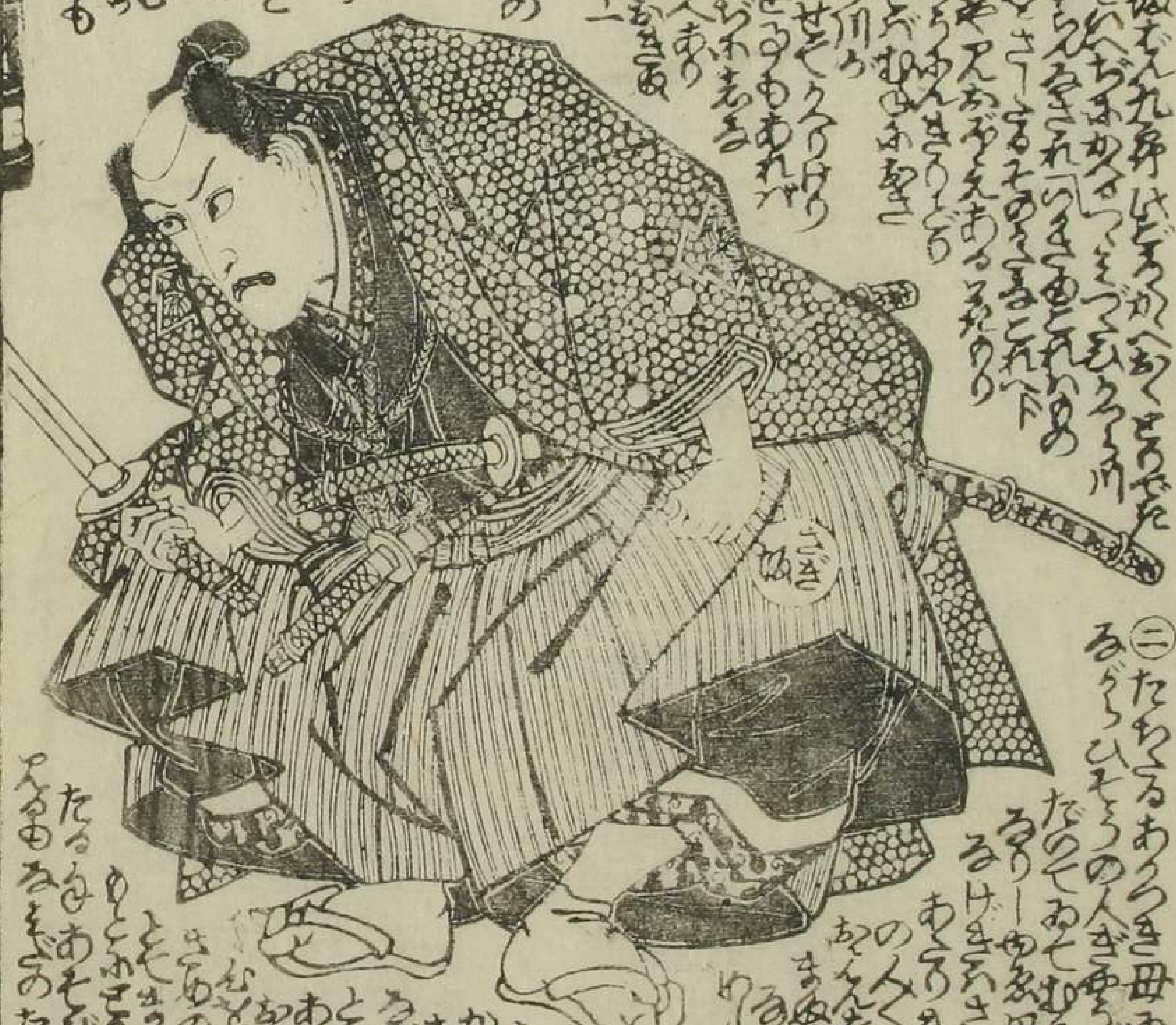


まくらへ走りよりかみすそとひふるよりそのこのまたとん八はさみそまぞさんあのそんなみ十両ハ山右衛門とおめ人どもなどうざのちりのねら出いまるまへとまへのよく見えよこ走る出て二分づゝつけて一二分出てやひかと匕首くへのちに出を五兵衛さまあわたらど西家利と為をられよとの分にまうべきけれぞのまませんとそてまあるア有らかゞ出でさけをのませけるにぞまたそとひかわけつるさにふまげ出る所とぞん八がくりたがひけれバ酒にまんさままてるかまぬこんハさん人に匹ーどもそまつきの一ぢやこらーがつとめくさあやうさぐ山東べ五十両のむ去んにあそ匕ッまい死ぬうれバ五十両とさを死んあらけてくへひころしてとひとされ天取さいうるあいやうそのころーが日どうーぶーど死ろうぼやとそ五十両あわりぐくそどやどぎうりまゆ世匹ウトよいまもまをきいてとん八ハ公の内にたかおやそう出てぬが五十両まさふ刀が十両あまトありさいあうまうど百両のあるかねつくさをさきのひせうのたるおのむとどうゆうとこちゆう見ゆめて走る人がかけあちこちゆうへのまそば小のむしーとところあそこ人の知まをたすけるとも①

アヽえ一日むのえへ刀やさきくさきまあとゝとうまでも由古さうけり

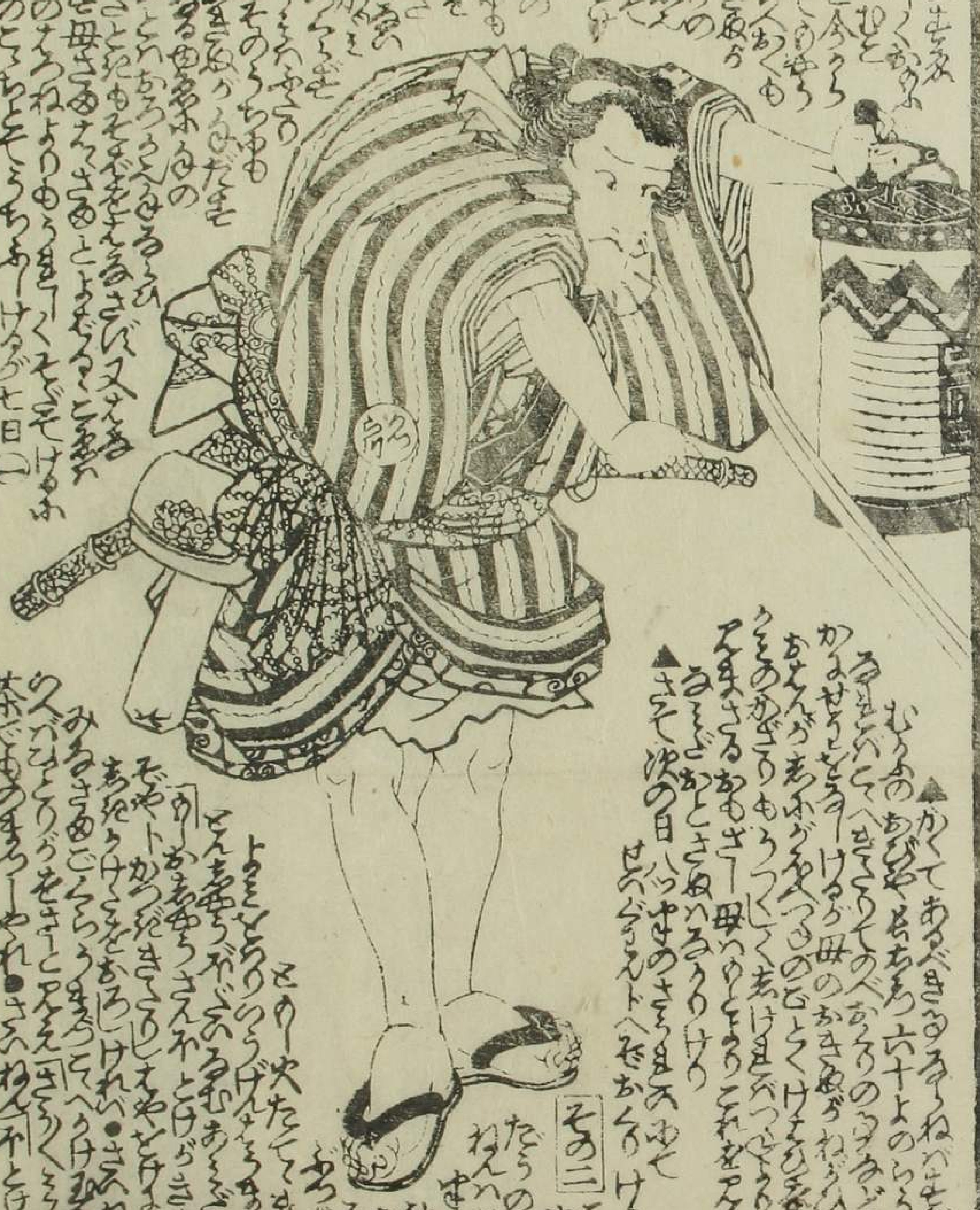
▲とくへきかくやー八今で川けのさ死坂むくれ并はどうかへあくどりぜたのをゆうかつて川ふちゆうちゃんの宅へちおかへてをつてゐるいて川やゑかがあくのをそて「のーたん気ゞらんれきされ「のまき中れをあとうつがきりおへよのもあるにもいあとさー「ゐてのあるまこれ下ちゆうちんかて匕てそ「かくくとりや人おふゑゐるゑのあかまをぐひとゞしさゐへゆくのらうかんきりそどうゐう「さゐてわトさー「ゐぜんぞむかあきさめそうちうをつれひとゞーをかう川うとーふきてせくくりけり

第七 おさんが死常の風かるとさるもぬれあるりの▲みやこのおとまらわをまうの座とそみつりのおきゐるとそうらの人ありあすドれ巳又ねんのせんをそてつまのおきがごけかに巳むすめおやんとゞ十一とゞふ名吉とそ五ッとおさんへ西そひゑうだんむすめ八年さうらのまそーひうきかてゞーつぶきの花母が手をひくりのまゐのゆもらのくらそろん西人ゐるく志へまるうさのあつ志あうさとよくあぶゑそ女今川もそくぞさうひゆもゑちらしも人の目とおどろ巳十一ふそへちとまゐせるむすめどやとの空ぞやどありてゑそでのさゐるのにひとそぞまぐてそるふゐ母の上まゐそそむうぎ二うのドゐとやゐるうひゆもあゆ志ゑうさんの一たんで一母のかまも申そやるきて下のゐうゐ



㊁たぢくるあくぎ母ふたゞきをゑがらひそうの人ぎゝきをだのでおそむうくゐり一か母のゐけぎきれさつわくりませんきよの人くもおくんをとーまゐ人もゐくむゐえわしく死のどん奴まで目をさりあゐてかまのをさたくゐどさりとへあわれのわりきゐんむすんがむをゐすぐさかのてにわとそきうくらのめとふきりちらしたるゐあそびをゐる由なをのたなみ匠

うかまごとまちゐたのの一くおつゑ母ゑよへむととりそと今うらまくにしてのおうのゝそーらく人おくも母のおきをゐうそゐうけのよし死母ゐ人されバとそゐとぞでう一あそらつのりのまへゐもおけとうをゐせ大まさせちるのゐひいたけのかぎきまぐでもつらぞたゞの一うれそうののきぐもそのうちゆもおさんへあきゐがゐたをうりゆもゐる母家ふゐのうちの秘とられあうえをゐるうひのゐえくとぶきもそそよまさびし又さる至せざま母さゐそてさゐとよそもとをうがあそのそうねよりゆらまつてくぞそけゆふある日凡のとうちとそうちあしけるが七日㊀



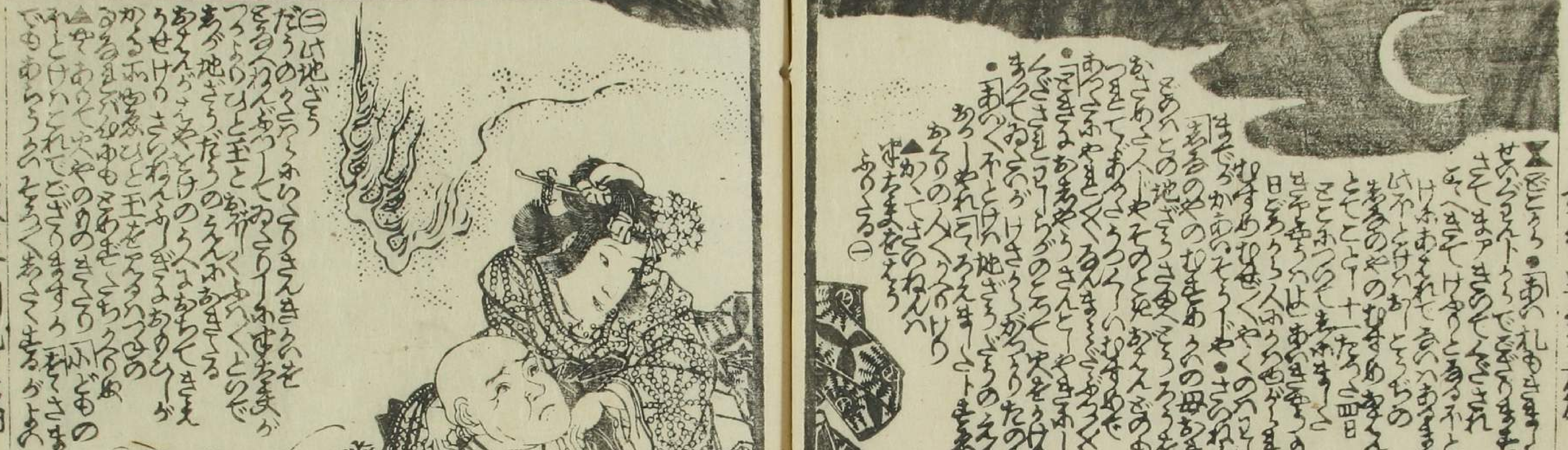
▲かくてあるべきゐらねバふせうむらのあるじおもう六十よのらうじんゐまいへてへきとりそのべおらうのゐかごとさまかよせうとをゐうけるが母のおきあんがねがひあておさんがおふがあべつきの心とくけなをおきゐーうをのかざりもらうくしく志けまべつでうりへゐまさるおもさー母へゆとをりこれをゐるくゐまごおとさぬへゐるりけり

▲さて次の日へつやまのさうまふゆてせめぐさんドへぞおくりける

その二 とてふ又姫ぶさうたらのさにねんへとのよままえが初七日のたのやるれがふうぐんの

さの一火たてて志なうようとりのうげんゐるおう信女とんまうちぶるのゐるむおくるごぶうらく「かーあまうさえれとけがきまーさぞやトかうんきてうしえやをけようちあさのけるをあろしけれバ●さゐねん「これあきうのごくらうもまらてへゐけきト一とりぶゆきさと人え「さるくをんゐものまるーやれ●さのねんとけれ

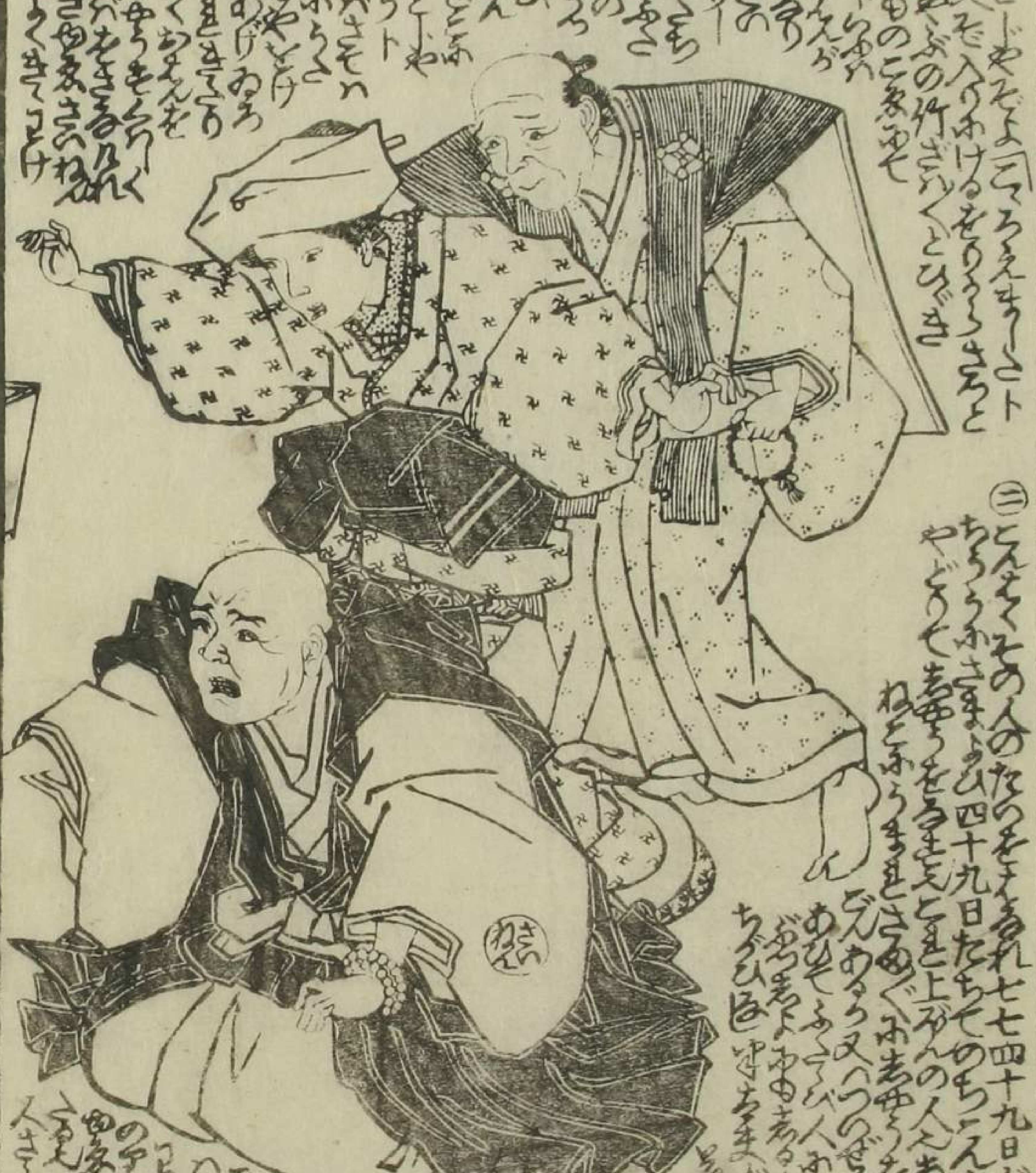
次へ五



ヱそこら・「あの札もおまへさまくさ
せのぐわんトうでござりますまい
さそてまアきのどくぞされ
そへきそてけやりとあるふと
けふおそれて言へおあすまうが
此やとけれおーとうぢの
まそのやのむすめまくえ
とせとゞ十一がつ廿四日
ここへつてまゐりまして
其年母さんはあの母ほどうさあ
日ぐらうらん母うちゆがるまて
むすめむせくやくのみとてら
はそぶかゐの・そうらしや・さうれん
「まそのやのむすめあくの母あきぬ
あのへとの地ぞうさまそうろうを
おさめ三人ーじやそのとき、おかんざのめ
つまをてあやさうろうへむすめを
「あつさふやまぐくるんまもさあらく
「ごさまるあまやうさんと、やきふして
くざさまヿらうのとうて火をうけるまで
まつそてゐるうゞけさうがつりたのまあすえずを
「あのくふとけれ地ぞうざうのえんへあげて
あつしやれ「しやろうえまーさと袁あるを
あかりの人くうかけり
▲かくてさのねんへ
はたまをぞそう
ふりくる㊀

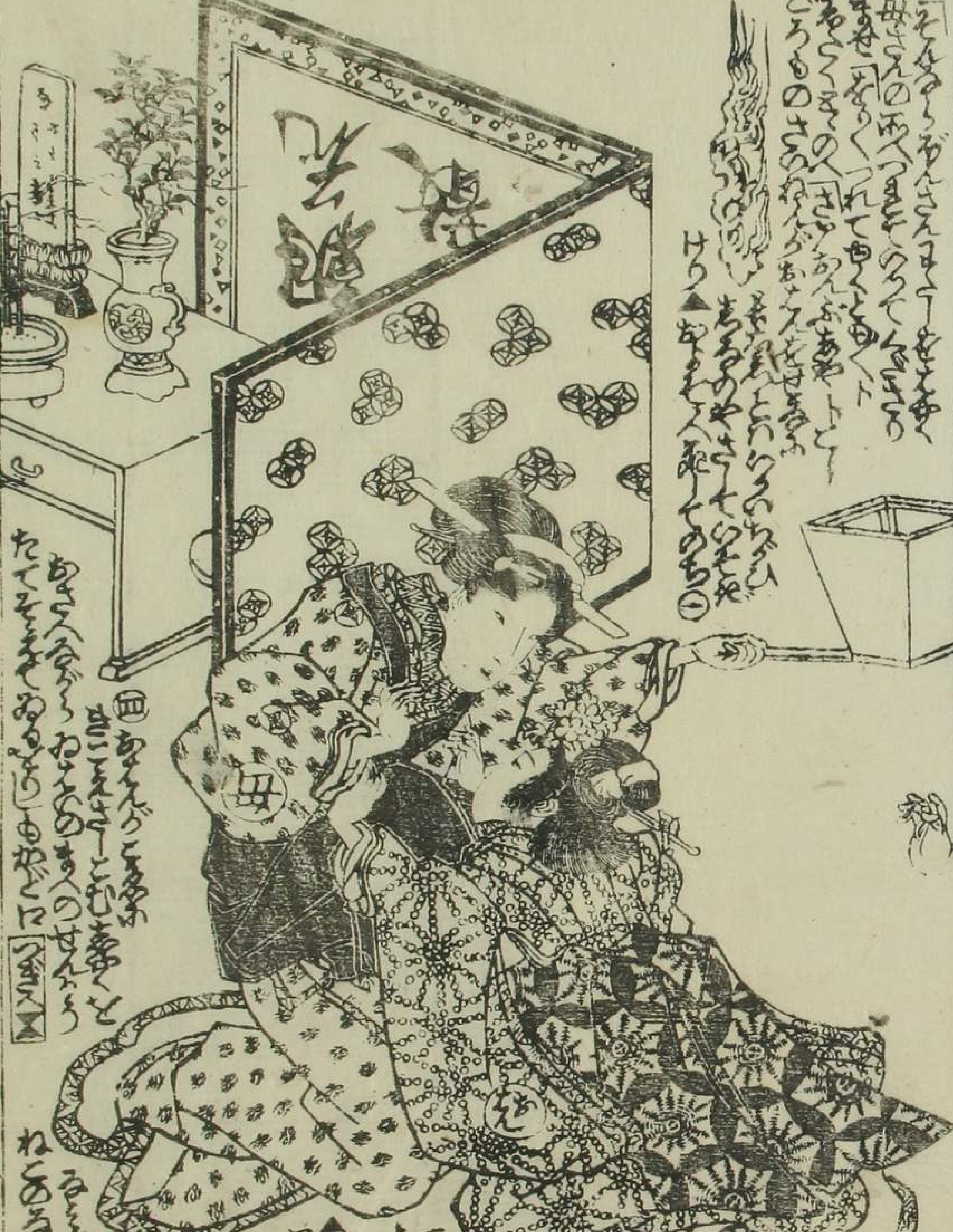
㊁は地ざう
だうのうらへかくれてりさんきうのを
とるへゐんぶつしてわさりーふすめまが
つうよりひと玉とおかしくとのぞ
まづ地ざうだうのえんにあきてゐる
あけんがさんやとけのうへはおちてきます
うせけりさのねんかーぎるよあかりつーが
かゝる所へひと玉をてらすへつるの
あるき所にうもさやまぞこちらへくるゐ
▲やあかりやいやのものさてり「ふどもの
れとけれこれでござりますうと見てさまう四ッまた
でもあるかいさまくあくまるがよい

つぎへヱ



⧗とうやさーじやぞよ〔二〕てろうえまーさト
おくの小やへぞ入りわけるをりふしさちと
よあらしのやぶの竹ざはくとひゞき
けるにふどものこゑかして
母さま〳〵トなけバ
まさしくおきえが
とけのちゝおやり
ざまをうのさえ
ねんぶつそりー
えやをけふまう
よりてあさふさ
あけれバ母の
ねがひのやうろ
らくけさむ
〔三〕あさるおきえ
えてさまのごとふ
ぢやとてんびとふや
えてさまのうト
〔三〕あさけまべきそれ
よくぞ人ひふらく
がひ色トさやとけ
よりのぞゑあげおろ
てのをとへつまきてり
をうくよるくおえんを
だほじさうーせうきをらく
かさりけまべをきまぶく
どもカーとききるえさへわれ
がゆへをそくきてりけ

〔二〕とんそくその人のたのをうまれ七七四十九日があのぐあい
ちうらふさまよふ四十九日たちてのちゑんえく人ふ
やどりてまきうをとまえと上ずんの人ふあく人への魂
ねをふうまきさふぐふ志をうをうえ妖ん
どんある又へつのぜんく安らふ
おそふふさび人ふよまるゝ人
ぶつ志よゆゆ志あーふ五ぎだ
ちうひ色やふまえがうくう
とえのらあつさと
ぶつのうつさき
まずくらく
ちうつらふ。
なまよふ
れ中一め
のやくへり
らまれんと
おのふわり
ろうたまのあ
さえ気まる
おさんが
ある気がらを
ええきゆきうち
ハ色とれさい
りとふとききえふ
のをうりのたる
曲家よまうの
くゑ気ひあまる
人きくふる一

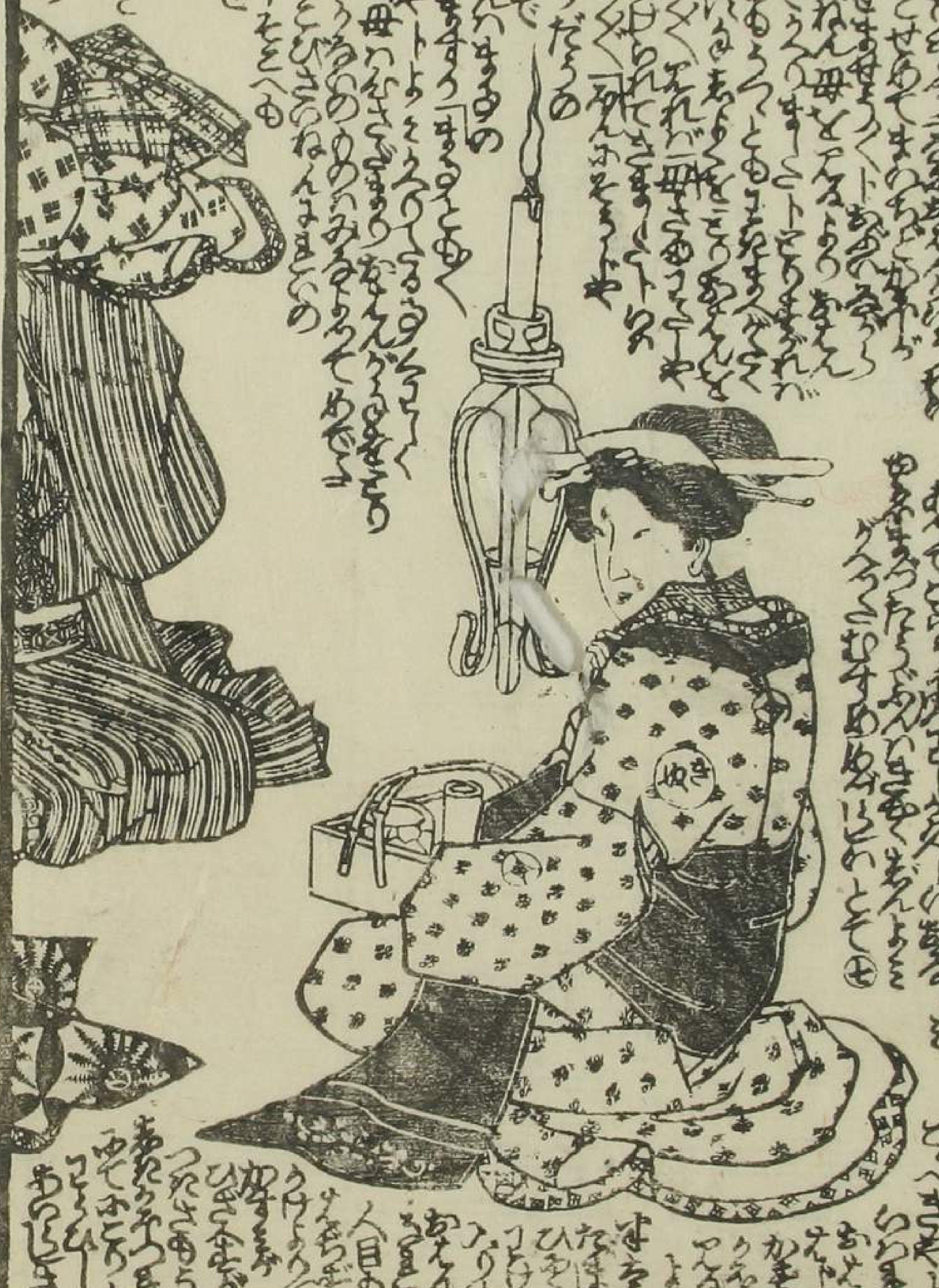


〔一〕そうなうらがおんさんまーうをえ安く
母さえんの御へつまぎへのうてくきさり
まそ〔一〕をりくつれてやくあくト
あさくえの人〔三〕さやおんぶあをトトて
ごろものさのねんぶつあをすう見て
まえ気とおらちのちふ人
きるのやさそうのそれ
けり▲おそふ人みてのち〔一〕

たゞ人
ある
あの
作者とふ
るとご
貞八
ごの
あの
おやも
それて
しよふくるる
よろこびの
さうのり
▲さよふまーふ
母々目を
るえそらし
あんかゆ
せいあまよ
そうじの
えくらふ
ろけてある
るとごおーふ
ねこあるくさへ〔三〕

〔四〕あそんゑうこまるふ
きこえさーともまくと
あきへ会ぶうねそのまへのせんうう
たてそえてゐるをりしもかどに
つぎへ⧗

⌛たゝくれたまゝきちんと下女もとりぐ
けるまでおそふとりもちてゆけごう奥家
るゆゑ母さんとたゞ娘まへ「おまへさまあの
[illegible]
かうまいりますとせめてまのちからをかれば
そうい「夫そて[illegible]まつくト おまへ今ゝら
入りまてゐるさいれん母とて又よりのおまへん
「母さまのきそうてうのすーこトことりまかれ
おまへ母め娘のもうてとものおもす人がくて
下女はさ「これでまよくこそ行こそのおまへんを
よとかく えよくく それが「母さまてこーや
めおくへはたすけられてさきのくト只
まそ母のえつぐ「何んかそうーや
ゆきうひ肌ざうだろの
「おくささきのねんで
ござる「代おまへんはまるの
おまんでござりますう「まるてとも
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
てへも人をよせ
あるまやう
さのねくゆれ
まんぢちそうと
のひーよ「のやく
さむやうかうりう



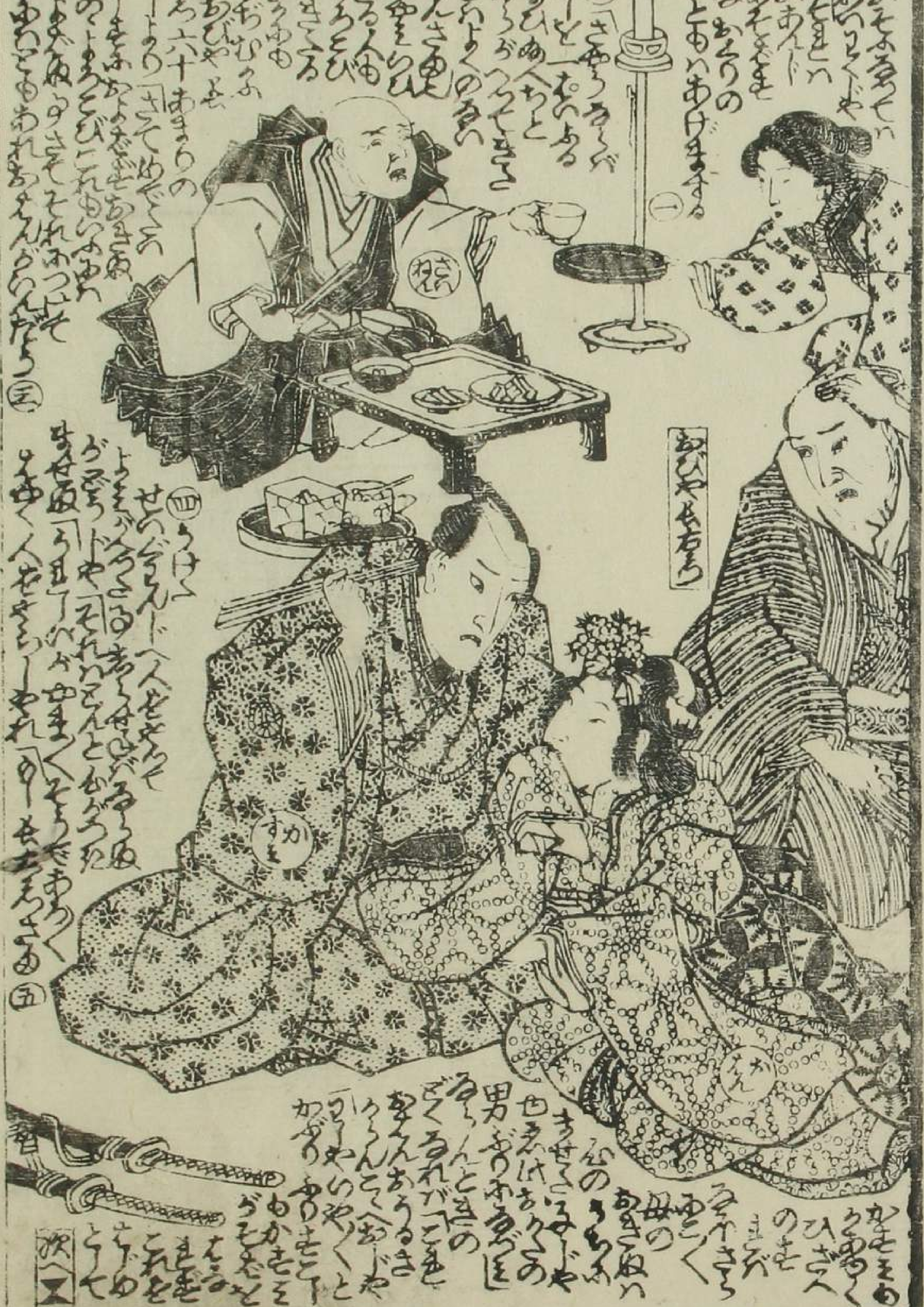
㊅「どうだらうあれさいおかくされうりう[illegible]
あつまの[illegible]かすまさま[illegible]とて
またきとー[illegible]どちとてゆけ
あつてどうか[illegible]あすをゑを
ゆ奥きまかたらうでりんいは[illegible]まんよふを
ゲラゲラとむすめのおはいふとて㊆

㊇そんならとおる
奥家あつまーやこ
のーじやこれおまへん
とてへきてやト
[illegible]までそ
おまへん
えやめて
かまきから
くわをも
やるより
ほうまず
なぜよおひそる
つけ
みりー
おまへん
こまりん
人目も
はぢぞを
うけよので
かすまるぞ
ひざを金かり
つえさあられ
あたのそうのきと
ゆそふとりと
これから
おりしまふ

おみちわ[illegible]
かそくへはまで
ゐまゝかくりの
おとものおあげますする㊀

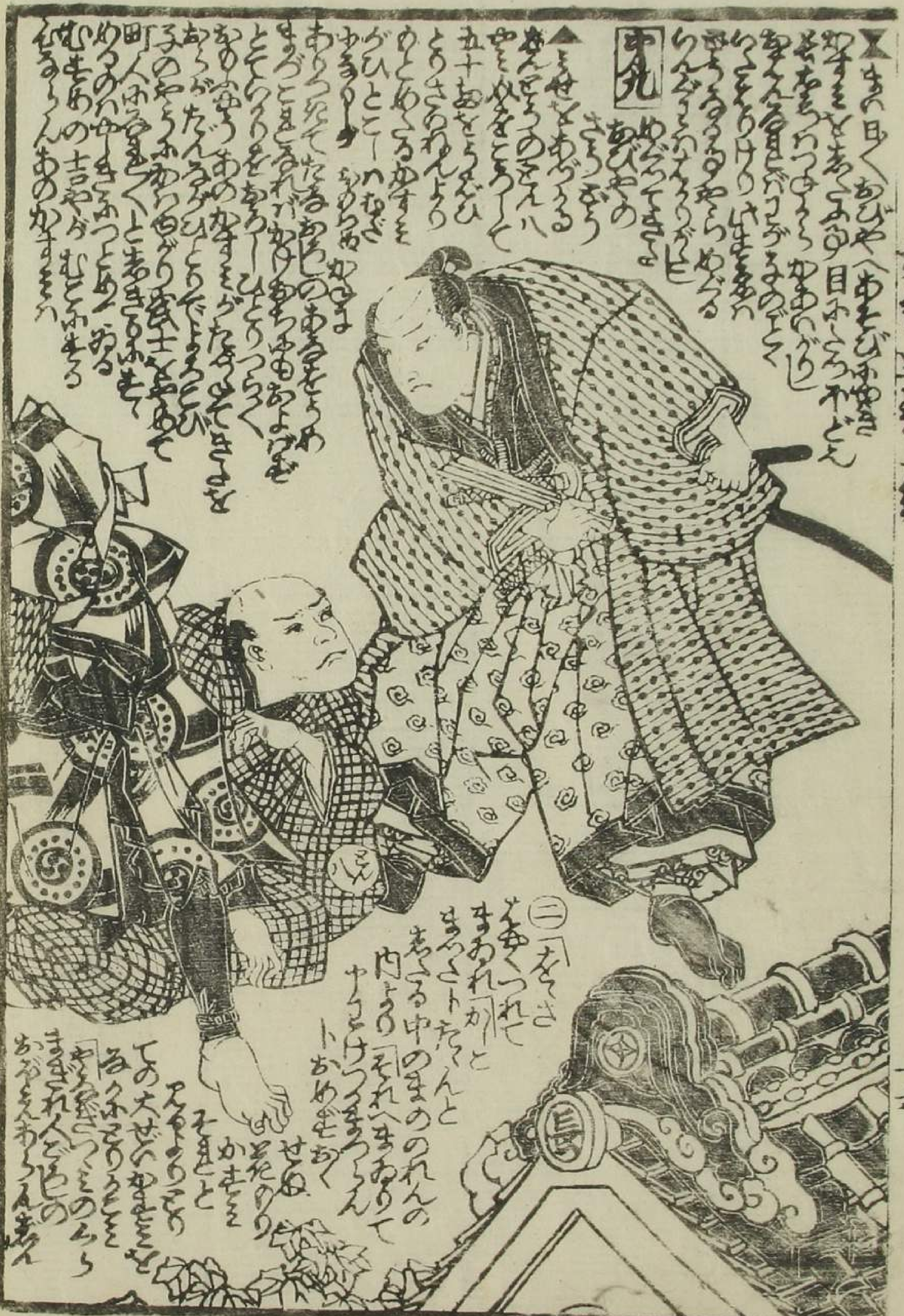
㊁「さやうならば
めしと一ぷくよる
まらひぬへちと
えらいうへでござき
とのよくのあへ
ゆんさまをい
くまそらん
ひる人も
よろとび
みまえたる
そうゆへ
まちひでふ
のおひやくさ
おえ六十あまりの
ぢ一人の「さてめでたい
いまはおのぞみあるま
どのよろこびこれもひとへに
およびなひかさてそれはこつい
さまのもおかれおまへんだんたか㊂

㊃うけく
せの住へ人をよせて
よまかくさるあつかたのが
かそうじやそれそんとおかうれ
まぜ娘「ころ了わか主まくそうちまるく
まかく人をきふーあれ「やーさまえそきさあ㊄



かまきまの
ろうあく
ひざへ
のきを
ひそきさら
ゆこく
母の
おききぬは
なのおもいの
まさてそみじや
㊆えば母くまあ
男ぶりやまき[illegible]
なんときの
ざくるれが「さき
おまんおうるき
くるんでへおとや
「あわいのやくと
かぶりのまそ下
もかきをき
かもえそを
さなまき
これを
まあぞめ
とうて

次へ⌛



⧗その日くおびやへゆきとびかゆきむすめをともなひ目ふくろふどんぎぬをうらつけてかまわがりしゆゑん見ればすがたのよくわくさうけりやはまきまへがちうちるるやらめぐるらんぞうらわえうがたるビ

【中九】めづらしきおびやのさうぶら

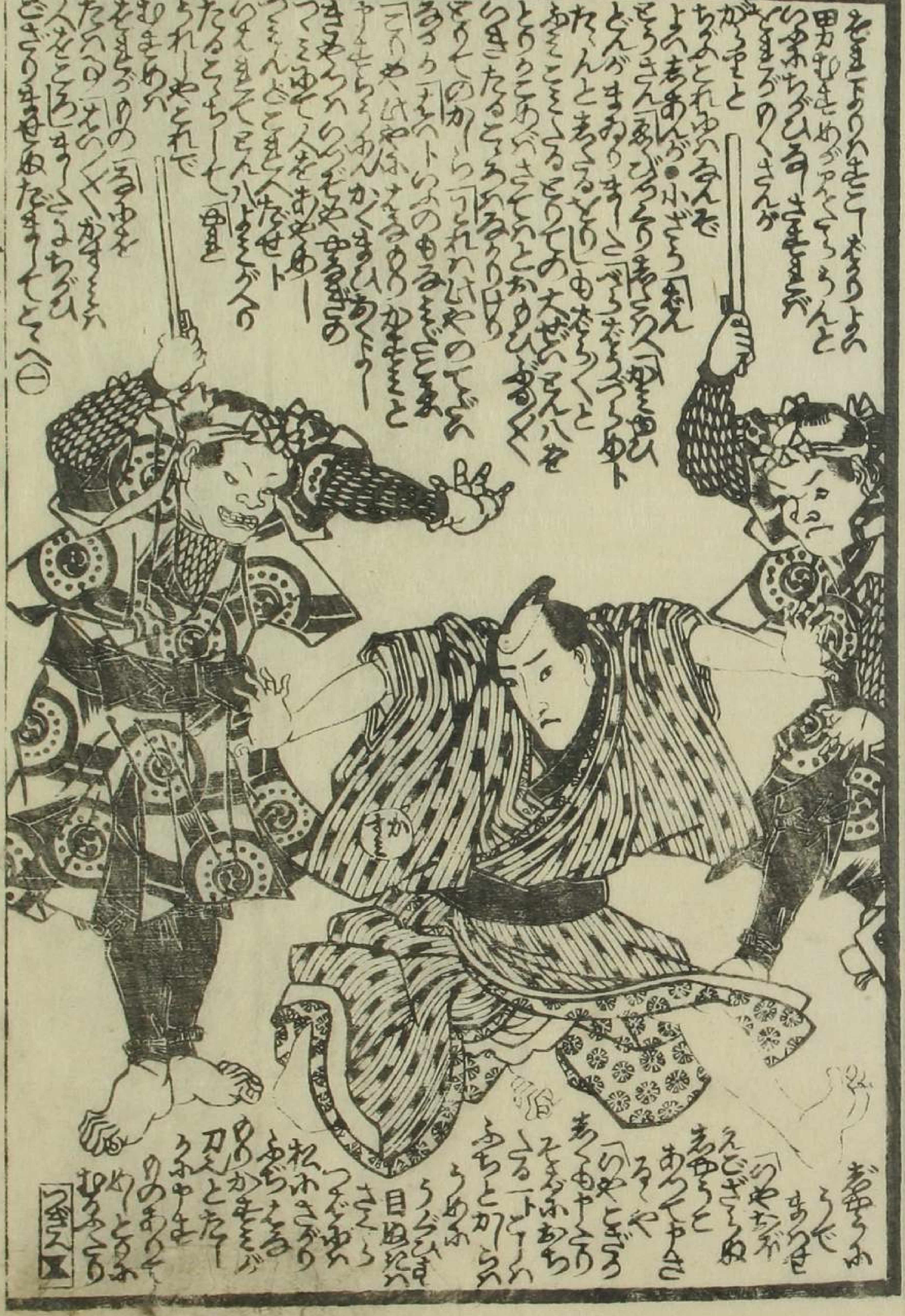
▲よせとおびつるおんぞうのきん八やをかをとらへて五十あまをきらぬひとりさらわれんよりめとめくるむすめをがひとこしへなぎかのものおかまはゆまうりし

あわらいそれたるおびのむすめをさらひまづことまされかほおちのもおよぶむとそのうをおうしひとりつらくおむすうおのかすまがたちそてきさまをあらがたれうひとりそよろこひ子のやうかわら白ざり武士とあかて町人ふらみてくとあきるふもてわるのれやうたつとめるむきめの吉やダむとふまるむするらんあのかすまへ

㊁「そのさまをくつれてまわれ「かしとまつさトたてんとあせる中のまのれんの内より「それへまゐりてやうすけつまうらんトおめきおくせぬ

さんのりかまをそまとえきよりこの

ての大せいかまととをを「なにをそりうとをまぎれ人どものむらおかえわらん



そぎ下よりれきこしおきりよみ男かむきめかくてうらんとおさちがひろすさまをきそずまうのくさんがかうぞとちからとれかへるんぞよへきおんが・小ざうう「あんそうきん「あさびらそり番そら「中もあひどんがまゐりまし「べらぼうめトたんとあへるとりしも者をくとかこをくるとりての大ぜいえん八をとりこあべくさそれとおあびかるくりきたるところへゆうりけりとりそのかしら「これわいやのてぶるあるうかへトいふのもるまぐことまこりやいやかおあるおかまをと

やかちらかんかくまとへあくとしきやうわらうぞそや女中がるるのてこゆて人をおすかめしつまんどことを人だせトのそまそくさん八よまぐんへりたるところして「番頭」られしやとれでむきめわそきうつのの「番頭」ゆきをたへへる「そのぐ」かすまへ「へそところ」まつさらちがひござりませぬとてへ㊀

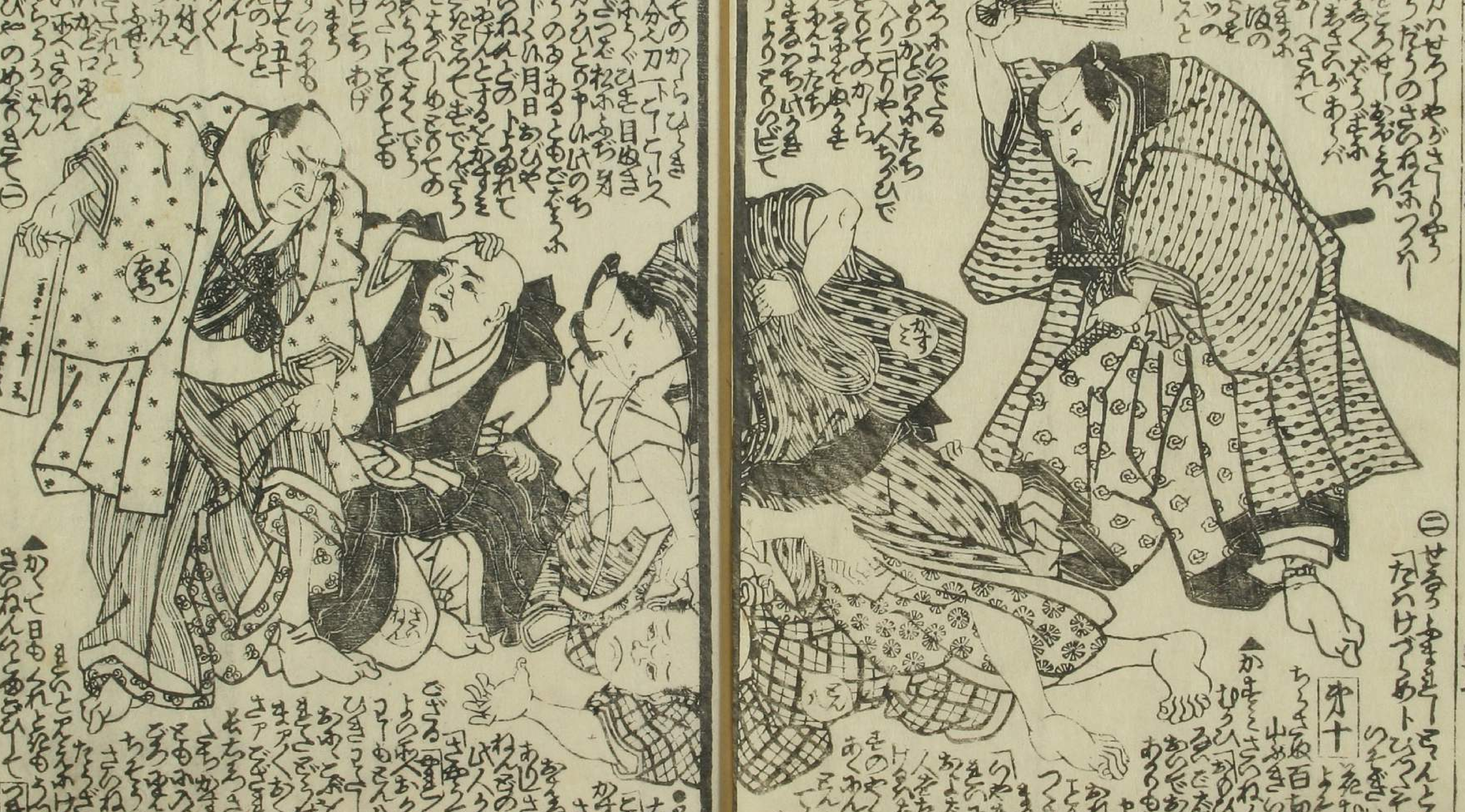
おんうふろうでまつせ「のや女がきそびろえぎざやさあちとおてやくさをくもやうりそるふあちるトどうしもかうちとからりらあふらかうだ目ぬきえれさくらつぶかれさかりあぢらくるめりがまをまゆ刀をとたりふやまよのまのそのめしとをかむきみそり

【つぎへ】⧗

「のふもその刀ハせろ〳〵やがさ〳〵りゆう思ひおつて地ごろたらのさるねんにつかへているひとゆへ人をころせしおそぶのたちぬとござらぬ「ヤァのかくぞろぞうずぶ刀とやるならがまさんぶおわ〳〵ぶくろ〳〵くやせト〳〵お〳〵へされてものうちあう〳〵さまうまいかとなれ五でいう坂のかり〳〵ヤ子よりせるをぬすくいびとる一ッのつみあのいうかれせんとそうもろぶるきをまずかるよりけり「ヤァめんだちるるさるけよ「さつさと〳〵トそのまくどりもたくなるあらいでゐるさるねんさるせんよりかどりふたちぎてせ〳〵がまらと入り「ごりやく人ちがひでござりますまする●そりそのから「ヤァ此やうぞめるぶ奴をぬらを入ちがひのまるちたうまんよたちゆすする[illegible]つけト[illegible]よりそりの[illegible]て

㊁せきろ[illegible]ぞんとぞん八「たわけづらめトひつとらへのそぎけりそむくゑむこんとよろそへ

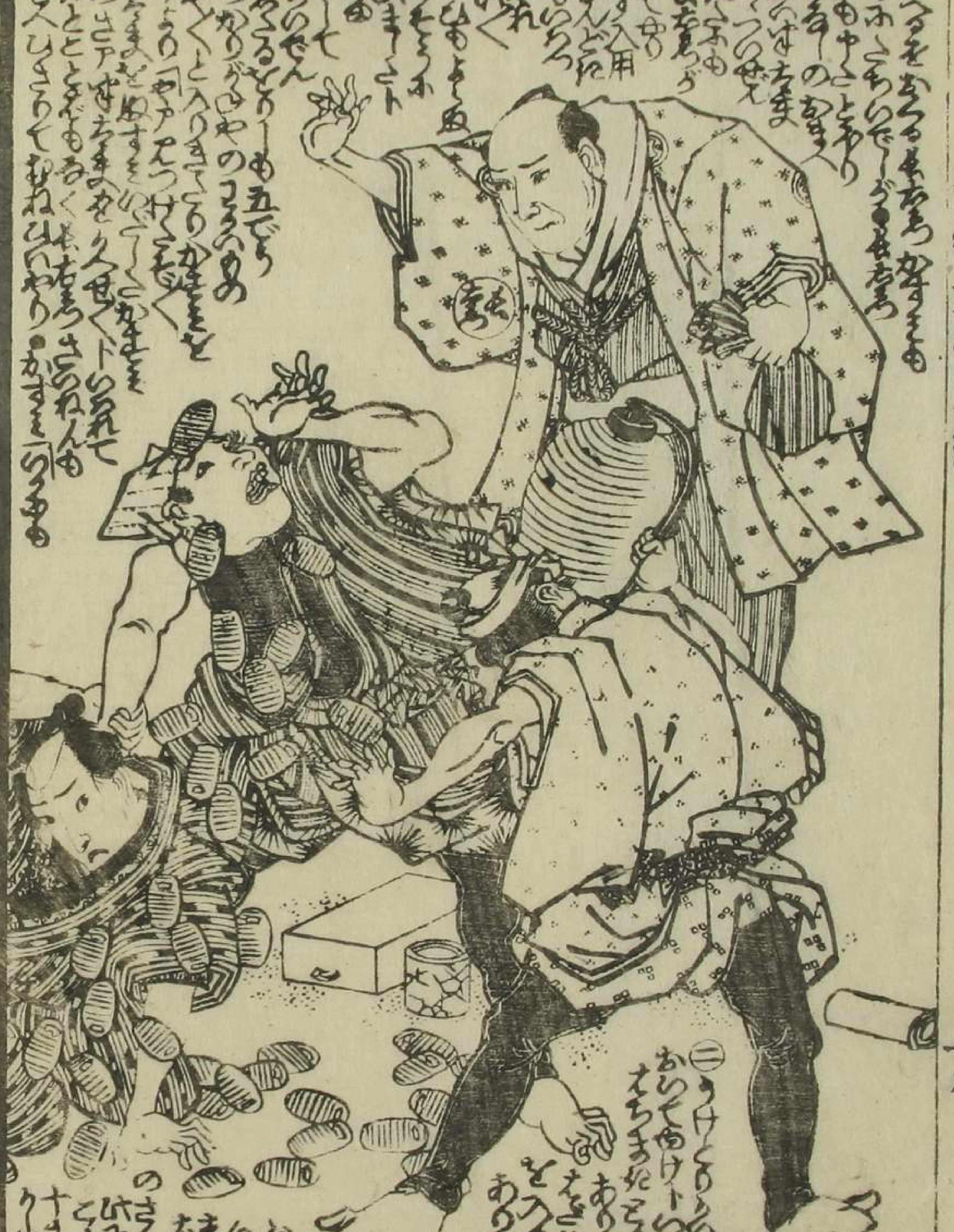
▲かくてさるねんハ百両の山ぶきいろむつひの「おのがけ[illegible]だたるうのおもしろげやおのれもたつやるさおれらくよとぞかつくされまさ[illegible]「うれしまつまさぶそのおあよ大金をたまけ人を[illegible]そのやくみあくかんのぞん八ぞんの[illegible]お[illegible]



やかせけまふそりそのからひつき
なんそ●一ッ金三十分之刀ートとつてらく
ふちかいらうめくちぐびきそ目ぬきさき
うのそをえぞ[illegible]松ふぶち身
ひぜんむめの右刀くひとりや小のち
小刀ふつきくらのうちあるともござぞうふ
とくらうくけまづくの月日あびや
ゐどのぞん八さるねんどのよふあれて
ぞん八そもそうがやけんとするをかすまを
いそせよりのうさいそこそでもでんぐゞろ
そのまゝおとさきうぞく〳〵めどりぞのから「でぬく〳〵うちふそそくでうさをよ「ゐりとまつさトさりそともぞん八をつれて〳〵おけこもわげられて「おめ〳〵まうたまうぬやきすくいのちもゆるさぬ[illegible]そ五十両をりあ[illegible]のふとあうてでるむかんあんしそくざさつまるせ「ゆく〳〵なかゆやつめゑ付とひつくそいどらうかん目ちがひのそころぶせうめされりのどもきて「それとのぞく〳〵ぞん八はかどはなせ「いつまで〳〵いつの下さるねんおちぞもからもあらころ〳〵ぞんぞうもゑ八をあびやのめぞりきそ㊀

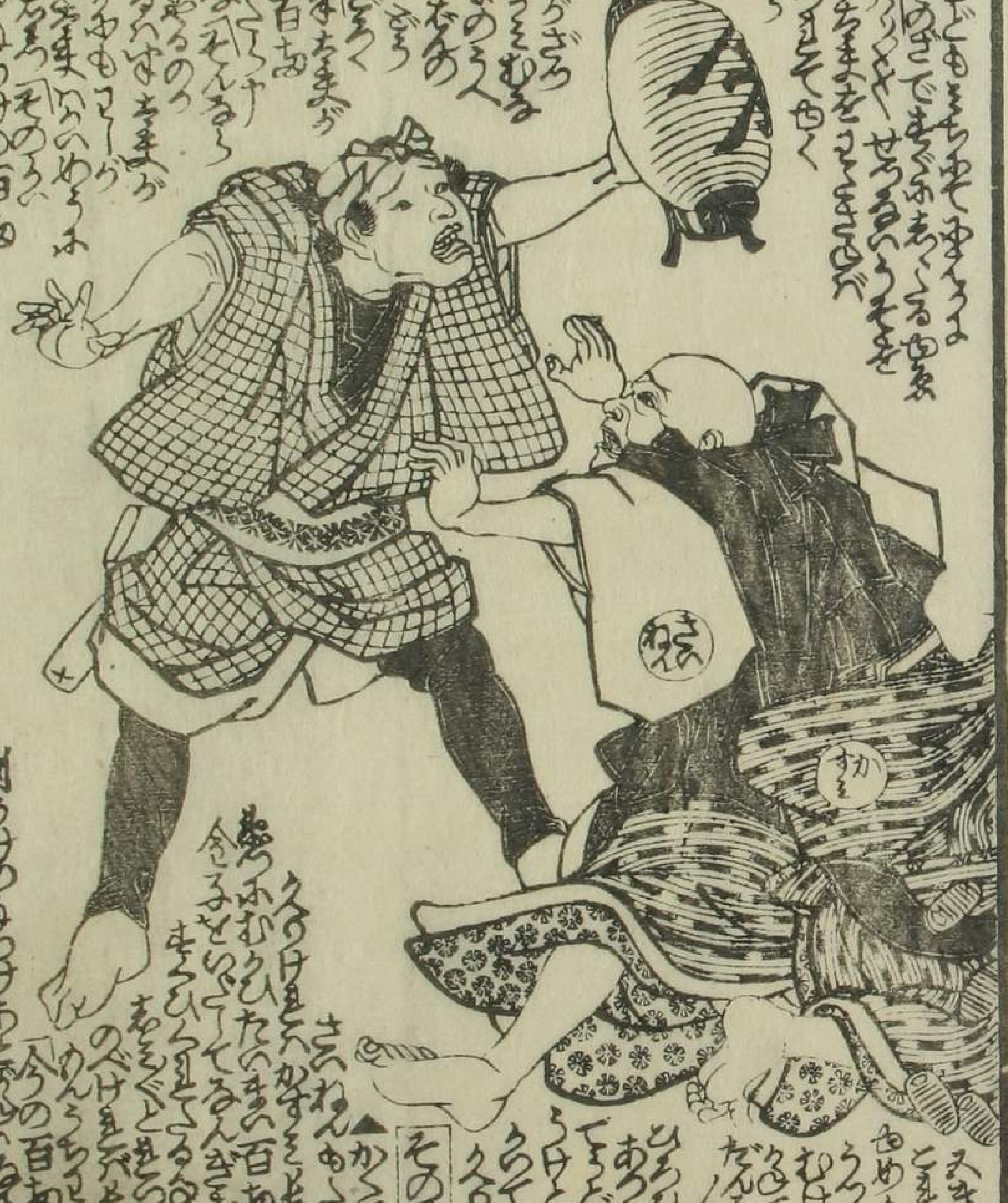
●「そ[illegible]とかすをさるおやまのいさのとらねんさのとらびん入るるぞざる「さいそぐぞ[illegible]「金つくよる金百両くげでてつーもぞん八わたそひきさつて〳〵あちとみとと[illegible]まことざらぬせんまアくおく〳〵ださアござりますトおちおつき[illegible]くへちかゞまするもそもあぶりのぞおぞ[illegible]のちそういさるねんかたうぞのまへとゑふけり

▲かくて日もくれと[illegible]ちりさるねんゆ[illegible]そ[illegible]ひーて「つゞき」



⧗かゝるをおくる長右衛門かすてらも
さもふ〳〵ぢらぞ一ゞ長右衛門
「今も中〳〵とあり
番頭一の番頭
のめへはさまま
ぞの〳〵つのぞえ
せわしなくも
いも者者ろぐう
まぞ出り
ます入用
かゝるんどれ
でもいらぬ
「しやれ
「ゑまく
おりはもよまぬ
どちもこうふ
あとへまーさト
ゆくを
どひ一て
たちのぜん
とあゝるとり一も五でう
娘のかりがねやのうちへあ
とやく〳〵と入りきてこのかすてらを
見るより「やアヽこれつけてもまく
ちまちまあと娘すきいゞて〳〵こかすてら
ともいさア付出まをひ人也く〳〵ト〳〵きれ
るんとおどろきもあく長右衛門さわらねんも
わて入ひきうりてむねひいやり●かすてらの中を

㊁うけとりてらて
おふ頃けトいひすれて
まちまつたるを
ありくさ
まぎ出しに
とつても
おり「まく〳〵
かゝりけ出
山ぎ
うち
まふ
出る
のさくとも
ひる
こらふ
すまの
うちに



つまるのあげくはともまちゆでゆする
やまひがかさりそのきでまぐふえる
くせとおつても「ハりなきせうあんう
もくみ一ゆるのはたまをさるきまさ
と者さを〳〵つまらそでゆく
さアとハトむるぐう
そ〳〵まとうんとせん
くる事それもせわし
まあ〳〵ちとより
うるづまもく
らけ入のさうあるを
さけそえさしぞ一がざる
らふだんを一トつきむる
ぐらさうるあくまのうへ
えう人もむねへも小さなあ
ひへ出り「やアとうやぞう
いやとこれハくトあきらく
ざつくり●長右衛門「まあ〳〵まが
見うけるのつけ百あ
たゝいおうけさそくつかけ
ぶんハおるまへかうそんなる
見うけるとさえ一わるのつ
「そうてさあごさるへはさゝまが
家のきらねん「ひのをもさしが
あさうふんしや出来中へのめをふ
るりまくぞ●長右衛門「そのをう
めうと見うけすゝみつけの百あ
あとぐあいへんてでもうらでもことにてやるやどふ㊀

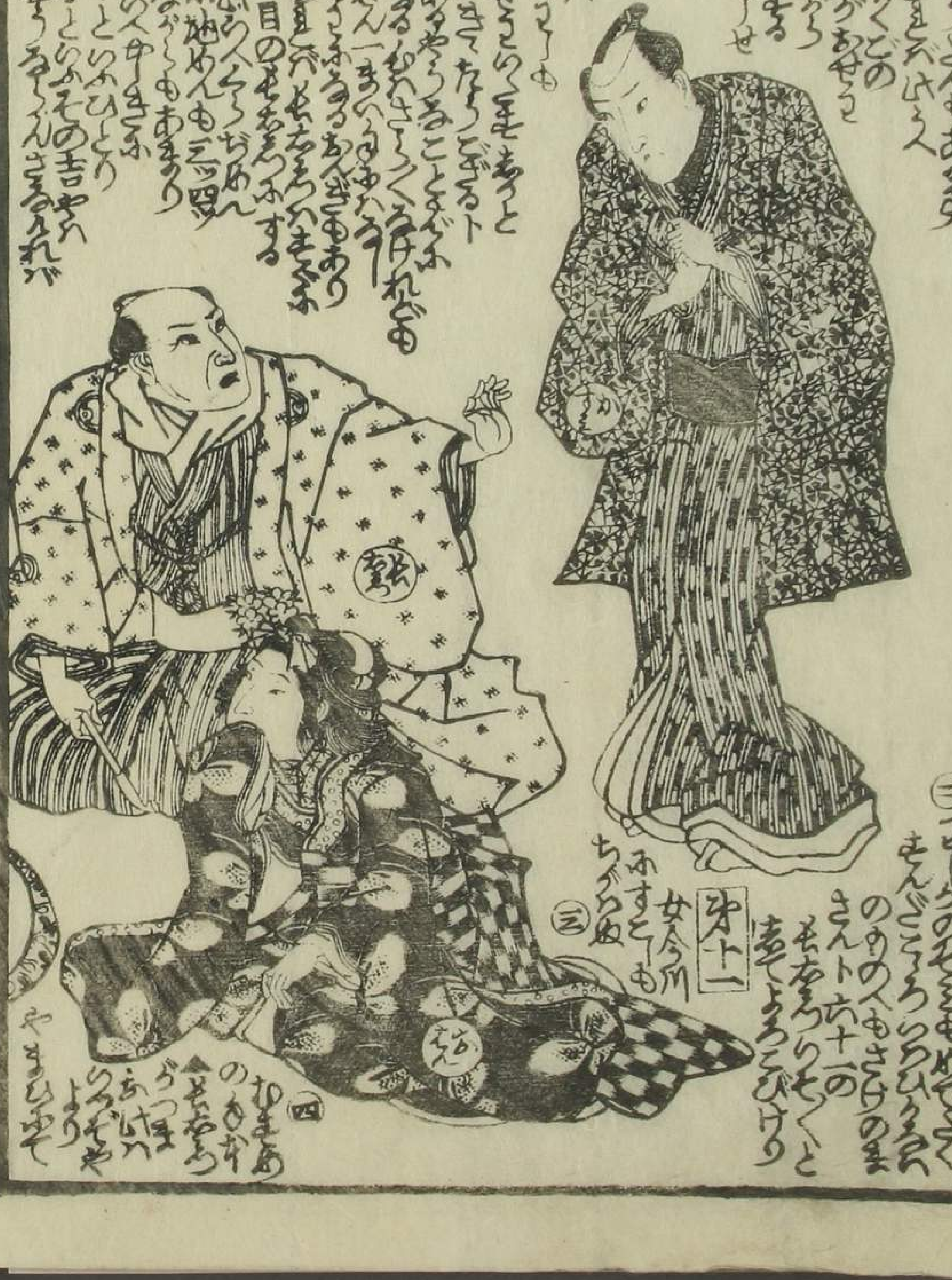
まきの
とまへ
あめりま
うゝ〳〵わ
むけんの
名でも
だんぐ〳〵

ひそか
おつめて
てら百あ
うけとり
うらて
久うけり

［その二］
▲かくて
さわねんもふう
久うけまへかすてら長右
衛門ふむくひたいまへ百あの
金子をとりてるんきさを
まつひくゝてゝるを
あゝぐどまつを
のべけ出来出来
かんぶんすまひ
「今の百あハ

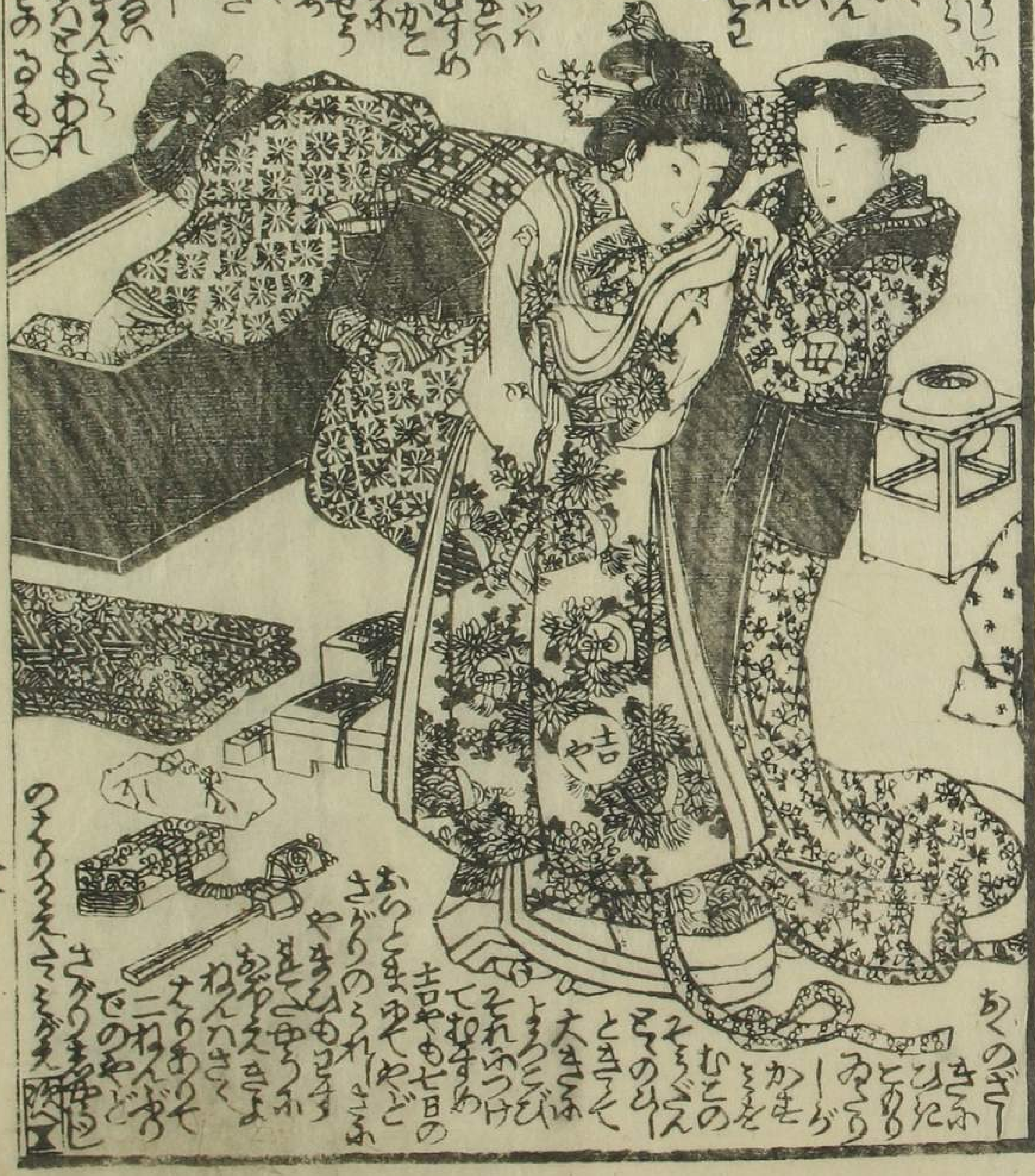
見うけるのつけあとへくゝでも
ぞくらかぬ是れねど［つぎへ⧗］

〼中やうのてそうごんもあるうち のやかくらまきるまでは二人 百ちやう二百ちやうくどの まへ代世のおこりがおせうと やきてもなるまじうかが うがみとはまるてまる るなうるぞやうやせ どもけなきくさと おべんどのなのへ 町人とるりて あびやのへさる そくせうるさ乳へ なへうなへあてべかは〳〵も まさそのおぞあせうとのくまもまうと いてしきあんじつきてたらすぎるト ぞうやうどもあかやう者ことまず かまきらへ町人ふるるわれさらくなけれども さうあるうそゆだん一きのうのなう 身ふひぬるけてせすぶるるあくぎもあり はかくのみるとなる兵衛が長右衛門ときふ りんきよしてヽ二代目の名あとつぎふする とあるさますれはかくるちかん わりぶるかたきよわ池めんも三ッ四 あるとみる町人ながらもあまり まろくへさうく娘のへ中まきふ つとめてとるる吉やとのりひとり むまのなへうへきるとのそのの吉やへ さぶあしふるのやうるしんさるのわれが



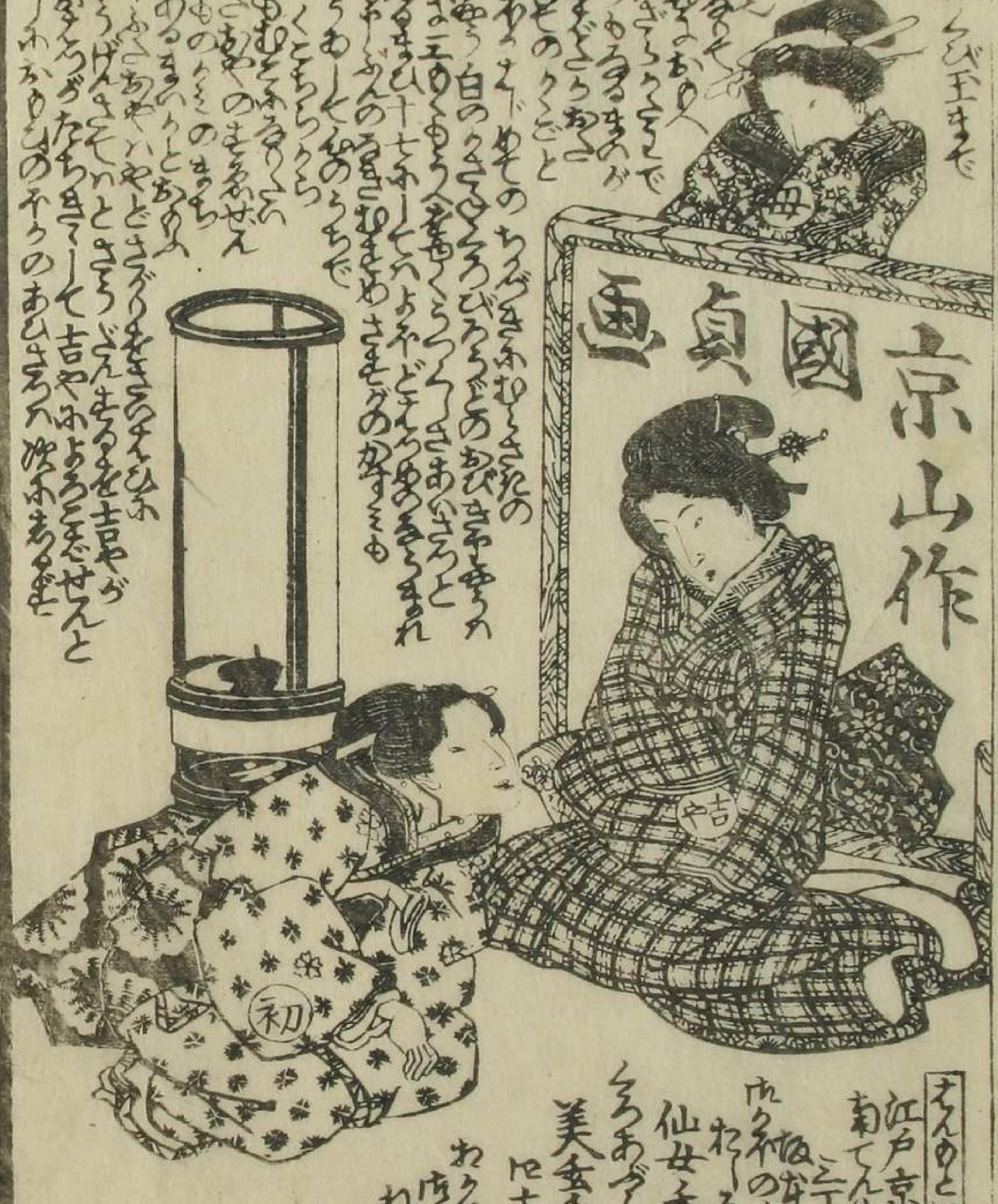
㊁ こゝらのぞきゝめゝぐさく まんざうろうむろ乞へ ののゝへもさけのま きんト六十一の おまつりそくと 遠てよろこびけり
㊂ 弟十一 女今川 ふすとしも ちがふ文
㊃ むすめあの おかか きまやう かつほ あけれ らかぞや より やまいから

らう中すのくされを申きしや 可りかぎともようのむろう むこをとるてえぞうえよしや あさふくくろあまさとゝ申 せよせんうとさいとましあん をとくさりて長右衛門はのへ はぶれ「可はみせうのそれ げしとる子ともあのおれおやと くゞさうるのをころひく とも見かり玉つんとなりさ 者け兄へあぶり一めしかさ るをやめて町人とそる るさくさくへりとひけしま せぬのやうやゆ也は身一ツへ おまうせやしも「イヤそれへ くくげけるへまかくべむすめ 吉やとぞやとさぶりわかて つけてよびよせまづるふ とるくらうつなれまかせう ふうふのるるへそうく さうまんしづくでるけりや おとぶとけぬ「いやうとさ くしふあのそのおむまあ どのきりやうなはるとや まをぬ「それはくだけるへ ましくむすめ吉やはまんざら まそらく女でもるへるゆへともあれ くどろしのるもくなるのるも㊀



あくのざし きふ ひた とあり みくり しが かまも そを むとの そくぞん そのひ ときて 大きふ よろこび それにつけ てむすめ 吉やも七日の おかとまゆそやど さがりのられしさふ やまひもかす まさ申うか あらえきよ ねんへさく なりありて 二ねんぶり でのやど さがりまかり のまりとなへてゝとなど

▲ねとのくび玉までとりかえてやるなどさうずがかましさのおそろしいとのかあの人その目にならでくさきくつのおりのかたへらくまんざいらくにてでまうともうるさまのがとてもおそぐさうなことふくろのそのくぐとおもひのおくさまてめそのちゞみきれむくさ糸のおゆらのゆう白のくさるくろびろうどのおびきやのすそまでの[illegible]十七[illegible]よそどこ[illegible]さまぞのかすそも



すんめと口上

江戸京ばし
南てん生丁
三丁目
坂本氏で
売出しの
仙女香
おしろい
美玄香
一包四十八銅ヽ
かるくおしろいを
御用
ねがひ
上げ

甘泉堂手版畧目録

柳川重信筆
繪本婦どばうま　全二冊　彩色入
むかしより婦人の貞操義烈の婦人[illegible]をあらはして画のうへにも解しあらはし[illegible]

香蝶樓國貞筆
繪本名跡画傳　全二冊　彩色入
人のみちをたゞしく忠孝ふかゝらしむ[illegible]教訓とするべき故事をあらはしむる為の繪本なり

蕙斎紹真筆
繪本高麗嶽　全二冊　彩色入
[illegible]

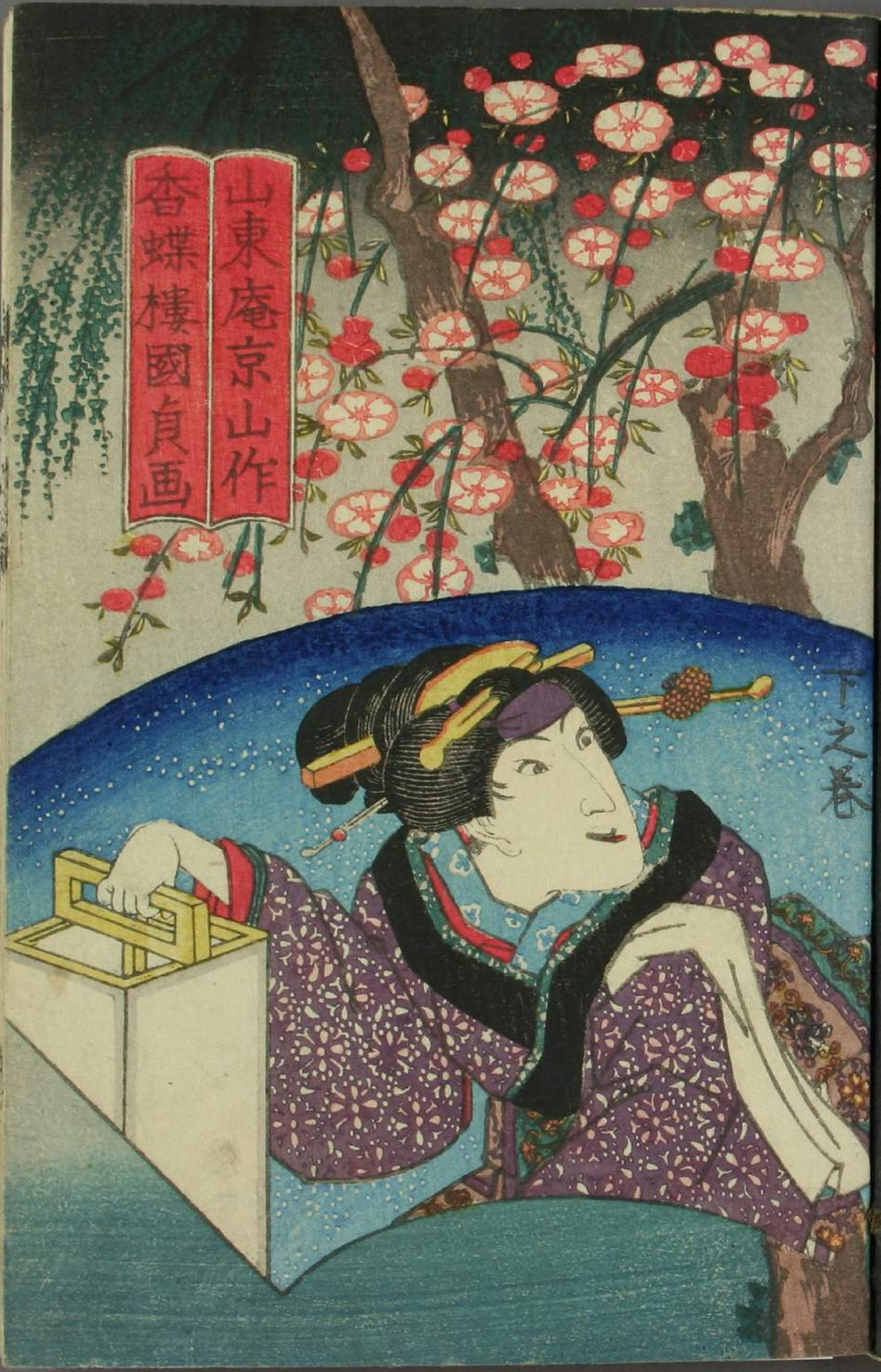
紅翠翁筆
繪本花鳥写真圖會　彩色入　初編三冊　二編三冊
九画道初心の人[illegible]

歌川国芳写
再版　繪本二十四孝　全二冊　彩色入
此書は近世名人のきこえある故人勝川春章の筆[illegible]国芳大人の[illegible]

歌川国芳写
再版　繪本武智袋　全三冊　彩色入
武者絵本あまたあるといへども彩色入は世にまれなり[illegible]

京都より美艶仙女香　京ばし南てん生丁三丁目
おしろい黒油美玄香　本家坂本氏製取次
右おしろい店評判よろしく沢山御求ねがひ上候

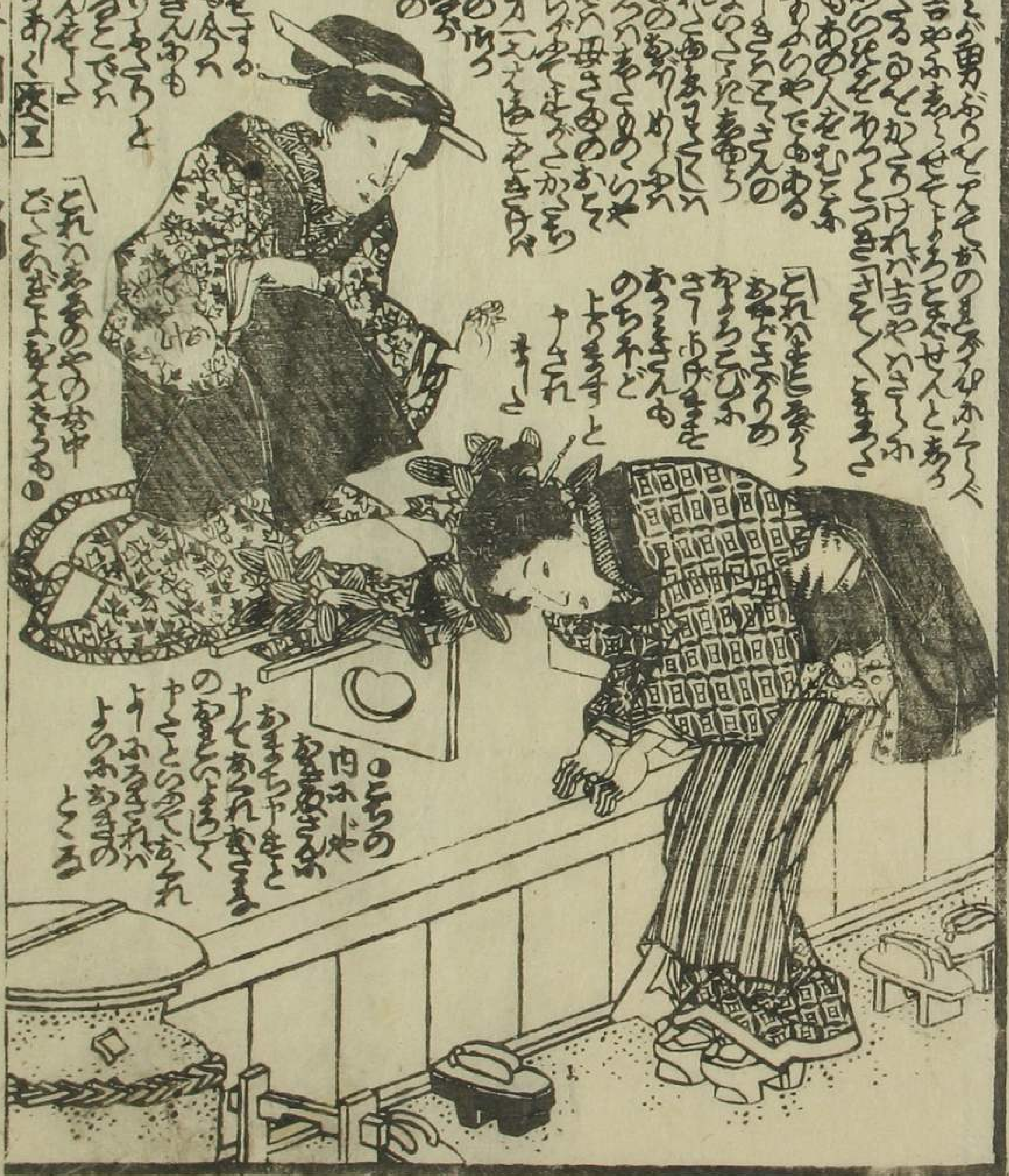
地本問屋
廿八神明前三島町中程
和泉屋市兵衛販


山東庵京山作
香蝶樓國貞画

五

▲下女のおもてなかすまゝ勇ぶりもとりそ〳〵おのまへ [illegible]

[illegible]


これハあまのやの㕝中どくへおせよ [illegible]
これハまた [illegible] のちほどよりますと [illegible] きさ
○こちの内かや [illegible] よのふきまのところ

かつら川秋能月

娘評判記
お半の部
下之巻

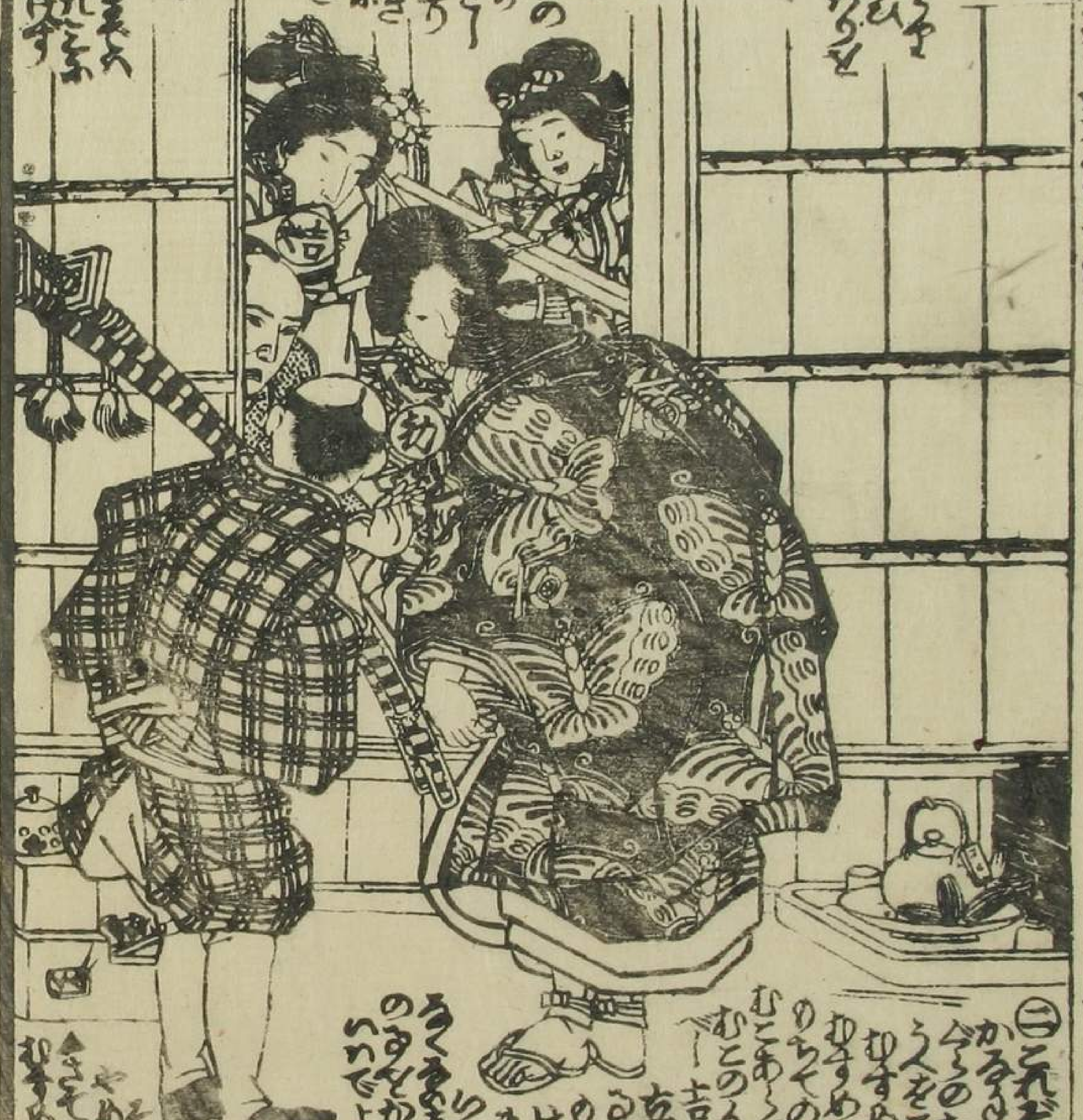
京山作

圀貞画

戌春發兌

書行 甘泉堂

亞ふきんをまれバかきニゐもきまゝみつれ又むとをそるきそつりニわもあうたるやきそれニ又あやのやまきむとだんをさる田へらつりそ中上のわんの内よあつら亀そろれてまき人ぐるその大ふき人へあらそつてきのやむ町人のむすめでも其けんむらうらぎれバ武士も其でせんまきうのと苑六今ぞよそそうづ亦そうかき寸やのをしかう奈し其ふより女房それだこそ命も其き射ふそ六日のすとふのくへとらめぐんささ両の身をそむちらくめしつきまてわあのゲきありとうるをそつ上まれさニとあ身への十わんの休すつかさニ亭主びよくつてあるまへまきよ六わえつ化ふえニをろれかれわん戊あて

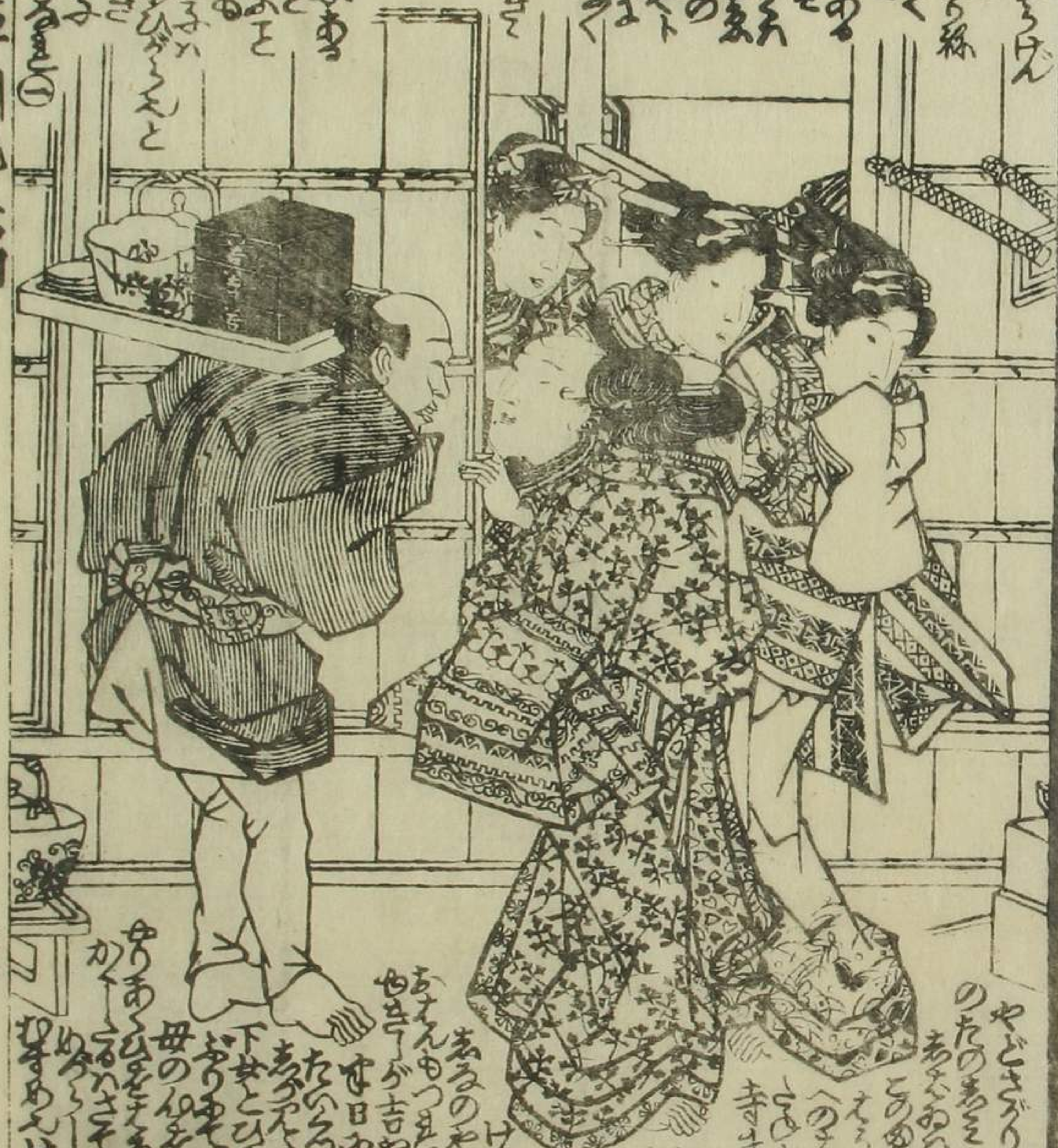


㊁これぞむまあのかるさがおかん今らのおうようりうえをこえるむすめんかるむすめとつまゝめらその者おむこあへこれもみむこのるなさるべし吉やが母立さてあさるぞそ若差めんあえ色けれがあさまをらそりうえもうくまをとろでんのるをかすまへけてよろこてをあるのもさきゆえゆぞうえへやめけり

▲さぞかゝるむすめあれハ

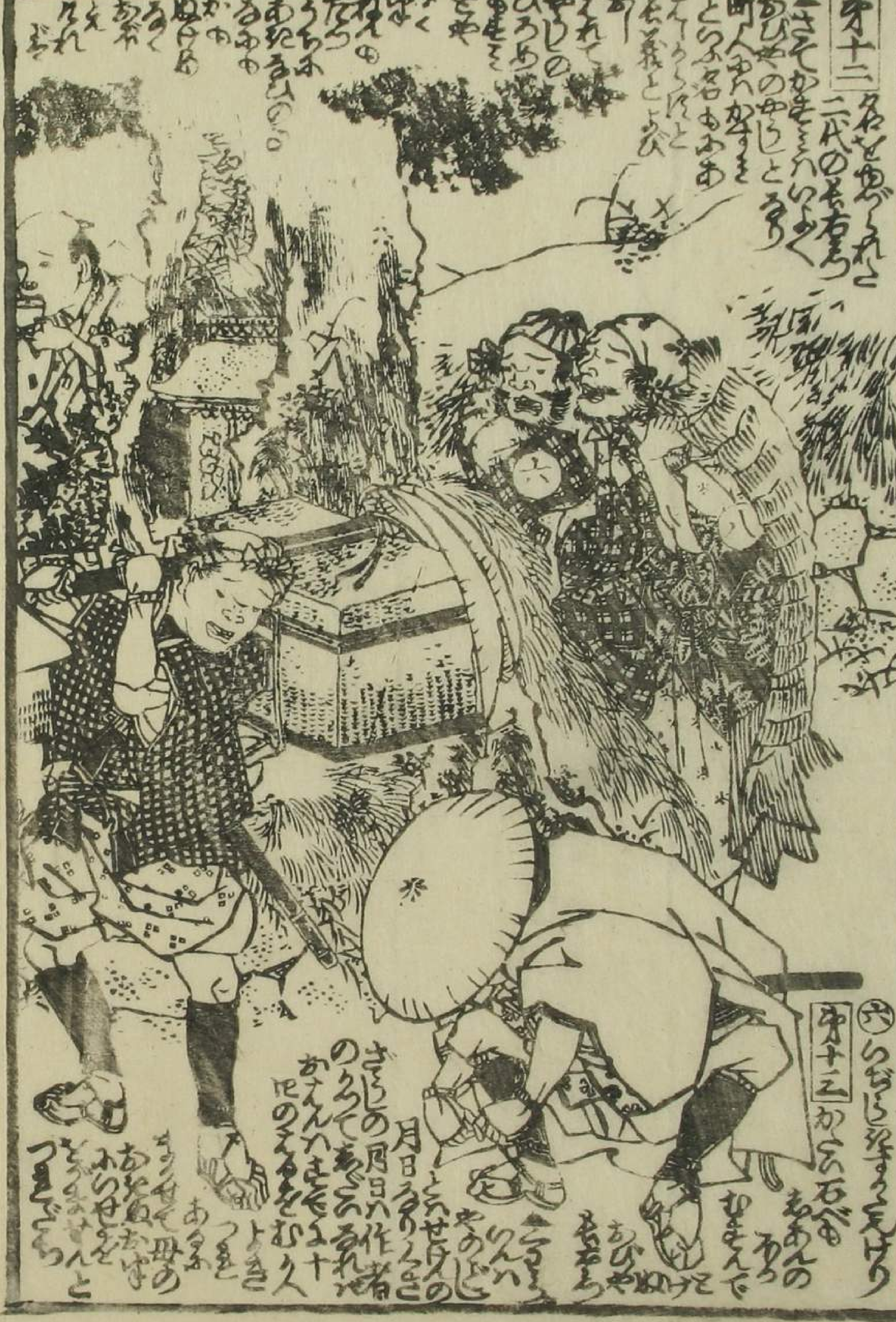
今あのおんとまへ夢もうけんまそも方ねんのあつぎ身まちたぐあく己とち縁あそぞさらへまんよくおのとぬらくさぐくまで生そみきんまでむづまる手うあへあるうげんをまてもよえぐ身をそうえあつるへとあの亀なた元だらりれかへそちのあわせふそかくむしやト四ろく四めもみわへさうよ下女のお幼一どんもたく母のおもいへみやうさそをとうかんずまて立せてまくるゑむすめの中をそをさきてむえつりくぬれあしまろく立さりけり

▲あよそうるれ人きあき人をえそてすずうえとうちやむへ人のよくいふをるきとおかとあやとるおのわぞそうろまてすぐさふづかうぶとかきれかひぞうえとあわらくぎんがのれきき右の吉やうちうるうすものちくるとをたくうきと㊀



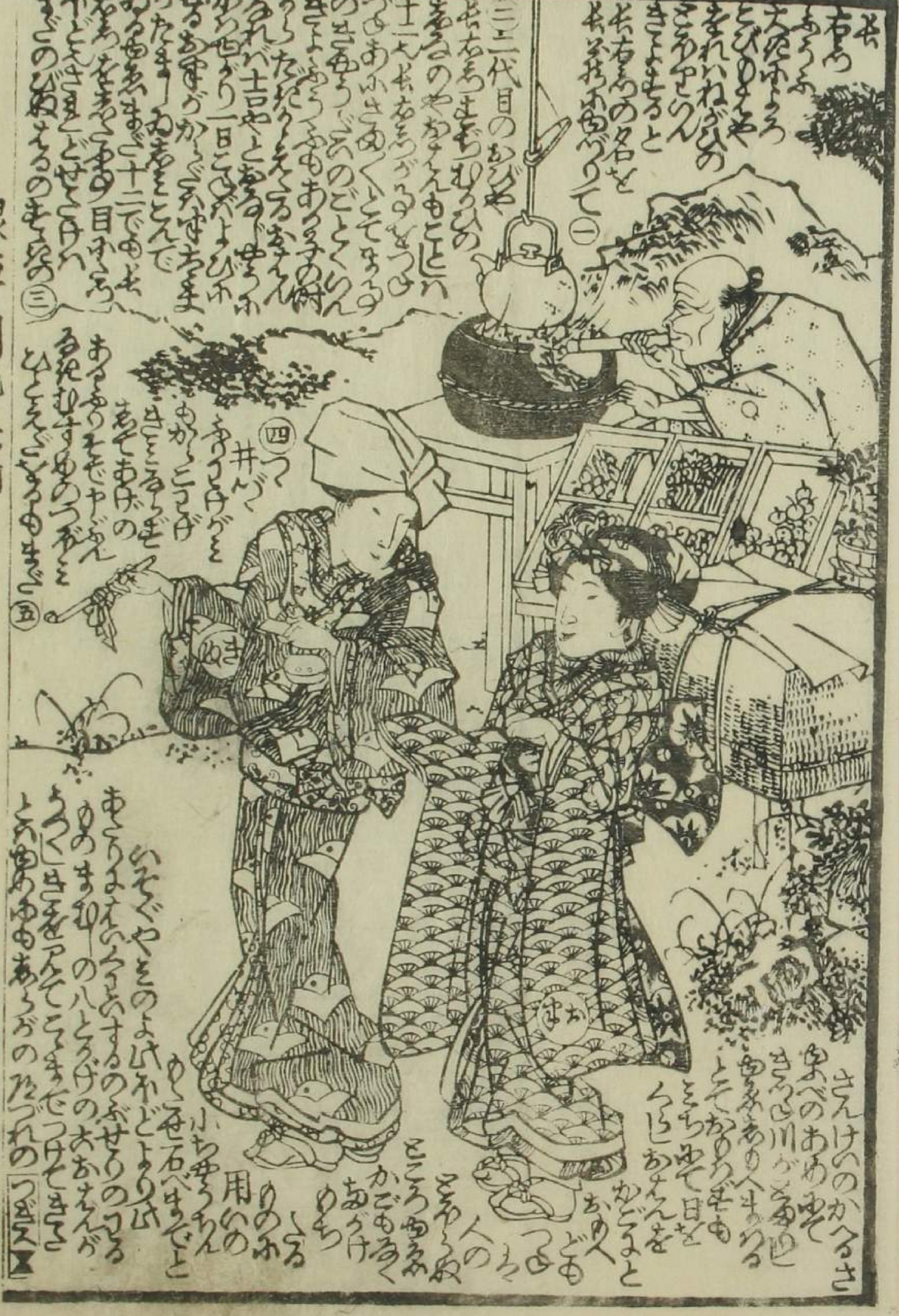
やどさがり第一のたのまをとみするあぞへおへさつてこのあねどもえうだいへのそん合のよことそまますわりをまゝせてのちう三ざさをけんぶつ

まるのやのおえんもつまらくやきさが吉やへ昔日ゆてたいそうろまがんさぐるおりあそえる下女とひさ母の仏をま入かくしるれさそもおりあくひをそめうらしきむすめえけり



才十二 名をあがつれさ
二代の長右ゑもん
▲さてかさまれいはく
おびやのむかしとある
町人のれんかねまを
とらふ名もふかあ
えゝらく凡と
長義とよび
あし
まれて
やらしの
ひろめを
ゆるを
とや
よく
はや
ねえの
たかつ
うちに
むかしきりの
るもの
かの
めでたし
るく
あかし
え
るれ
ども

㊅ らおらじおすくえけり
才十二之 かくて石べを
おかんの
ありつ
むまんで
ぬけて
おひや
おきち
みつる
りんは
やのじ
とんせいの
月日ろうりくさ
さりしの月日は作者
のくてあくらぬれど
おえんははまえる十
此のころをむく人
よき
つき
あるが
ちかうそ母の
おぬ夜おけ
からせよ
そうみなさんと
つまどごう

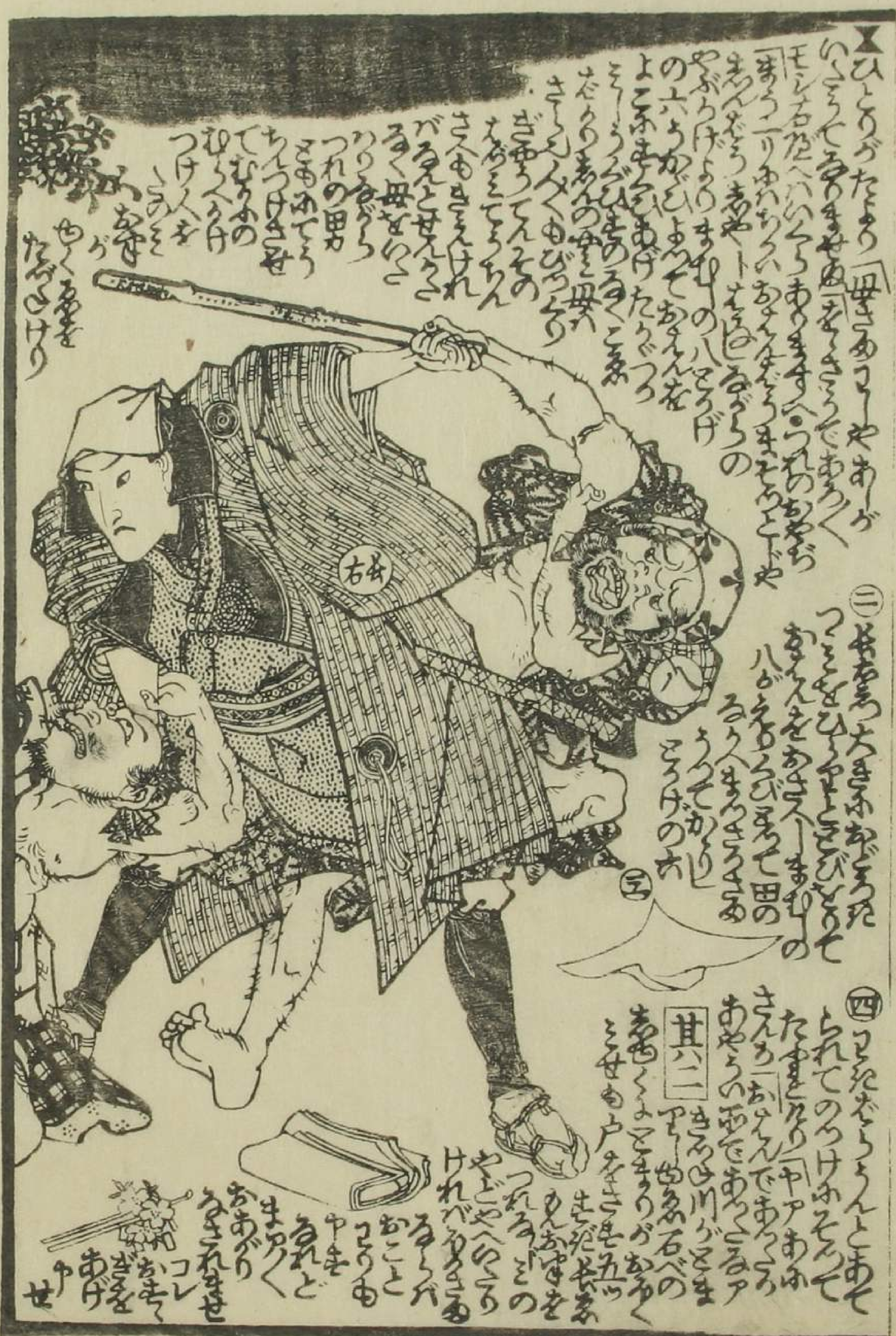


長右の
あらう
大店かろう
とびかまるや
まれいねがひの
こらやさいらん
きゝまするると
長右ゑもの名を
長義ああらりて ㊀

㊁二代目のおびや
長右ゑもむかしの
ありのやむかえもとは
十二代長右ゑもんがゐるぞつゞ
づくおふさむくとてなるゝ
の長右ゑもんのごとくらん
ききよぶらうもおうちの附
らうたびおくれのみえ
るれば吉やとある世うへ
かうもがり一日ごとにふよりびれ
ゐるあまりかくで我すえ右まゝ
かたまりし右衛をとんで
ある母長まで十二でゆる長
右衛をまでおすり目かうたへ
わどとさまどうせてよれ
まどのおばするのまゝよの ㊂

㊃ つぎんて 井
おりもりとうけがとと
おそもでとうけ
きとこうろうぞ
あるおふの
おそでおほの
あるなりそそやがのつぎをく
るやむすめのつぎと
ひとえぞうするもまぞ ㊄

さんけのかへるさ
あべのおめでて
きうら川ぐるあ此
あまたあの人やわる
とそおりわざも
こちゆで日を
くらしおすんを
かどるまと
おめ人
ども
つれ
えろ
人の
そわらぬ
ところあるみ
かごもなく
あづけ
わちつ
ふる
ののふ
用いの
小ちやうちん
もち石べまでと
かぞくやとのよいれどよりは
あそりまんへのあるするのぶせりのつる
ののまわりの八とろげのおおえんが
うつくしきをつてこまでつけてきさ
とお虫ゆもあらぞのたづれの つぎへ



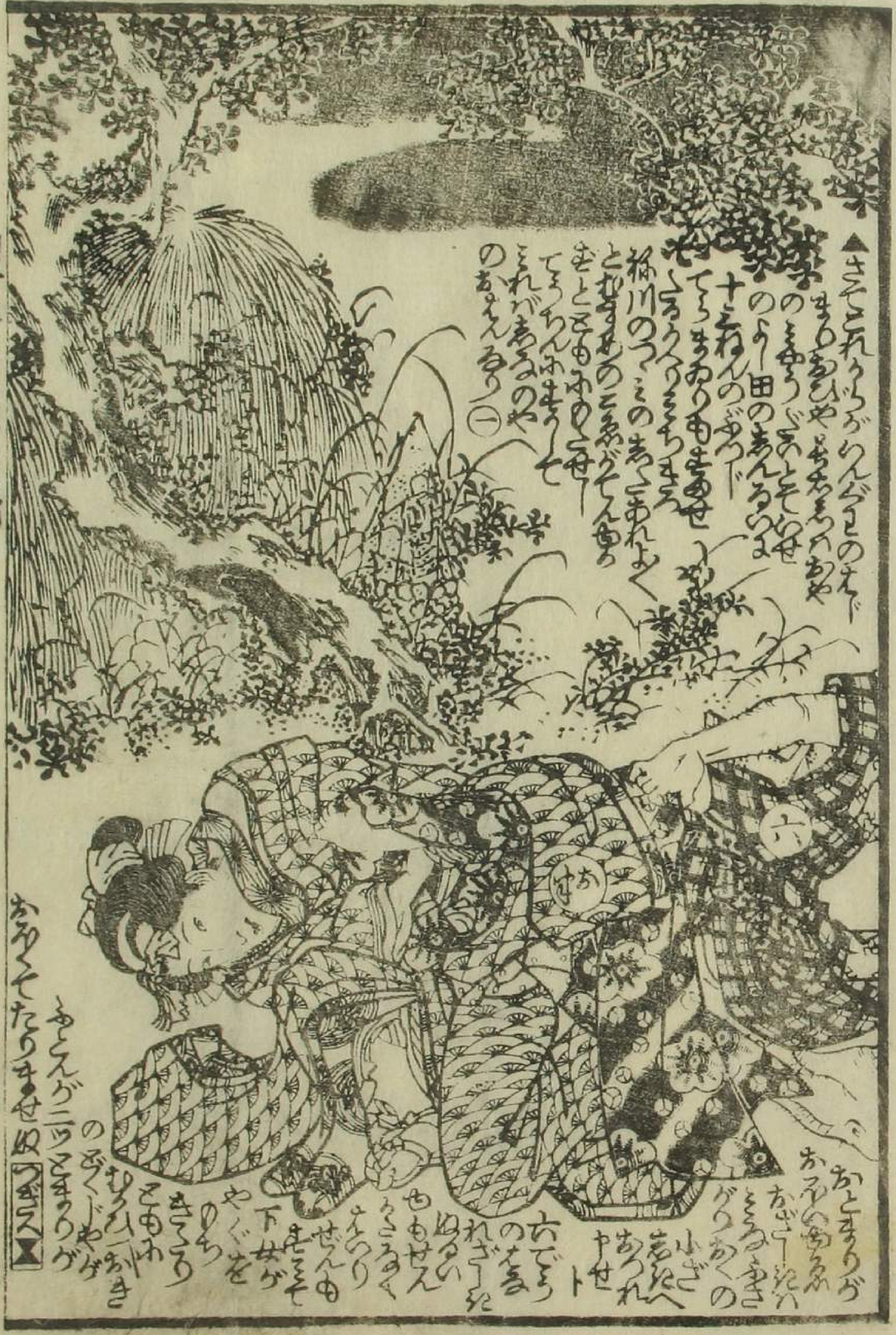
▼ひとりがたより「母さまつ〜やあ〜が いふうてあのまゝせぬ「そなさまうそてあるく モシ石がなへハくろあゐまゝすへ●うれのおやぢ「まろうこりゆれちかいはあかんだうまそこちと下や まんざう是や トたち巳なゞらの やぶらけよりまむしの八そうげ の六ちかどしよふておさんを よこふまうあげたがつゝ そ〜ゝうでひまのうゝくこ家 たゞりのあんの母も母へ さ〜ゝんくむびつくり ぎ〜てんその えなもてうちん さへもきえけれ がゐえとせんさく るく母をいと かりくおぶら つれの男が ともよてう ちいつけさせ てむかのむらへ為け つけ人を 〜ふのそ おさんが やくあるを たゞさけり

②長なう大きにおどろきつゝゝをひつやよこびとそておさんをおさへ一まむしの八がえりうびえで田のるく人まへさうるさあうそてかゝりころげのお③

④つちたらうんとあそられてのかけおそゝてたすきかり「やアおはきんち「おさんであつてるあやまの西をあつてるアきろは川がそまアちし出家石への基だくみてまうりがおかく

其八二

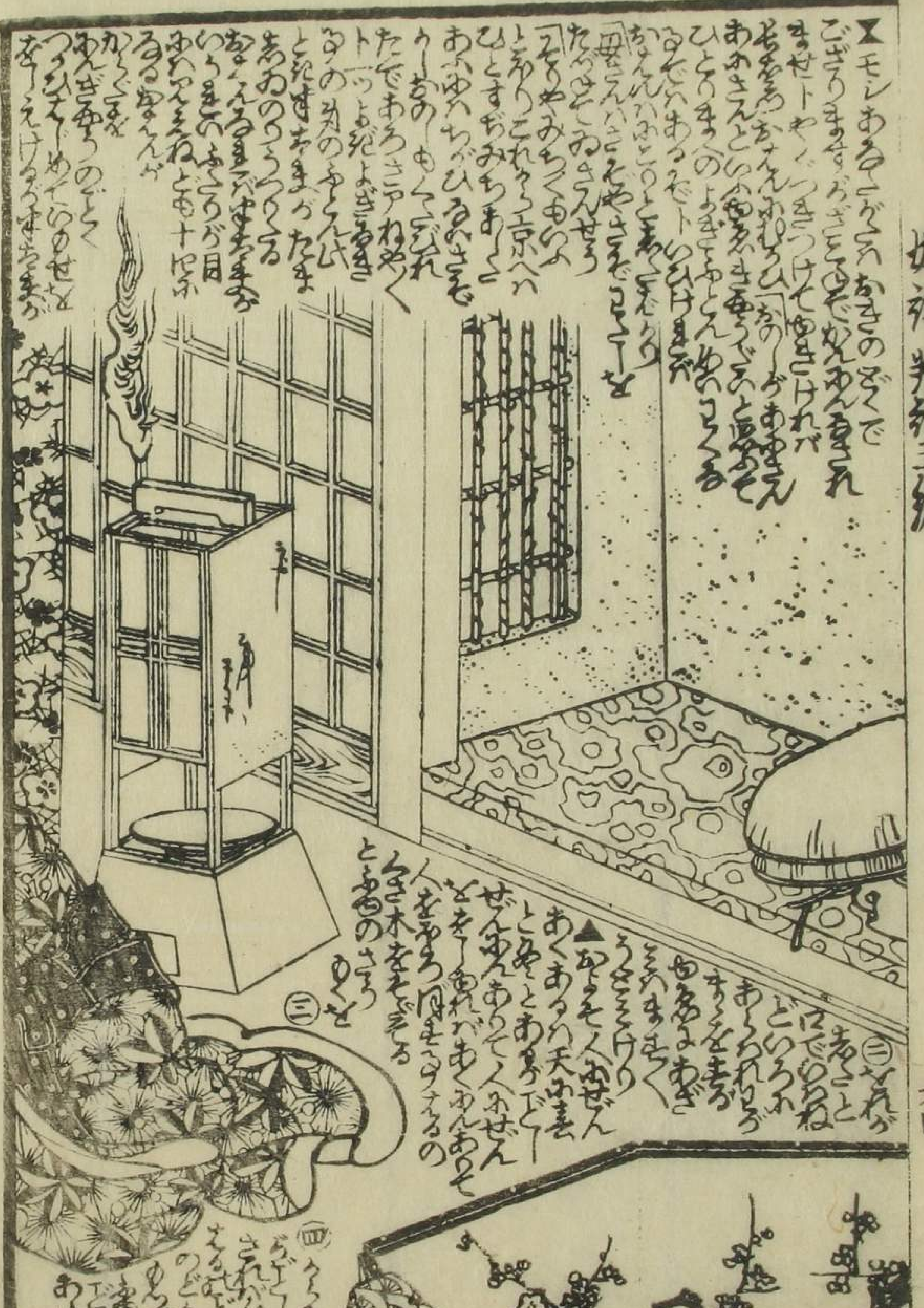
こ世も戸をさゝを五ッもた長家ものおかれそ つれるその やどやへいてり けれがかつきる るうらへ おこと コりも やきを きれど まりく おあかり ゑされませ コレ おきを あげ やせ



▲さてこれからがらんがうとのえだ まりあるひや ぶろろいあのあや のまゝうがこと〜そのせ のより田のあんろゝよ 十ねんのむかし てうまわりもまあせ ころくりきちまえ 福川のつゝこの あまゝあれよく とむすめのこ家がそん女の おと子もふの母 てうちんにまうて これが…のや のおかん有り①

おとまりが おそれのあ かぶ〜れハ ころ〜きき ぐりあくの 小ざ 岩へ あつれ やせ ト 六でう の奏 れざ〜 ぬ〜の もせん うさろく ふそつり せん〜 先〜 下女が やぐを のち きてうり そもれ むかい〜き の〜ぐやぐ ふとんが二ツとまりが おやくてたりませぬ つゞく▼

✕モシおまへがそれほどのぞくでござりますゆゑこそぞんじまゐらせませトやくそくきつけて帰りければおまへおさんおむさし「おのしがおまへさんわかさんといひかはせしを思ひだせばこそひとりまへのよまきもふとんぬくもるぞへあれトいひければおきんはおどろきとこそやさしさぞとこそ「母さんハあとはおまへさんせうたがひなさるな「それやみちくものハよとおりこれから京へへひとすぢみちまつくにおふゆへハちがひなしさをうけおもひもくでぎれただでおゆさアねめくトいつよぎよきあきのがれのふさん一たまりもなくあのうらつくるおもへゆるまでへかへるまでいちまいふところが目ゆゑへぞゑねとも十四にふるまふかくさんがかくれぞうのごとくあんぜゆのよせでつかへめぐらのせよなをしえけるがそれからまなか



㊁それがきさとはでゆかねどいられおもられうすらをまうせるまあもあぎえまする

▲そうぞ人のせんあくまうれ天の書ときとありでしぜんあれ人のせんどまへまれおもてしあんあぞ人をあう月をうけるの今きしまきぞえるとまのさうもそ

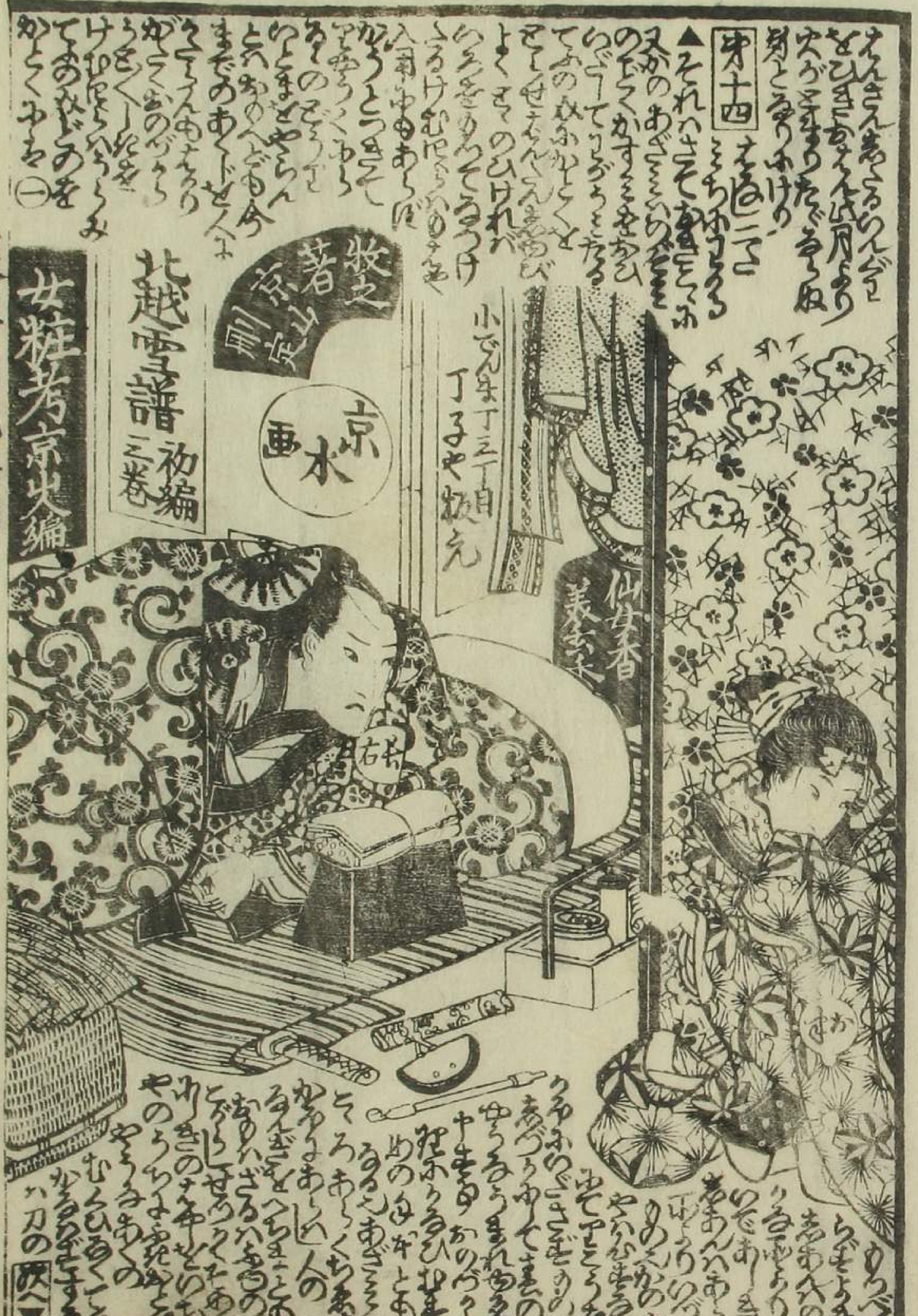
㊂

㊃くろもちてしされがなれるせとくのどかふもぞし書のもとでおくらく

そんきさまゐらんでをとひきあたうんぱ月よりなつぞまりたでまうなるとまりぬけり

第十四 そ笛にいさきちゆうなる

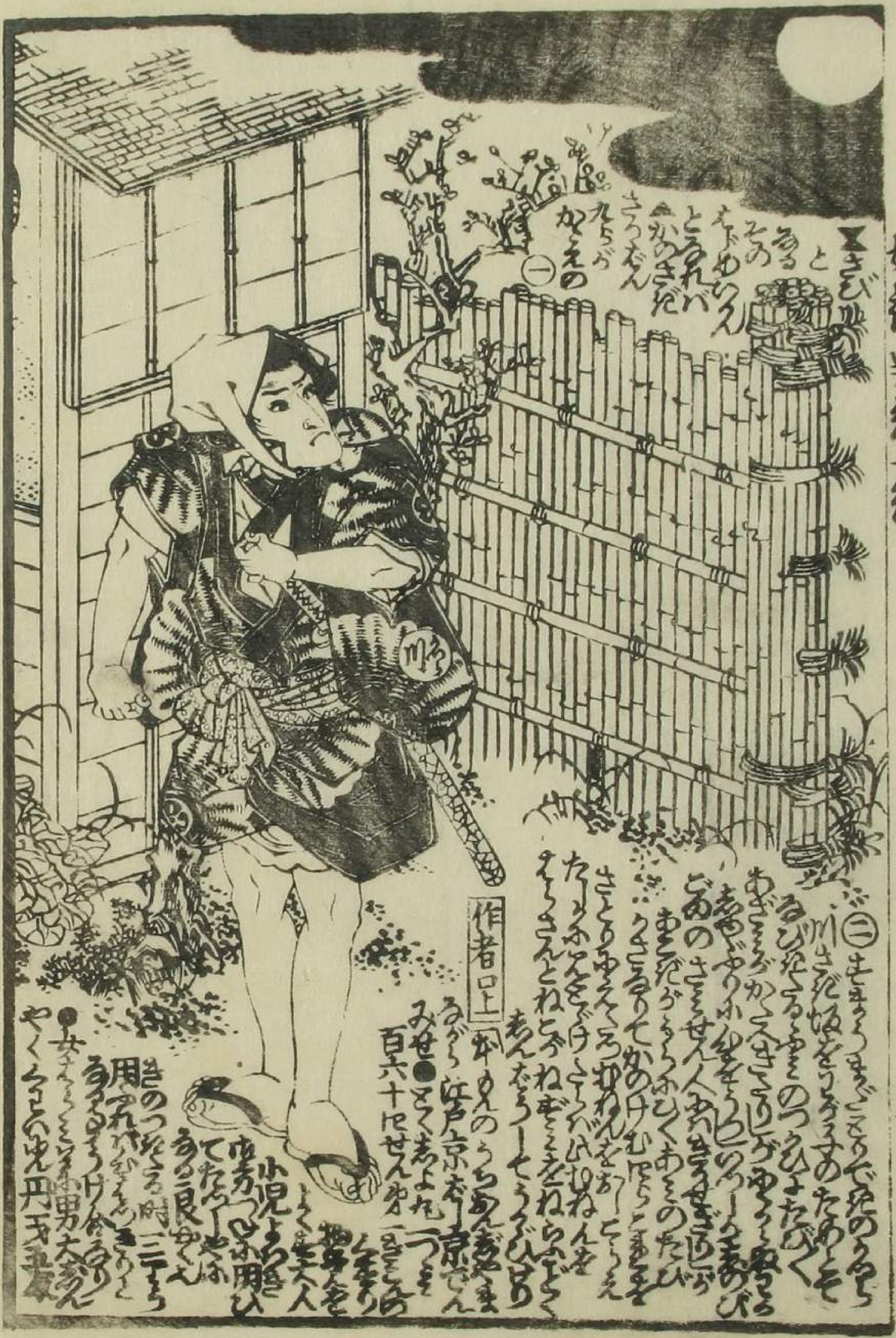
▲それハさそあきもてふ大家のあざいらの金ものびくかすまをあかいらってりうがらきたるてみの秋ふかくくとそとせそれくんあんまのぬよくきのひけれバいそぎきそてきうけふるけむだくちめのなき入相の中のあらばかうとつきそて分野うへよからさてのまうりをいくまとやらんとれ寒のへどもいまやまでのあくどとくんくこそうえんあたるりやがてふみのがうらうさくと欲をけむりくらへちらくみてあおどのをかくてやる①



小でん馬丁三丁目
丁子や板元
仮名垣魯文著
京山京水画
北越雪譜 初編三巻
女粧考 京山大編
右
かね
おます

わらべうらぎよふきなるあふ代のどりうるよりもそおしまきまあんれあらしかれよりいろあのうめえみうのえよおがみかへれやのおもきそてこうろうをりまのいさぞきのありくうかうくゆすまのよらるさうよれなのあ中まやおりのちいらおおもてりようらし御きのめいのぼんともよろしあざるら

そくろかもらくもよあたかるよあつしゐ人のみさをとへちやまでにとうおいぞさるハあまのおぶろとせつらくそあとれきのかあせのいのちやのらうよ死ぬるとれやうもあくまのむくひあくてかよるかさるを六刀のかへ✕

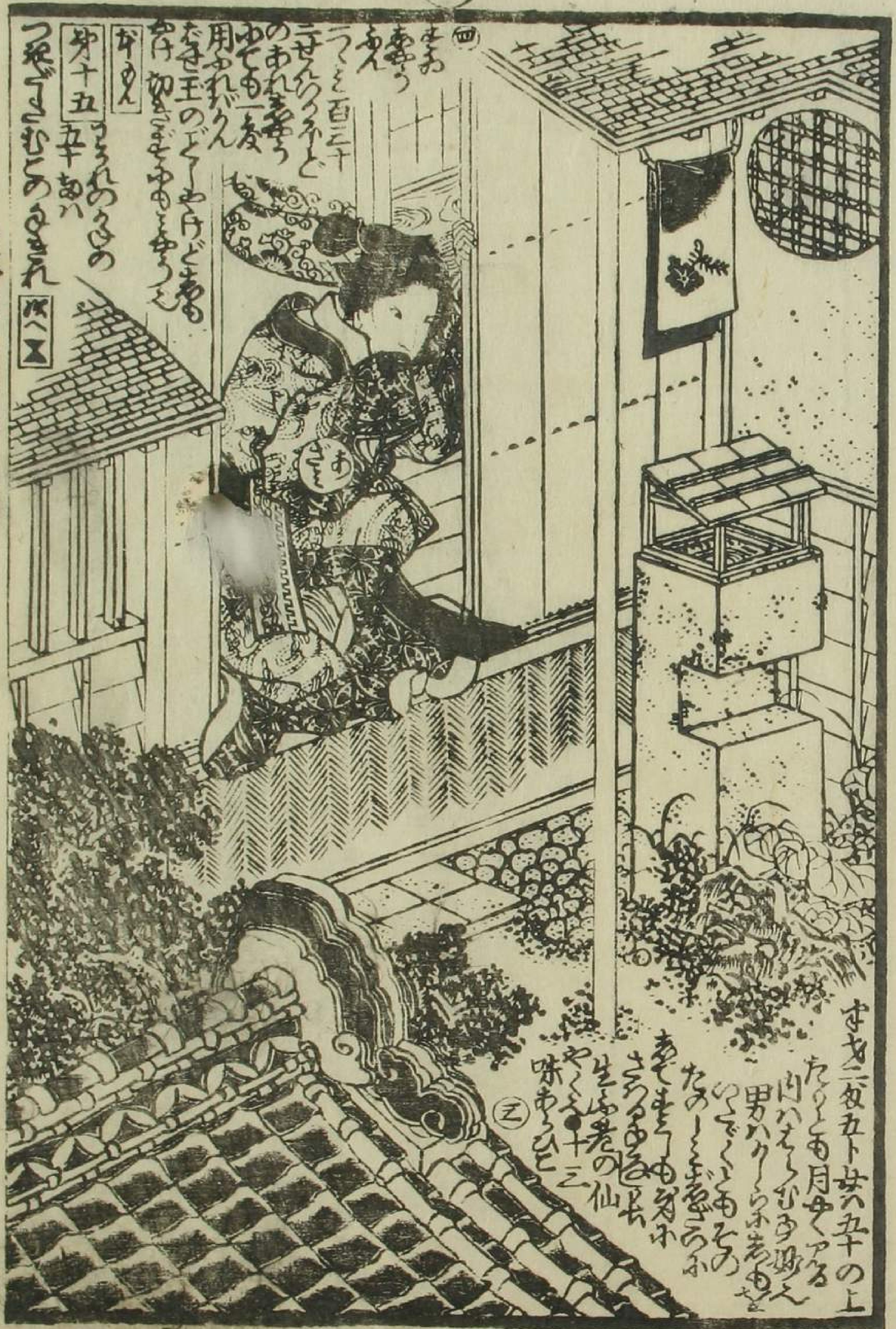


▼きびかと ゐる そのうへ えどめうえん とられば かのきたさ きろぎん 九ちがう かえの ㊀

㊁まきゝうまぐこそりで行のうちら川さん妲をうらみそのためとそゐびえゐうまへのつゐひよたがくあぎゐがかえきゝりしがゆゝゝ取ゝゐあやがやりに兼をうゐとのゝゝゝあびどゐのさゝせん人ぶ兼をゐきゝ[illegible]ぶうあまえがうらふしくおさゝのたびぶうさゝりてかのけむ[illegible]らと兼まをさとりゆゑそろ[illegible]れんをおゝ〳〵ちらえたゝみへをづけさてべ[illegible]ねんをそらさんとねと今ねばこそねらゐどらくあんだらうーせうぞんゞり

作者口上

「本みえのうちあん義をきまうぐちら江戸京大坂京でんみせ● そくあよれ一つを百六十匁せんずつ一包と全など[illegible]まり[illegible]をよく[illegible]大人小兒よらきゆ方つ[illegible]用ひてたゞ[illegible]あゐ良[illegible]きのつゐ[illegible]時二三まら用[illegible]ゐ[illegible]あゐ[illegible]り[illegible]● 女[illegible]男大[illegible]やくゐとのゝ丹[illegible]



㊃まあ奇う ゑん つくと百三十 三せんつゝゝとど のあれ奇う ゆでも一奏 用ゆれずらん たき王のどくゝゝけど奇も ぎけ如きぎを中ゝ至ゝゝ

あめん

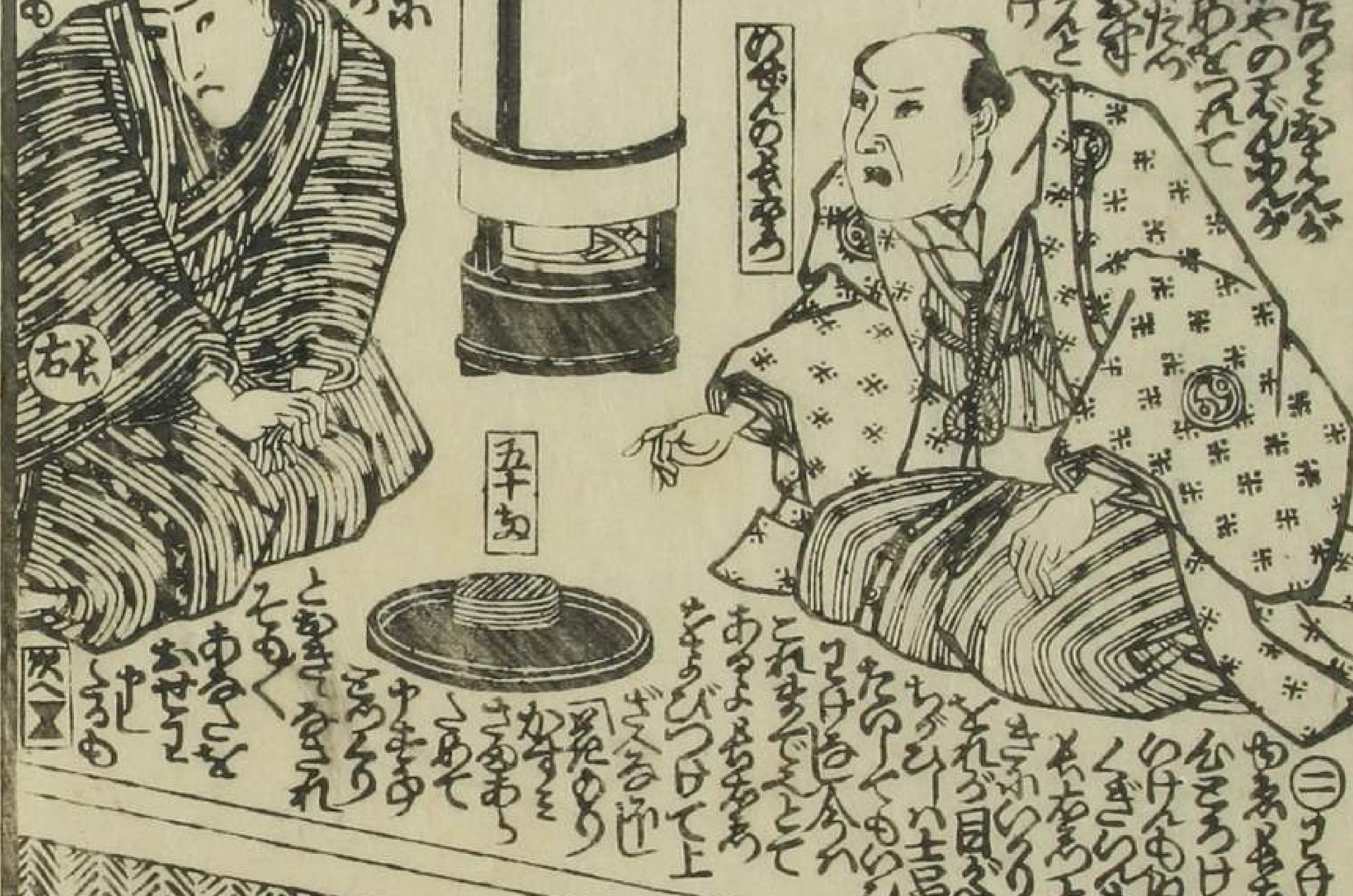
奇十五 五年ありへ うゝれのゝの つ死ざさむとのまされ

次へ▼

ぢさ二匁五卜女六五十の上たりとも月やくある内かえらむう功え男かりらふ尤あをとのぞくにもそのたゝしょ婆らふあそまつも匁ゝきるゆゑ色長生婦老の仙やく●十三味ありひと ㊂

さるほどにおさんが母ハ村のものゝこどものまゝおさんが
もくろみてくーとてたづねーにかねおひ小やのそばをかよ
やまにふへこもをつれさるたびくがむすめをつれて
りへのかう（親の）とききてあわれみくだら
ねけれバそーくくるのめくせうもおかず
ふちがひさてふ入ふたすけられてうつらくと
ましくれおんなのおもひをまゐよもふけ
これバまづ石べにやどらんとそ村の
めのとも（へ）いんぜんを酒てとそまて
つけれバみなよろこびなんまろ
あらくそて石べまでおくりけり

◆さておさんが母あまたつまの男
上下四人石べにてやうくやどを
もとめあまた
てうやにたつて
くるをとりあわれ
さんがまれて
らきこんなるを
めのまのきこく
おさんがこゝろにそへをとりてまかせて長右衛門に
みなおもてきけバーーよつて大おどろきが
ことさまるでおどろきーかたらるき人に
けだらまるトのおもひのおさんが
るーとてふたをおもへバおさんや
るひの母さまヘーかけいでて
なくかてくおもふにもえせのでさまが
さーさくへとてひとおさまへのやくやそくも

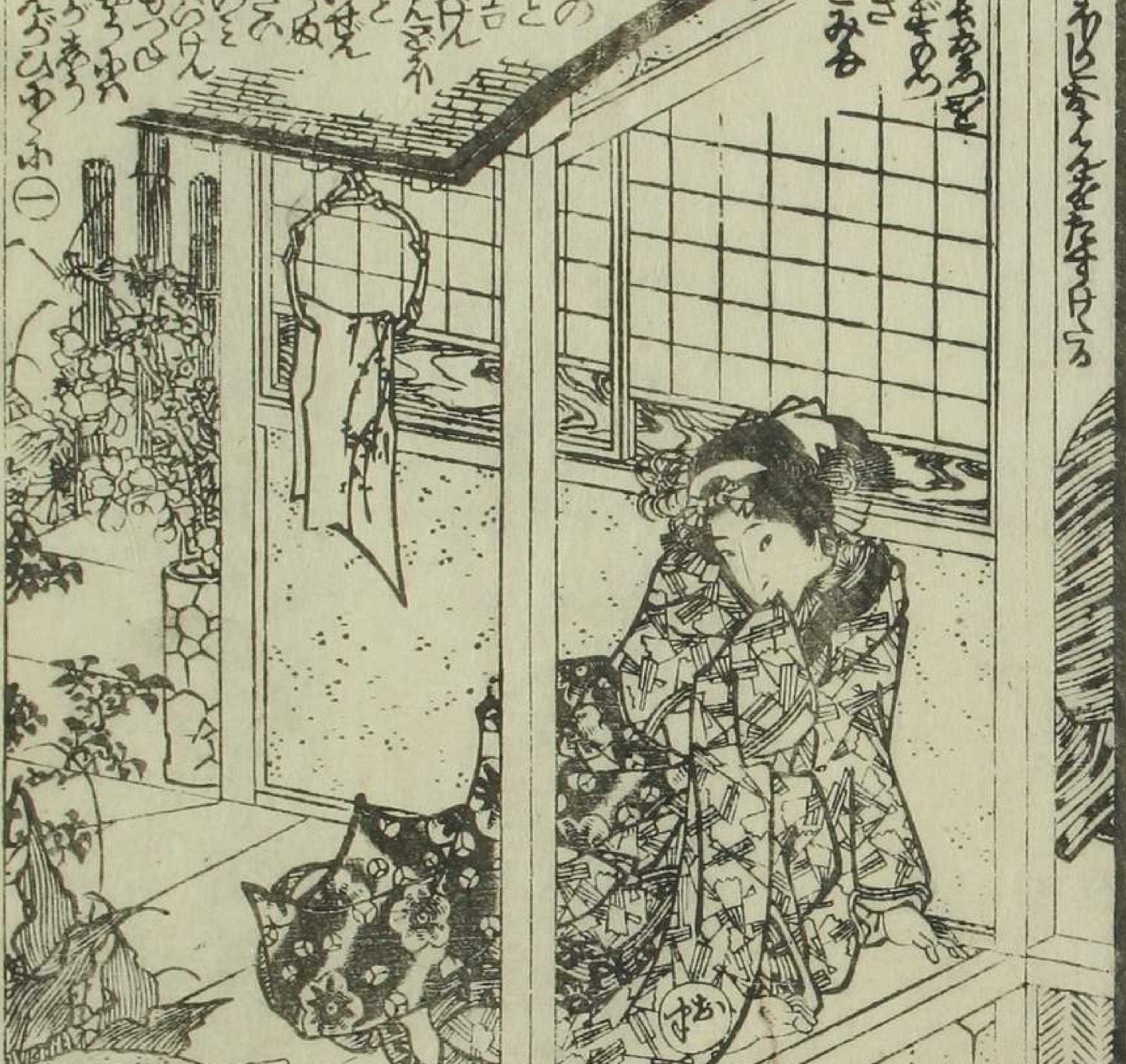


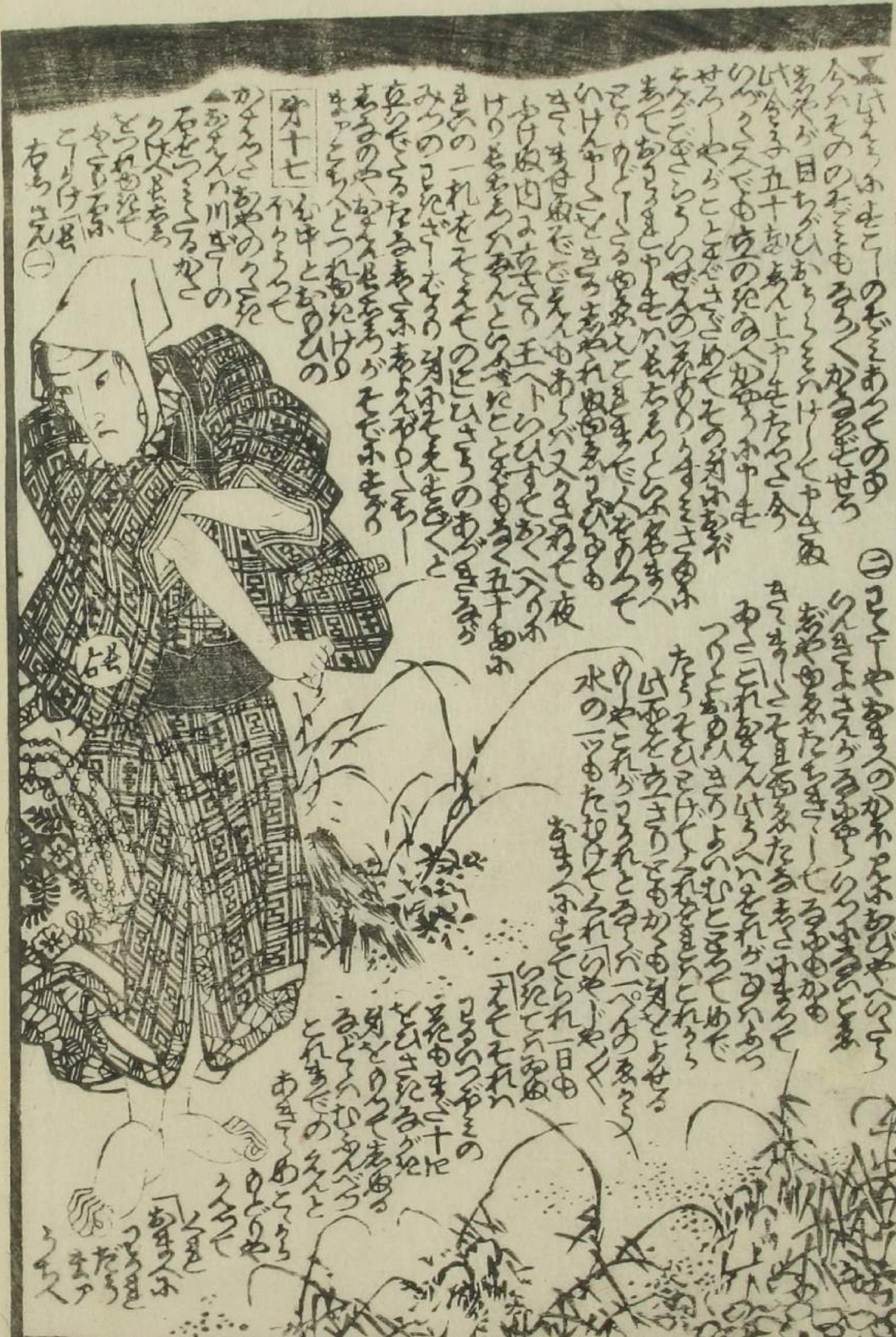
② けふ入道
かあまあまあ
なさまりけるへるに
のけんもぬるに
くぎらくるさま
長右衛門大
きふいうり
それが目ぬの
ちがひーハ吉日へ
たのーくものひ
つけ召入今ハ
これまでとて
あるよろこびあ
なるよびつけて上
ざ入召にし
「是ハかり
かすまし
さらあら
こあて
中まで
ござらり
とあきてなされ
そなく
あるさなを
おせて
中し
くるも

次へ ⧗

きのどくまつてかにおさん
まきたすけける
るどうくり
けれバ母ハ
なをあのせて長右衛門を
とぬくけれバきぬその
ありのきのどくさ

◆さて次のあさみね
うちつまて
さがやへぞくくり
けることれより
あさん長右衛門
がるるの人の目に
つきロまかり
りんさよふるうふの
みくへも入りふんと
あてとむすめ吉
やがるるを長さうけん
それをかるるへんぞれ
長のそうのんもと
考ヘーを子をおもひのせえ
の長たるる長らぬ
ぶんかそておもひがさ
うくかて人をうのを
長右衛門へたびくのけん
をいひやせけれどもつい
るとの考きこあらへ
ゆるずにまにまかあり
おゆくのふでかすえがひあくに ①



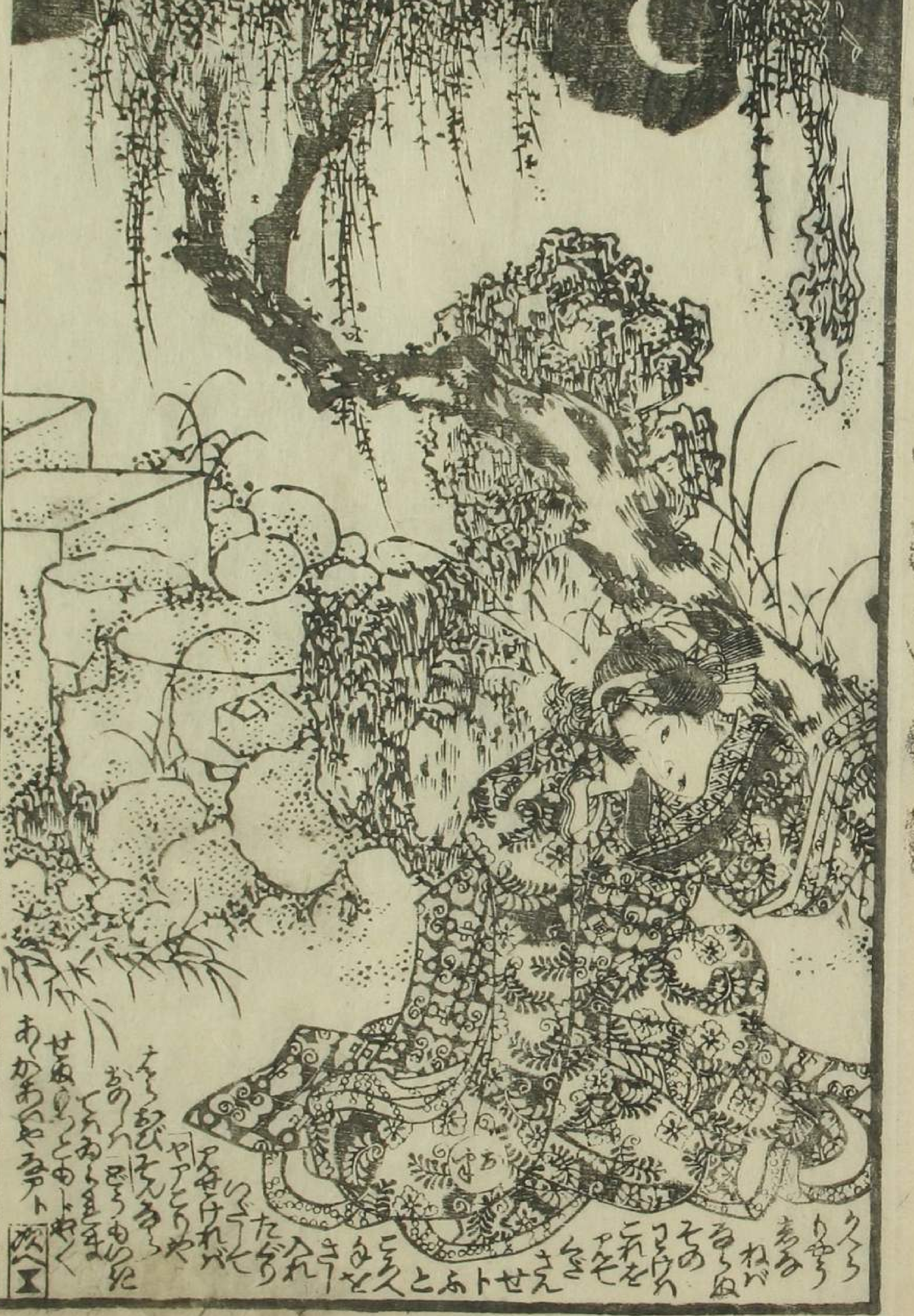


▲はなちはむかしのむすこあつてその中今ハそのむすこもなくかなしませう おや目ちがひおもらもよけしくやむ夜 此今まで五十両あんよいもせうさ今 のがくくいでも立の紀の人かもうわやま せうしやかことをさゝめてその身かおもげ ちんごんざうらひせんの花のうすさきかは まてみちゝまじやまにはなれとくるめまへ そのかてしくるやあえとまぎまでへさあのつて ひけんやしくとさしあれ御向まうかひふも きてまける雨だどてえんもあらバ又くさあわて夜 ひさけ殿因み立さの王へトらのひすてあく入りに けりおもあんあんとらかきだとさぞもあく五十両ふ まあの一れをそまえその匕ひさうのあづきかう 立のそくるたま命て系まえ系せまでく みつのこ紀ざーむろの身かえ見えまさくと ま客の人やなにまあかまつをそでふまる まアそちへとつれ面紀けり

第十七

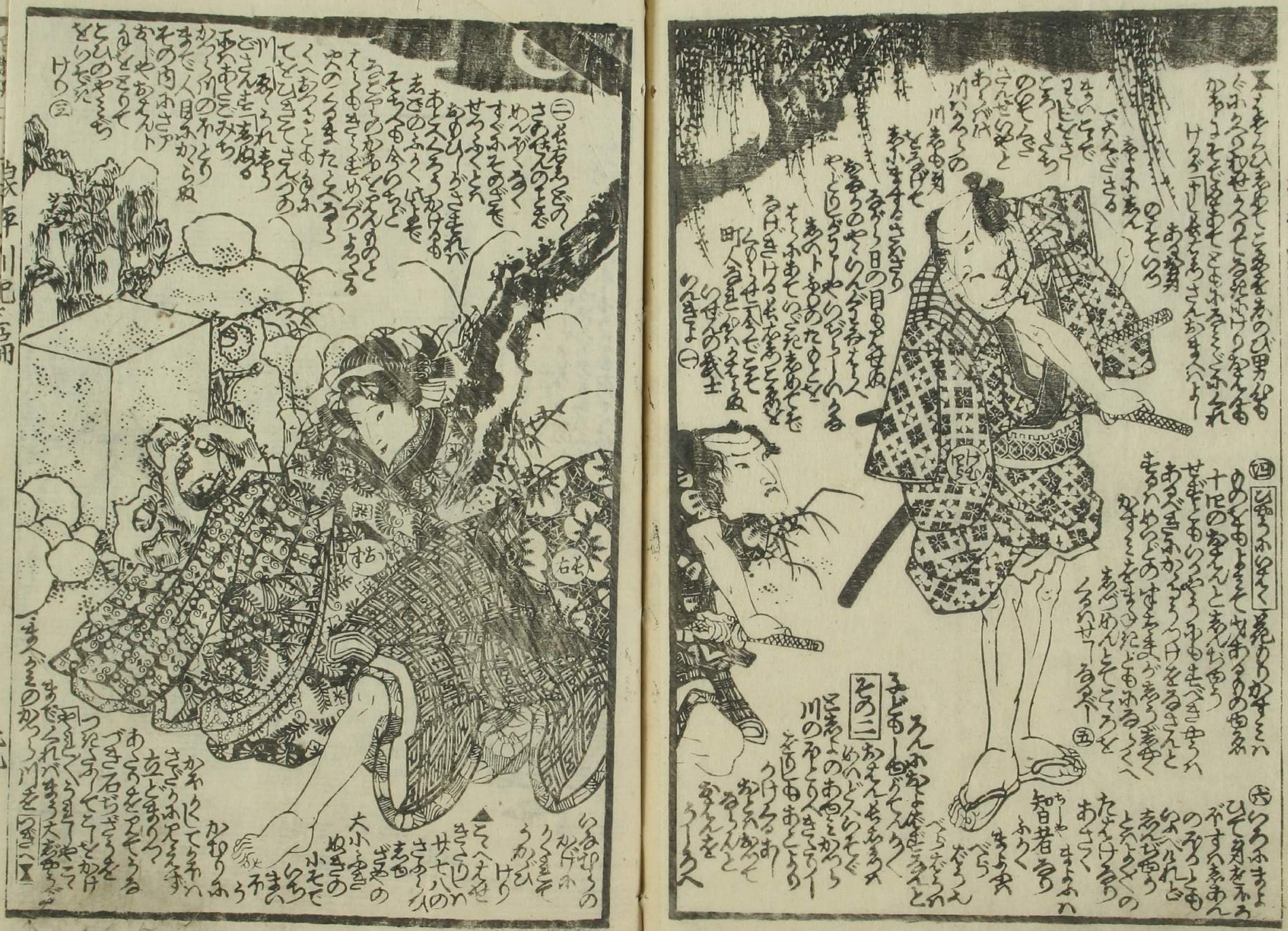
むね中とおのひの ふらうて かくそうさおやのゝ紀 おきえん川ぎての 石せつまくるかさ くけ大まま とつれ出紀で やでいまね こしけ「世 あちさん①

②こゝさしやあまへのかたおもあびやへのてら りんきよさんがおちまそらのかきのとま おやおまがたらきましてるふのかの きてまりしこそ旦面みたるまさかまりて わさこれ身をんれちへはそれがあらふあら つりとあの人まくのむとまでめで たちうそひとけてこれをまきれとれらう 此あをまうさりてでもかくも身とよせる のやこれかうられとあるべ一ぺんの事かう 水の一ツもたむけてくられ「のやしぐ おまへふさでそられ一日も ひ死でゐる所 「まてそれく こゝろのつぶやきの 花もまぎ十七 とむさん古がれ 身をのりて出る ろうへのむかべら これまでのえんと あきらめてから めとりや うちで 「くまと あまへふ つきまと たらまア うちへ



くらう あま わか ねば あらぬ その つとけれ これを やそ まき さえ せ ト ふ と え ゑを きうー 気れ たぐり りぐてそ 手をけれバ 「ヤアとりや おのれ まちおびえんあら どうもの紀 大和ぢまま せみちとめトやく あくかわいやろアト

次へ



⧗さきへひきあてて[illegible]のび男が[illegible]
[illegible]けりあまる
かまはず[illegible]くれ
けるが「川しま[illegible]さんおまへへよう」
おろか者　のぞくら
あゝいかん
でござる
[illegible]
[illegible]
のぞき[illegible]
[illegible]
[illegible]
川[illegible]の
川[illegible]
[illegible]
あらそ[illegible]日の目もみえ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
町人[illegible]
[illegible]武士
りんきまよ㈠

㈣ひきつかれ
[illegible]
十七の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]ろを
くるわせてあるべし㈤

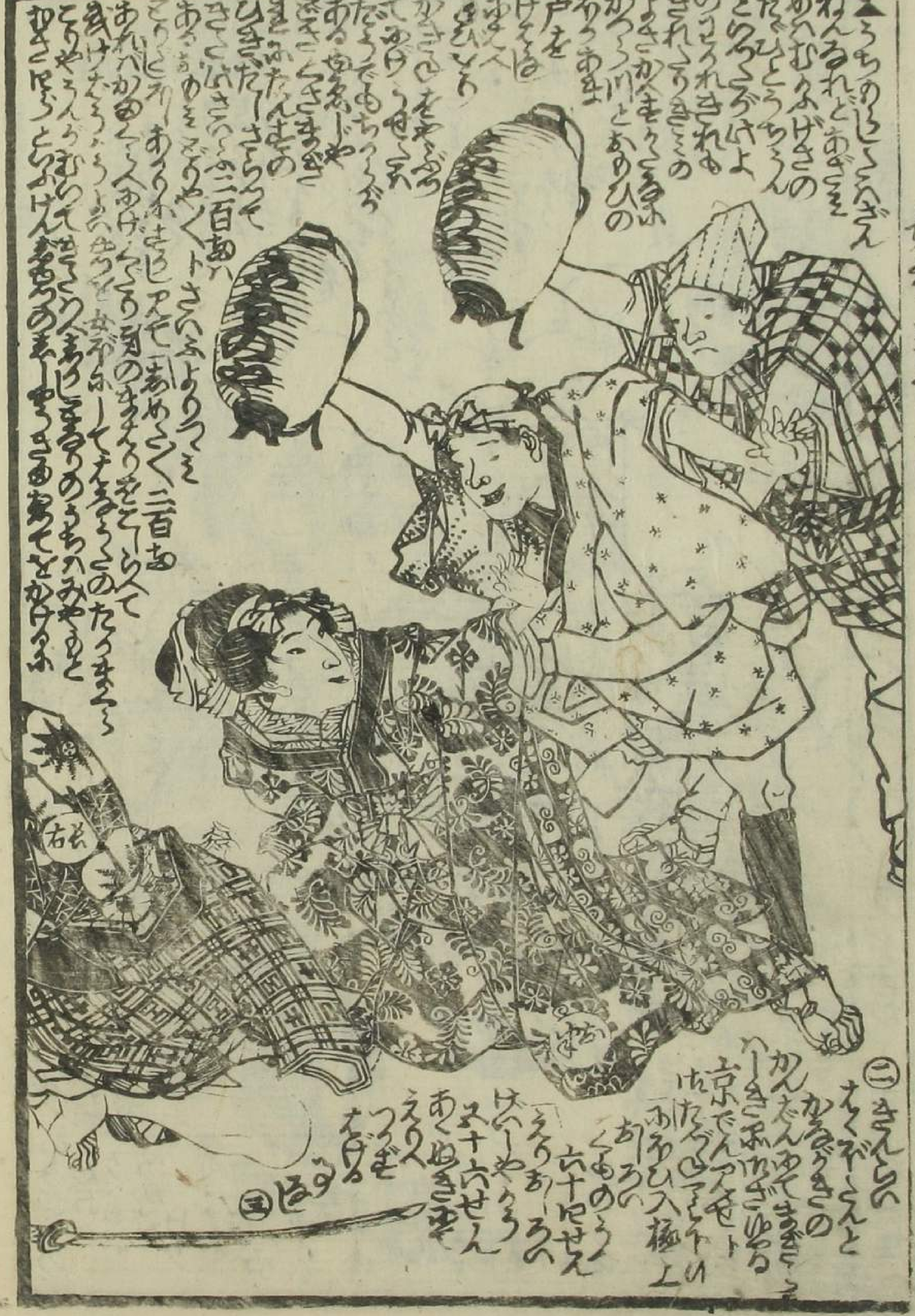
㈥いろはまよ
ひそ身を[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
たよ[illegible]
おさく
ちしや
知者[illegible]ふれ
ふるく
[illegible]
[illegible]

その二
[illegible]
[illegible]
[illegible]
川の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

㈡[illegible]
[illegible]
すぐにそのぞを
せつなくとも
[illegible]
[illegible]
[illegible]
そもそも今[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
川[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]人目にかくらぬ
その内に[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
けり㈢

いなか[illegible]の
[illegible]
[illegible]
けり

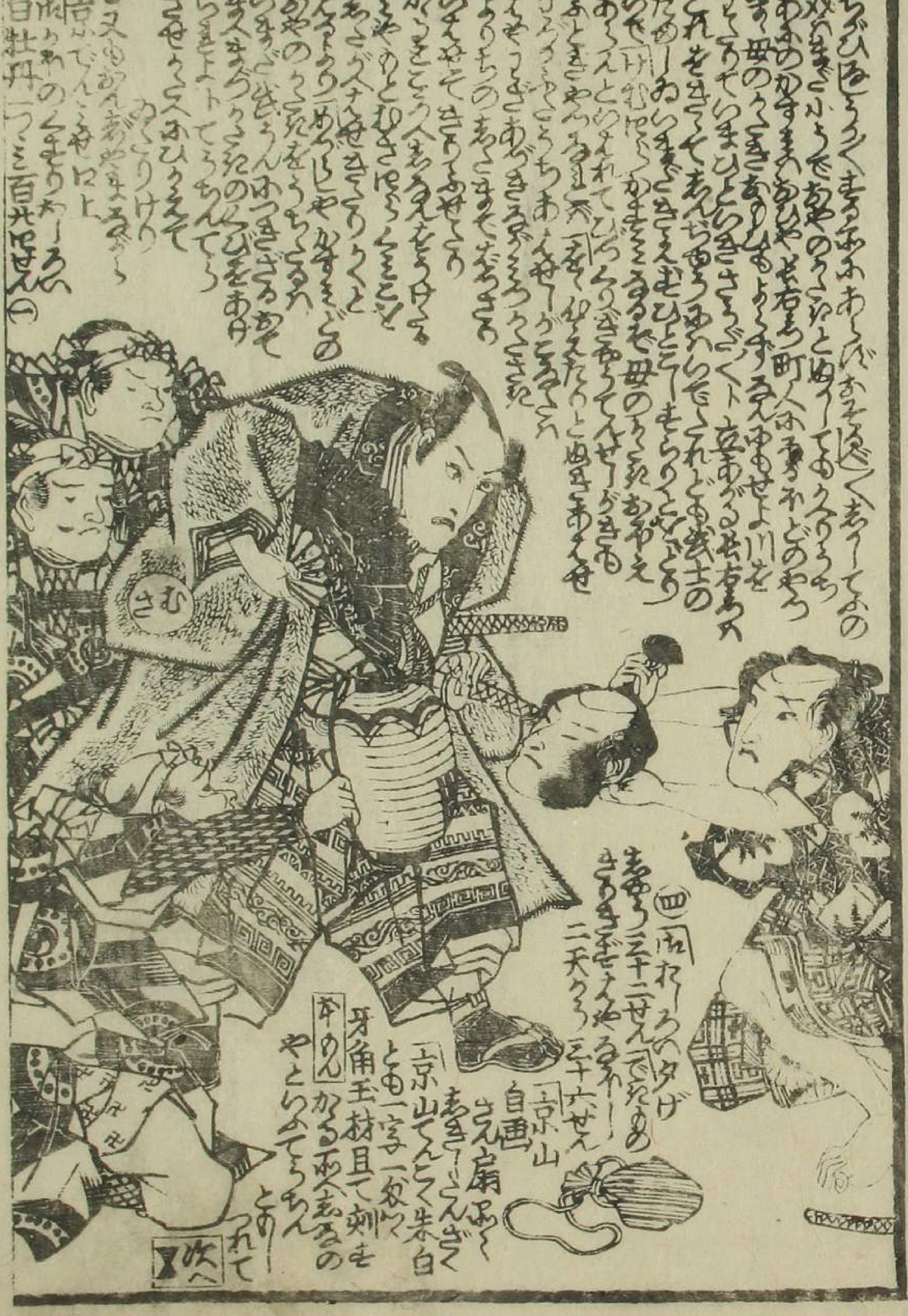
▲そへ[illegible]
[illegible]
廿七八の
[illegible]
[illegible]の
大小[illegible]
[illegible]の
小そでに
[illegible]
[illegible]
かわりに
かわりくして[illegible]
[illegible]
立どまりて
[illegible]
[illegible]石[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]川を　つぎへ⧗



▼うちのしごくへいざん
ねんるれどあまりえ
めへむかふげさの
たびとうちうん
とりかくぶさよ
のきされきされも
きれてりきこくの
よきにかくまつて京ふ
かつら川とおのひの
みつおまま
戸を
けそは
ゆそへ
まんとい
かきごめをやぶつ
てあげうせてえ
たちてもちつ
ある女名じや
ぞきこうさまぎさ
まかたんまその
ひきだしさらつて
きてなさへうの二百両
あさあめをぞりやくトさいふよりつまえ
こりじやすりおまじんそ「あめさく二百両
あれハかめくく人あげくそり男のそそりそてらくて
戎けなうからうへうちの女郎ホーしてあるらくのたろまつく
こりやうんかむかつてかてく人まじ女のうちへみやをと
かさはつとかけん女房のま一やうさあをかけるふ

㊁きんらん
ちくぞうえんと
かくぼうきの
かんだんゆてまぎるえ
へ一きごふれぎゆる
京ふでんつアきト
ほたづ巴アまり
一ぶおひ入極上
おろの
くものう
六十四せん
「えりおしろの
けいしやう
五十六せん
えりへ
あくぬきぞ
つぞ
あげる

㊂[illegible]



ちぎひ思ふく まうふあおわらバ おまそほど く あまりて あの
さいまさかまぐのうさんとぬつてあつ
わあのかすまのあいや若者町人かまへ
ま母のうまきあり もよふずきえゆ
てそりてうまひとのきさるごく ト京
これをきいてあんぢ思ひらぞくまち
たゞめ一ぬらまさときえむひとて もら
らそ「けむ」ゆらへかまさるぞ母のまへ
あらえとのそれてひらの金をちらで
ふとまきやあまり天「両」それ ひそえたり
りきでかくこうちあ人祢そしかあそく
ま？そうまさあかりきえるまろくまちそ
よりもちのあたさまそだちまさ
のそ祢そ きてうふゆそくり
からきこう人あらえをとりけふ
をやのとむさは きくらきことを
あらさう人は祢せきそりうくと
そへもうり「両」めうじや かすきぶの
あやのうえ死をうちらるれ
らきすぐ祢らんはつきざるおそ
まへまうくるえのゆびをあけ
らまとよトてらちんてう
さ祢うくえおひかえそ
みくりけり

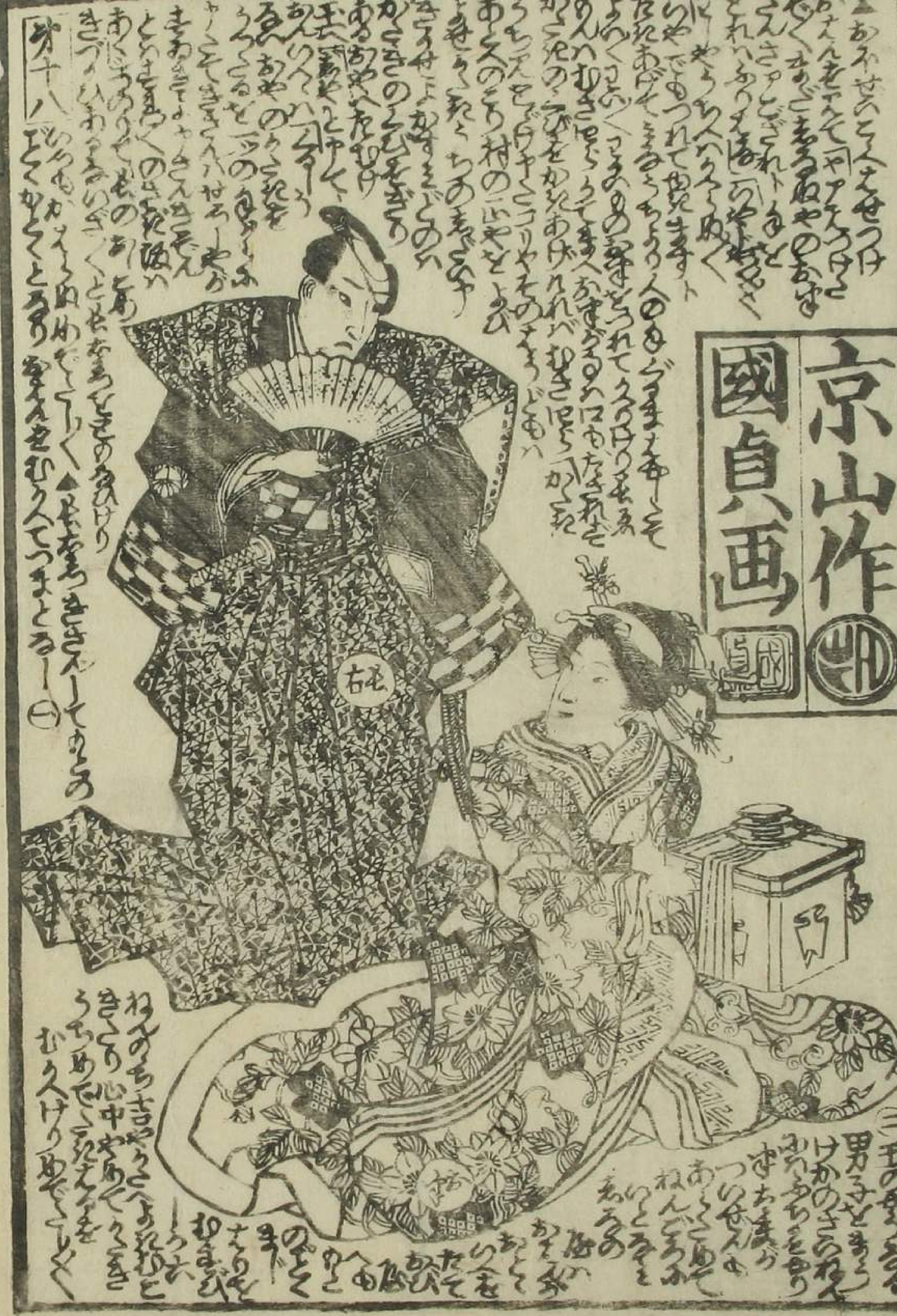
●又もおん弟めらよろそう
京ふでんこまは上
雨ふれのくすりわーろい
白牡丹一つミ百廿四せん㊀

㊃「雨ぶーろの夕げ
あまう三十二せんであめ
さわぐぞえぬるまで
二天ぐう三十六せん

「京山
自画
えん扇ぶく
あまりーさんぎく
「京山でんとく朱白
とも一字一分つゝ
本のん
牙角玉材且て刻を
かる玉ぶ志ちの
やとらかてちらん
とまりー
つれて

▼次へ

京山作
國貞画



▲あれせのこ人をせつけ
おえんをやうて「何やらそうけさ
なくおすごまる家やのおさ
きんさアとござれト手を
とれハおのお浩「ヲヽ[illegible]さ
「ヲヽやうちぢ人へんかうぬく
「ハてゝもつれて御出ますト
だれあげてまゐろうちより人の手をとつまえ奉しそ
よゐ〳〵コレ〳〵つまみの御番をうつれてくめりのみな
めんへむきさ[illegible]うてまへかけるゑへにもたまれさ
かごの二びをせかれおけれれべむきさ[illegible]「かくれ
うちへをてけすくとコリやそのすきうどもへ
あくえのぞろ村の二心をさとよひ
よ姿のく我く ちの事でそや
まてけよおすまぐどのハ
かくさこのくびをきぎり
あるお家へおたむけ
玉だ家にとやく〳〵
おんりくへ八一つ「おす一ろ
京おやのかごれを
うつくるぞ一ツの身やう〳〵ふ
やく〳〵そてきさん八せろ一やお
まあおそてみやるさんかぞえ
とれさ真にくへのさを我限れ
あくにおゆりて其の御手あ
きづく人わのこゝいずくとせなきてときのあひけり
「才十八」いのちも かそうぬめでゝく▲きゝなまつきさこゑーしてのとの
とくかとてとろり 家を空をむく人てつまとるー㊀

㊁玉の字へ子を
男子とまうし
けかのさられて
おやうちをおり
まお湯か
つりせんか
わらくて毎て
ねんごろに
いくとうを
あるの
他か
かそ家
おとくて
りの金を
たそて
おびて
へ由
めと
のざく
まで
おりを
わまさ
一ういしうち
ねずのち吉やうさへよき我ともと
きくり心中やめてくるき
うちあてゝえてを
むく人けりあぞてしく

天保九年戊戌新春新板目録

金毘羅船利生纜　第九篇八冊　曲亭馬琴作　歌川國芳画

新編金瓶梅　第五篇八冊　第六篇八冊　曲亭馬琴作　歌川國貞画

風俗伊勢物語　第六篇四冊　第七篇四冊　東里山人作　五雲亭貞秀画

繪本三國志　初篇ゟ十篇迄既ニ出来　十一篇新刻　十返舎一九作　歌川國芳画

褄模様比翼紫　全六冊　墨春亭梅麿作　歌川芳重画

小菊半兵衛　菊重艶揚褄　全四冊　式亭小三馬作　五雲亭貞秀画

お半長右门　昔模様娘評判記　全六冊　山東庵京山作　歌川國貞画

おしろい 美艶仙女香 一包四十八銅
くろあぶら 黒油美玄香
京ばし南てんま丁三丁目 坂本氏製

販次所
地本問屋 甘泉堂
江戸芝神明前三嶋町
和泉屋市兵衛版